
あおのクラウドしろのスカイ

甘味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あおのクラウドしろのスカイ

【Nコード】

N7614F

【作者名】

甘味

【あらすじ】

少女の声に誘われて、体力も勉強も特に優れているわけでもないごく普通？の高校生が、異世界と世界を救おうと戦う冒険ファンタジー！

プロローグ

「……祐樹さん……祐樹さん……！」

深い漆黒の中、少女の声が聞こえる。

脳に直接響くような透き通った声で俺の名を呼んでいる。

「こっちが大変なんです……！早く気付いてください……！祐樹さん……！！」

大変？気付く？こっちとは何処のことだ？

声は聞こえども何を言っているのか全く理解できない。

「必要なのです……！あなたの力が……！このままでは……世界が……未来が……！」

世界？未来？

益々訳が分からなくなっていく。

どういう意味なのか説明してもらいたいところだったが、何故かそれは言葉として出なかった。

「今なら間に合うのです……！だから……祐樹さん……！早く気付いてください……！」

何を気付けば良いのかわからないものをどっしると言っただけ？何に間に合う？何をすればいい？

「このままでは……貴方の世界にも闇が……！」

「・・・一度闇が世界に混じれば・・・取り返しのつかないことに・・・」

この世界に闇が？

どういう意味なんだ？何を言っているんだ？

説明してくれ・・・訳が分からない・・・。

「だから早く・・・早く・・・」

「

段々と力を失い消えていく少女の声と共に、辺りは光に包まれた。

プロローグ（後書き）

こんにちわ。甘味です。

現在パラベル！を連載中ではありますが、

パラベル！は、短編小説故すぐ終わってしまうので、

今度は長編小説を書こうと考え生まれたのが、

『あおのクラウドしろのスカイ』通称『あおしろ』
であります。

どうか、『パラベル！』『あおしろ』共に

よろしくお願いいたします。

感想、意見などお待ちしております。

第1話：夢と日常（1）

「夢か……。」

この頃似たような夢をよく見ている。

どれも内容は、少女が俺に助けを求めているというもので、まったくと言ってよいほど進展がない。

毎回意味が分からず質問しようと思うのだが、声は出ない仕様になっている。

……まあ、夢だからなのだろうが。

「祐樹ー！遅刻するわよー！」

母の声。

時計は……8時20分を回っている。……ふむ……。落ち着いている場合ではないことは確かだ。

俺は急いで学校の鞆を持つ。

前日に準備をしておくというのは、こういう時に良いものだ。

そして急いで寝起きでフラフラとした足を叩きながら階段を降りた。母が当然のように玄関の前で食パンの乗った皿を持って立っ
てくれる。

手馴れたものだ。……普通は慣れてはいけないのだろうか。

俺は母の持つ皿からパンを奪い取り玄関のドアを開ける、

「いつてらっしやい」

そう言つて手を振る母に軽く手を振り返し、走り出す。

何もかもいつも通りだ。

俺の家から学校へは・・・モグモグ・・・走つて5分程度。

学校の門が閉まるのは・・・モグ・・・8時半・・・モグモグ・・・
今日も・・・モグ・・・間に合いそうモグ。

バツシーン！！

後ろから急に攻撃を受けた。

まだ半分程度しか口にしていないパンは押された勢いで大きく飛んでいった。

後ろをキツと睨み振り向くと、後ろにいたのは家が近所で幼馴染の木城咲だった。

一応同じ学校だが、咲は学校内で上位の学力を持つ者が入ることができる特別強化クラスなるものに所属している。

でも、特強クラスは基本的に自分の頭の良さを誇示する嫌味連中の巣窟とされているが、

咲は殆どそういうところは無。そこが咲の良いところ。

しかし、こういう行動は聊か勘弁してほしいところだ。

「おっはよー！」

俺の睨みを効かせた視線に気付いた咲は、俺と地面に落ちたパンを

見比べるような仕草をして言った。

「あ……あゝ、ごめんね?」

「ごめんでパンが帰ってくるならパン屋はいらない。」

「何その例え……パンくらい後で買ってあげるって!!」

「本当に?」

「ホントホント!昼休みに食堂一緒に行つてあげるから!」

グウウウ……

俺の腹の音がひどく大きく響いた。腹は正直なものだな。

「ヒルマデモタナイ。タオレル。」

「い、一時限目終わつたら行こ!ほらっ!遅刻しちゃうよ!」

そう言つて咲は逃げるように走つていった。

確かに時間が危ないかもしれない。

俺は鳴り続けるお腹を抑えながら全力で学校へと向かった。

第2話・夢と日常(2)

「今は昔・・・・・・・・清水に・・・・・・・・御堂の・・・・・・・・」

キュルル〜・・・

国語教師の優しく小さな声が嬉しくてたまらない。

もし、今日の一時限目が世界史であったならば、

普段でも耳障りな程でかい奴の声。恐らく俺の腹は大爆発を起こしていたことだろう。

今度から古文の授業は真面目に聞こうと心に誓った。

「じゃあこの現代語訳を読んでください。

えーと・・・祐樹君どうぞ。」

この状態で声を出せと？

声と同時にこの教室に響き渡るものは何だ？

「今となつては・・・・・・・・昔のこと・・・・・・・・だが・・・・・・・・」

「立って読んで下さい。」

さらに立てと？

さっきの発言は取り消し。国語教師を俺の中の『教師ブラックリスト』に載せませす。

「早くしてください。」

ああ・・・分かってるよ・・・言えばいいんだろ？
余裕だよこんなもの。

「今となつては・キュルル・・・昔のことだが・キュルツ！・いつ・・・いつ・・・」

国語教師は、腹の音が鳴る度に体をくねらせる俺に奇異な物を見るような視線を向けたあと、
ふう・・・と深いため息をつくと、

「・・・もう良いです。高橋君、続きを。」

「はい、いつの頃のことであつたのだろうか、清水に参詣にきた女が幼児を抱いて御堂の前の谷をのぞいて立っていたが・・・」

た、助かった・・・。

その後何事も無く授業は進行していった。
授業が進むにつれ、腹の音は治まっていった。ずっと食べずにいると逆にお腹が一杯になってくるアレだ。

今度は国語教師の優しい声の子守歌となり、俺を眠気が襲った。

何か・・・何か楽しいことを思い浮かべれば何とかかなるかもしれない・・・。

そう思った俺は、何か思い出そうと頭を捻る。

すると思ひ出したのは少女の声、特に楽しいことと言つわけでは無いが、

何故かふと浮かんだ。一度思い出すと耳から離れない、そんな声だ

った。

少女は何を言いたかったのか。
夢と言うものはその人自身の記憶やら、願望やらが誇張されて生まれるらしい、

俺は当然特に世界がどうなどと言う話に関わった覚えもない、世界を救いたいなどと言う子供らしい願望を持っていた覚えもない。

自分が意識していない中での願望と言うものもあるらしいが、どういふことなのだろうか。

似たような夢を見続けるなんて、よっぽど強い願望からでなければ有り得ないだろう。

強い願望・・・少女・・・ロリコン・・・？ロリか？ロリな少女に助けを求められるとか言う設定を欲してるのか？心の底で求めているのか？

いやいやいや、さすがにそれは無い！無い！無い！あったとしても俺の理性が許さない！

「祐樹くん？大丈夫ですか？」

「いや！・・・」

「□？」

国語教師がとびきりの笑顔で返す。こういうときは確実に怒っている。

「□・・・ロシアについて考えてました・・・。」

教室の空気が一気に緩み、クスクスと笑い声が聞こえた。
あ・・・危ない・・・。授業中にロリがどうだとか言えば、即ぶん殴られる。

国語教師は一見若くて美人な生徒間での人気ナンバー1だとか言われているが、

実は様々な武術を会得していて、不良も彼女には従わざるを得ないとか。

顔を殴られようものなら、一撃で頬の骨が痛々しい音を放つ・・・
噂だ。

「今は世界史の時間ではないですからね？」

国語教師が普段の顔に戻る。

助かったようだ。

キンコーンカーンコーン・・・

「では、祐樹君、次の授業で調子に乗った態度を取ったら、その場で・・・あと、2人つきりで補習ですからね？」

おおー！うらやましい！と、男子共の声。

じゃあ変わってくれ。頼むから。

「は、はい・・・。」

「では、次回までに次のところの全文訳をしておいてくださいね？」

「

そういつて国語教師は教室を出て行った。

「・・・で、ロリコンがどうしたんだ？」

そう聞いてきたのは、俺の前の席にいる友達の小林浩太。

ルックスもよく、運動もできるし面白いやつ。頭も超強並みだが、嫌味連中の巣窟に仲間入りするのが嫌で通常の下位クラスに来たらしい。

当然女にもモテる。・・・俺とは正反対の人間だ。だからこそ仲が良いのかもしれないが。

「何のことだ？」

「いや、お前さっきからロリがどうか、少女がどうか言ってた
だろ？」

どうやらいつの間にか声を出していたらしい。恥ずかし過ぎる。

「え・・・いや・・・」

俺は、この頃見ている少女の夢のことを浩太に話した。

「ふん・・・ふん・・・」

浩太の体が震える。

「ぶわっはっは！！！少女？何だそれ？！ファンタジーかよ？！お

前ゲームのしすぎなんじゃねえ?!はっは・・・やばい・・・超笑える・・・ひっひ・・・」

・・・まあ、予想してたけど、こっこういう反応は。

「しかも何日も連続ってお前・・・ひひ・・・どれだけ執着あるんだよ・・・くくく・・・」

「笑いすぎ。」

そういつて俺は浩太の頭を叩いた。

「・・・祐樹くん?」

女の声、同じクラスの人か、名前は知らないが。

「あの、咲さんが呼んでるよ?」

教室のドアのほうを見ると、咲が俺のほうを向いて手を振っている。

「また彼女さんですかー?ったく、お熱いねえ!。」

浩太が頭をさすりながら冷やかす。

「違っつーの。」

俺は咲のいるドアへ向かった。

後ろで浩太がさつき話しかけてきた女子に「ところでアイツさあ、
このところ夢で・・・ひひ・・・」
・・・無視することにした。

「咲、どうした？」

「どうしたって!?!一緒に食堂行ってくつて言ったじゃん?!」

「あ・・・ああ、そうだった。」

「まったく・・・さ、行こ？」

「いや、さつき食べな過ぎで満腹モードに突入したんだ。」

「何それ!まったく・・・超強の超忙しい私がわざわざ下位クラス
風情のために会いに来てあげたというのに貴方は・・・」

「や、じゃあ、いいよ。」

「突っ込んでよ?!普通に嫌味な奴みたいじゃん!」

「うん、じゃあ、行こうか。どうせ次は体育だし。」

「サボる気?!いや、まあ、じゃあ、行こうか。」

2人で食堂に来た。

まったく・・・パンくらい正直どうでもいいんだがなあ。超忙しい
つて、嘘じゃない癖に・・・。

「何食べよっか？」

「え?お前も食べるの?」

「あ、ああ、うん、まあ・・・。」

「へえ、じゃあ俺はカレーでいいよ。」

「え、そんなんでいいの？一番安いやつじゃん。」

「まあ、食パンよりは得をしている。」

「じゃあ、私もカレーで、オバサン！カレー2つよろしく！」

「はいよ。」

一時限目から早くも食堂が開いているのは、空腹では勉強の効率も上がらないと、学長が決めたこと。だから、食堂は登校時刻から下校時刻まで常に開いている。

「はい、カレー。」

「おっ！早いねえ〜！朝から作り置きか〜！」

咲が軽く嫌味を言う。

オバサンは気付かずに笑っているが。

テーブルの上にカレーを乗せる。

「いったただつきまーす！」

「いただきます。」

モグ・・・うん・・・作り置きなりの・・・モグ・・・不味さだな・・・

「おーいしい！ー！」

そしてコイツはどういう味覚をしているんだ・・・。

「ところで祐樹ー？」

「何？」

「最近さあ・・・変な夢とか見てない？」

「え？」

「いや私、最近変な夢見てるの・・・。」

「それって・・・少女の声が聞こえたりって感じ？」

「何それ？いや、よく分からないけど暗闇の中で男の人の声が聞こえて、只管私の名前を呼んでるの。誰なの？って聞こうと思ったけど、声が出なくて・・・。」

似てる・・・俺の夢に物凄く似ている。

ただ、少女と男と言う違い。これは偶然なのか？

「俺もそれと同じような夢を見てるんだ。最近。」

「本当に？何なんだろうねえ・・・。」

「俺もそれを聞きたいよ・・・。」

「うーん・・・」

困惑した顔をしながら咲はドンドンと食べ進める。
と言っかもう食べ終わってる。早すぎるだろう。

「ふー、ごちそうさまー！おいしかったー！また今度この事について話そうよ！私は何かと忙しいものでねえ〜」

ニヤニヤと笑いながら咲は走り去っていった。

騒がしい奴……。

でも、より訳が分からなくなってきた。

誰かと同じ夢を見るってめったにあることじゃないはず。

しかもそれがここ最近続いているとなると、現実には有り得ないだろう。

有り得るとすればそれは例えば……何かで俺の夢と咲の夢が繋がってるのか……？

それは尚更有り得ない話だとは思うが……。

キンコンカンコン……

む、こんな時間か。

「さて……俺も授業に参加するか……。」

ひどくモヤモヤが心の中で膨張する中、

俺は体育館の方へと足を運んだ。

第3話：運命と不思議な絵

一通り授業も終え、

週1しか活動がない美術部所属の俺は学校からの帰り道だった。

「・・・？」

道に紙が落ちている。

クルミシア美術館、の入館証・・・？

クルミシア美術館は・・・確か先月この近くで来たんだったな。美術部として、一応そういう情報は耳に入ってくる。

家に帰ってもやることがあるわけではない。

これはラッキーと捕らえて行ってみるか。

俺の住んでいるところは、然程都会と呼べる所ではない。

故に、そのクルミシア美術館は非常に目立つ建物であった。

その場だけヨーロッパにいるような古き良きな空気を感じさせる。

外見はわざと古めかしくしてあるが、中は普通に近代的。

入館証は、専用のリーダーに通すことでドアを開くことができる。

置いてある作品も近くにあるボタンを押すことで自動的に作品の説明をしたりで、よくある美術館と然程変わらない。

一通り見て回ると、一際異彩を放っている絵があった。

周りの綺麗な彫刻とも、細かく描かれた風景画とも違う。

ただ大雑把に空を大きなキャンバスに描いた絵。

それも、空を白で描き、雲を青で描くと言う奇抜さ。こつこつというものを主とした個展に置くならばまだしも、普通に美術館に置くには余りにも粗雑で、余りにも奇抜だった。奇抜だからこそなのか、その大きな絵には引き込まれるような印象を受けた。

よく見ると大きな絵のど真ん中に、小さな黒点が見える。その黒点に何の意味があるのか、俺にはわからなかった。

そつだ、この絵の説明を聞けばよいのだと、ボタンを押す。

「この絵は描かれた年代、作者共に不明。題名として『世界のすべて』と呼ばれています。題名をつけたのは作者と考えられているが、実際のところは分かっていない。」

・・・絵に関する説明が全くない。

そつだ、この絵を写真に撮っておこう。と、俺は携帯を取り出した。ここは特にカメラ撮影は禁止になっていなかったはず。

カシャッ！

撮った写真を一度見る。

・・・気のせい・・・だろうが、黒点が少し大きくなっている気がする。

いや、ほんの少し、恐らく気のせいなのだろうが。

「・・・と・・・た・・・。」

「え？」

どこからか、非常に小さく少女の音が聞こえた気がした。
周りを見渡すが、誰もいない。・・・気のせいか・・・？

その後俺は再び彼方此方見て周り、
美術館を後にした。

第4話：絵の世界・現実の世界

美術館を後にした俺は、やっぱり特に外ですること無いです、家に帰った。

とりあえず、さっき撮った携帯の写真を印刷しておこうか。

俺の携帯は32MBのMSDしか入っていない分、少しの容量も無駄にはしたくないからだ。

いや、もっと容量が大きいものが欲しいのだが、

電器屋に行ってもいつの間にか違うものに気をとられ、いつの間にか違うものを買って帰って来てしまう。

ノートに字を書き間違えた時に、消しゴムで消したあとにまた同じ間違えた字を書いてしまうアレと同じだ。

携帯を手に取り、

専用の印刷機に画像を転送と……。

ピピッ！ウーン……

ガッシャン……ガッシャン……

バカでかい音と共にA4サイズの専用紙に空が描かれていく。

ウーン……シュー……

お、できた……?!

黒点がさつきとは比べ物にならないほど大きくなっている。

さすがに見間違いのレベルではない。

「ふわあーーーーー!!!!!!」

声が聞こえる。どこから？

部屋には俺一人。

じゃあ誰が声を？

声は・・・写真から聞こえる。

黒点がどんどん大きく・・・

声もどんどん大きく聞こえてくる。

黒点が人の形に見えて来た・・・

何だ？何が起きている？俺は疲れているのか？

見て取れるほどまで近づいてきている。少女の姿だ。

それはまるで俺に向かって落ちてきているかのようだ。

「ああああーーーーー!!!!!!あふん!!!!!!」

うわ!!!写真に衝撃が加わる。

もう絵には少女しか描かれていない。

写真の中の少女がこちらに気付く。

・・・夢を見ているのか？写真が動き出すなんて・・・

少女が手を伸ばしてきた。

その手は絵を抜け出し俺の顔に・・・。

手は俺の顔を抓る。

「夢なんかじゃないですよ？」

話しかけてきた。

頭が痛くなってきた……。

「まったく……いつになったら気付いてくれるのかずっと待っていたのですよ！」

その声は夢の少女とまったく同じ。

「……お前は……何だ？」

「何だって……言っておきましたよね？あなたの夢で。」

夢？

「ってことは何か？お前は夢に出てたそれか？」

「それです。」

「そうか……すまん。俺、少し病院行ってくる。」

「だから夢とかじゃないんですってば！」

少女が怒って言う。

「と、とにかく大変なんです！すぐに来てください！」

「どににっ。」

「こっちの世界にです……！」

「こっちって……どっちだよ。」

「こつちです。」
そういつて少女は俺の腕を掴み、写真のほうに引っ張る。俺の腕は写真にぶつかることなく、絵に引き込まれた。

「え？」

少女は俺の腕をグイグイ引っ張る。もちろん俺の体はA4サイズの写真には入りきらない。

「痛い痛い！！無理！」

「あ……この入り口では小さいですね。
コレの大きな……元の絵はどこですか？」

「元の絵は、クルミシア美術館に……」

「じゃあ、そこに向かってください！全力ダッシュをお願いしますよ！こうしてる間にもこつちは大変の大変なのです！」

「え、そんなこと言われても」

「早く！！！！！」

少女が鬼気迫る顔で言う。

「はいっ！」

勢いで返事をしてしまった。

俺は仕方なく出かける準備をし、再び美術館に向かった。

「700円になります。」

そして俺は草むらに直撃した。

「いって〜……………。ノバフツ!!!!!!」

少女がのしかかっってきた。

少女は俺の顔にズイツと近づき言う。

「やっと会えましたね!!!!勇者様!!!!」

勇者……と言うとアレか、魔王を倒したりするアレか？

「俺が？」

少女はコクコクと頷く。

「勇者？」

少女は再び頷く。

「俺が勇者?!?!?!」

「はい!!」

少女は笑顔で言う。

「いやいや、それは無いだろ?!せいぜい俺はアレだぞ?村人1だ
る?!!!」

「何ですかそれ?私とコンタクトを取れる唯一のあっちの世界の住
人なのですよ?祐樹さんは。」
あっち……ってのはさっきまで俺がいたところの話か。

「コホン・・・そういえば自己紹介遅れました。
私は、ヴェルイス国の姫、シトリアと申します。
今回勇者様にご連絡させていただいたのも、こちら側に来るように
手はずを整えたのもすべて私です。」

「姫？お前が？」

「はい！」

「姫つてのは、もつと煌びやかな・・・ごう・・・」
シトリアは実際姫と言うより町娘と言った感じだった。まあ、RP
Gとかのイメージだが。

バシッ！シトリアが俺の頬を軽く叩く。禁句だったのか。

「ってか、すまない、そろそろ降りてくれないか？」

正直ちょっと重い。

「ああ、すみません！あまりに嬉しかったもので！」

ドーーーーーン！……！

辺りに轟音が響く。

「はっ、こんなことしている場合ではないのです。
今の状況を説明しますね！」

そういつてシトリアは説明を始めた。

第5話：自分の力

先程まで笑顔だったシトリアは、真面目な顔になり、説明しだした。

「時間が無いので、今必要な説明だけしますね。

今この世界は、『邪族』によって支配を受けようとしているのです。『邪族』は、元々この世界にいた種族ではなく、あなたのいた世界の人間によって作られた種族なのです。

すべては、この世界及びあなたの世界を征服するために。」

「征服?! 誰がそんなことを?」

「本名は分かりませんが、そいつは自分のことを世界の主と呼んでいます。」

とりあえず、今街が襲われているのです。このままでは街が邪族の支配下に置かれてしまいます!」

「襲われてるって・・・邪族って、名前からして強いんだろ?」

「はい、邪族と戦えるのは世界でも極々一部の人間のみ。

その一部の人間のことを私たちは、超越する者、通称エクサーと呼んでいます。」

エクサーの人数には限りがある故、邪族に襲われてもすべての地域を助けることはできないのです。私もエクサーの端くれですが、一度に多くの邪族を滅するほどの

力は持ち合わせていないのです・・・。」

「・・・で、俺は具体的にどうすればいいんだ?」

「祐樹さんにも戦ってもらいます。
祐樹さんもエクサーなのです。そちらの世界ではエクサーの力は、
発揮されないのです、自分の力には自覚できていないでしょうが、
こちらの世界ではあなたのエクサーとしての力はトップレベル。
この世界を救えるのは貴方だけなのです！
とりあえず、あそこに見える街を早く救わなければ、
行きましょう！祐樹さん！」

シトリアが俺の腕を引っ張っていく。

街に近づくと、邪族の姿が見て取れた。

邪族の姿は、まさに俺の世界での悪魔の想像図がそのまま飛び出してきたような
容姿だった。

街の中に入ると、

邪族と鎧を着た何者かが交戦中だった。明らかに邪族が優性、鎧を
着たやつは明らかに劣勢だった。

「リーター!!」
シトリアが叫ぶ。

「ちょうどいい祐樹さん、いつちよお願いします!!」

「お願いしますって・・・あんな怖そうなやつにどうやって戦えっ
て言っただ？」

「え？あ、ああ！コレを・・・。」

シトリアがポケットから取り出し、俺に渡したのは、
小さな紙と・・・ペン。

「は？」

「何か武器を描いてください！」

「いやいや、え？」

「描いてください！」

「いや」「描け！・・・！」

「・・・はい・・・。」

どういう意味だよ・・・。

俺は紙に手早く適当な剣を書く、RPGでよく見る最初の剣のような。

「描けましたね！じゃあ、それを持ってイメージを思い浮かべてください。」

その剣の立体的な姿を！」

む・・・こうか・・・？

紙は光を放ち大きく姿を変えた。俺の書いたとおりの剣に。うん、
すごく弱そうだ。

重さは紙のときよりはよっぽど重くなり、見た目ほどではないが、
しっかりと質感を持っていた。

「ほら！早く戦って！」

そんなこと言われても・・・

「キシヤアアアア！！！！！」

先ほどまでリータと交戦していた邪族が俺に向かって突進してきた。

え、嘘、やばい、死ぬほど怖い。

俺は剣を前方にかざし、ガードの構えをした。

ドンッ！！！！

邪族がぶつかるが、思ったよりの衝撃はない。いや、思ったよりだから、少しでも気を抜けば吹っ飛ばされそうだ。

俺は剣を振り払い、邪族を跳ね飛ばす。俺にこんなに力あったか？

跳ね飛ばし倒れこんでいる邪族に俺は走りこみ、大きく振り上げ・・・斬りつけた。

まるで紙を切るような感覚。

邪族は、あっけなく真っ二つに割れた。すると剣は再び光、消えた。

「・・・すごい・・・。」

後ろのほうでシトリアがポツリと言う。俺も何が何だか分からないのだが。

「すごいです！！さすが勇者様！！！」

鎧を着た人が言う。なぜか聞き覚えのある女の声だった。

「初めまして……ではないですね。私はリータと申します。こんにちは、祐樹君。」

顔の部分につけた鎧を脱ぎながら女は言った。

コイツは……国語……教師？

「アレ？何で混乱してるんですか？シトリア姫からまだ何も聞いていないのですか？」

「いや、全然まったく。」

いつの間にか近くによってきていたシトリアが言う。

「リータは、あなたを呼び寄せるために使いとしてそちらの世界に送ったのです。」

まあ、結局使命を忘れて学校生活を謳歌してくれちゃったんですけどね。」

そういつてシトリアはリータを睨む。

シトリアは続ける。

「しかし、リータ！何のざまですかアレは！あの程度の低級邪族に手古摺るだなんて！！」

「シトリア姫……実は、武器紙のほとんどを奴等に奪われてしまっています……」

武器なしでは、いくら私でも邪族は……。」

「何ですって?!?!」

「あのー・・・驚いているところ悪いんだが、武器紙って何だ？」

「武器紙とは、先ほど祐樹さんが絵を描いた紙のことです。エクサーにのみ使うことができ、邪族に対抗する唯一の武器なのです。」

「アレは特別な瘴気を含んだ木から作られたもので、もうこの世界には存在していないのです・・・。」

「それを奪われたということは・・・非常にピンチなのです。」

「しかし、シトリア姫、奪われたのはついさっきのことですので、急いで奴等の支部に乗りこめば何とかなるやもしれません。」

「うん、そうね。祐樹さん、行きましょう。」

「私も一緒に参ります!」

「・・・いや、行くなってどこへ?」

俺はものすごく置いていかれてる気がした。

「世界の主によって作られた、邪族構成の組織『クラッシュ』のクレパ街・・・まあ、この街の支部です。」

それは、この街を少し離れたパラの森の中にあります。

これに乗っていきましょう。」

そういつてシトリアは武器紙を取り出し、絵を書き出した。

すばやく絵を描き、目をつぶると、紙はいかにも速そうな車へと姿

を変えた。

「さ、乗ってください！リータ。運転を頼むわよ。」

「はい！」

車は物凄い爆音を放ちながら、物凄いスピードで走り出した。

第6話・強さの張りぼて

F1並みのスピードで走り続ける車の中、

「武器紙って、こういう風に武器以外のものも作れるのか？」

「え？コレ、武器ですよ？」

と、リータは答える。

「いや、どこが？」

するとシトリアは前の座席にある小さなボタンを押す。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒューーン……

あからさまにチャージ音が聞こえるのですが。

ドーーーーーン!!!!!!

普通ならライトが出ているはずのところから熱光線が発射され、前方にあった岩に直撃。次の瞬間岩はなくなっていた。

「ほらね」

そういつてシトリアは笑った。

……いや、武器ってどうか……兵器？

「さて、もうすぐ着きますよー！」

気付けば森の中に入っていた。奥には大きな建物が見える。

「おい、そろそろ止まったほうがいいんじゃないか？
見張りとか、いるもんだろ。」

RPGでは大抵いるしね。

するとリータは俺のほうを向いて満面の笑みで言った。

「止め方・・・わかんない。」

「ええええええ！?!何で?!」

「いや、さっきから探してるんだけどブレーキが無くて・・・。」

「あ、ああ、コレ・・・そういえば・・・特攻・・・。」

シトリアがボソリと言った。

特攻ってどういうことだ？

あの、敵艦に突撃とかか。ああ、なるほど・・・。
車の速さは、体感的には200キロ近くある。

これでブレーキなしって・・・死に行くようなものじゃないか？
みるみるうちに建物は近づくと、当然の如く見張りの邪族が何匹か気
付いて突進してきた。

ドガッ!!

・・・邪族を思いつきり跳ね飛ばした。

「・・・こうなったら全員道連れです。」

リータが落ち着いた口調で言う。

道連れから俺を除いて欲しいんだが。

ドガツバキッ!!ドントッ!!キイイ!!ドンドカ!!!!バ
ントッ!!!!

車は邪族の黒っぽい血でまみれていた。

気持ち悪い・・・。

しかし、心なしか・・・と言うより、スピードが相当下がった気がする。

これはそろそろ「あああああ!!!!!!」ドガン!!!!プシュー・
・・・。

リータとシトリアの叫びと共に車は建物に激突し、停止した。
車は思ったより全然頑丈だったようだ。

「・・・計算通りね。」

リータが言う。いや、嘘つくな。

「さて、行きましようか。」

落ち着いた口調を言ったシトリアの顔は、冷や汗でぐっしりと濡
れていた。

運よく見張りをすべて片付けることができているので、すんなりと

建物に入ることができた。

「……ようやく来ましたか。やはり私の占いは百発百中のようだ・
・。。。」
入ってすぐの広いホールの奥から男の声。

「お、お前は!?!」

リータとシトリアが叫ぶ。

……俺は何だかまた置いていかれる気がした。

コツ、コツ、と靴音を立てながら近づいてきた男は、
黒いローブを着ていて、光る水晶玉を持っていた。

「こいつは誰だ?」

シトリアに聞く。

「彼は、『クラシユ』の幹部、クレパ街支部長の………ジヨ
ン?でしたっけ?」

「違いますよ、姫。バケットです。」

「どっちも違う!?!?!」

すかさず黒ローブの男は突っ込みを入れた。本当に悪い奴か?

「俺の名は、占術のシャミューシャ。まったく・・・何度もクレパを攻めてやっているというのに、俺の名が分からののか？
まったく余裕だな！シトリア姫さんよお！」

「何?!なら・・・低級エクサーでクレパを5度も守りきれているのは貴方の不的確な指示のお陰だったのですか?!
部下からよくお話は聞いております。」

「あん?!なめてんのか?!言っとくけど今日の俺は違っぜ?
何たってコレがあるんだからよお!!!」

段々と口が悪くなってきたシャミューシャは、ローブの中から武器紙を取り出した。

するとシトリアは小声で話しかけてきた。

「・・・祐樹さん・・・まずいです・・・。
武器紙で作った武器は、邪族には効力が絶大ですが、生身の人間・・・
・と言うよりエクサーである幹部には、
その武器自体の強さと武器を使う戦士の強さのみが必要になってしまつのです・・・!」

と言うことは、さっき邪族を簡単に倒せたのは武器のお陰、
普通に、幹部ってことは・・・中ボス。俺なんかがいきなり勝てる
わけないんじゃないか？

「祐樹さん・・・コレを・・・。」

そういつてシトリアは武器紙を俺に渡した。

この、俺依存の方針は絶対に間違っている。

今度は・・・もつと強く・・・もつ、ラスボス前の剣みたいなものを・・・!!!

ここはもう美術部の意地だ。こんなところで意地を出してどうするのかも分からないが。

描き終えた俺は、その剣の立体的な姿を想像した。

紙は光を放ち、大きな剣の形へと姿を変えた。

俺の覚えてる限りで、最も強い剣。その名も、聖剣エクスカリバー。それは神々しい光を放ち、手に取るだけで勇気が出てきた。

「・・・え？」

シャミューシャが驚いた顔でこちらを見る。

シャミューシャが武器紙を使って作り出した武器は、・・・俺の最初に描いた剣だった。

これと同じセンスだったことに異常に虫唾が走る。

読めたぞ・・・こいつは、アレだな？中ボスでも最低ランク・・・途中に出てきたモンスターのほうが強かったりするアレか？

「死ねえええ〜!!!シャミューシャああ!!!!!!」

俺は少なからず調子に乗った。

ガキイン!!!!!!

「・・・何それ？」

シャミューシャは非常に弱そうな剣で俺の一撃を受け止めた。

俺は忘れていた。まだRPGで言うスライムしか倒していないことを。

俺は忘れていた。俺はあくまで美術部で・・・体力も何も持っていないことを。

俺は忘れていた。コレがゲームではなく、命を賭けたやり取りだと言っことを

ドカツ!!!

次の瞬間、俺は意識を失っていた。

第7話：戦いの決意

・・・目が覚める・・・。

目を開けるが周りには誰もいない。

俺は小さな部屋のベットに眠っていた。

そうか、俺はシャミューシャにやられて・・・

ガチャッ！

ドアを開ける音と共に、シトリアが入ってきた。

「祐樹さん・・・起きましたか・・・良かったです・・・。」

「どうなっただんだ？」

「シャミューシャにやられて、

リータと私で祐樹さんを連れて逃げ帰ってきたのです・・・。」

「な・・・。」

「じゃあ・・・。」

シトリアは震える声で言った。

「え？」

「じゃあ祐樹さんが勝ってくれば良かったじゃないですか！...！
私は戦いたくても戦っちゃいけないんです！！」

人々のために戦いたいのになにに戦っちゃいけないんです！！私が死んだら国は国として終わりだから！！！！」

シトリアは泣きながら続けて言った。

「貴方のせいです！！クレパは武器紙を持つシャミューシャの手に落ちました……。」

何が勇者？！！何がエクサー？！！何の役にも立たない！！」

クレパが……？

シトリアは散々泣いて、その後落ち着きを取り戻し言った。

「……すみません……。」

そりゃそうですね……。急につれてこられて……。死ぬような思いまでした祐樹さんにそんなこと言っても……。」

「俺……何も考えてなかった。俺の戦いに……。どれだけ大きな物がかかっているのか……。」
シトリア……。クレパに、行っていいか？」

自分で始末をつけないといけない。そんな気がしたから。

「ダメです。」

シトリアは強い口調で返した。

「なぜ？」

「祐樹さんが今行っても……。今度こそ……。殺されてしまいます。」

「。。。」

シトリアは震える声で言った。

「。。確かに。。その通りなのかもしれないけど。。何も。。しないわけにはいかないよな？」

「。。世界のために死ぬってのも乙なものじゃないか？」

「え。。本気で言ってるんですか？そちらの世界で言うゲームじゃないんですよ？」

「もう分かってる。でも、俺がやらなくてもみんな死ぬんじゃないのか？」

「。。。。。」

「だから俺は行く。自分のけじめは自分でつけなきゃいけないんだよ。」

「でも。。。。。」

「いいよ。俺は一人で行く。姫様を戦わせちゃいけないんだろ？」
そういつて俺は笑った。

「シトリア、武器紙を。」

「。。渡せません。。私も一緒に行きますからね。」

「戦えない姫様守りながら戦うなんて、」

ゲームみたいなことできないぞ?」

「遠くから手助けくらい・・・させてもらいたいですね。言ったか
らには祐樹さんにはとことん付き合いますし、とことん付き合っ
てもらいますからね?」

そういつてシトリアは少し笑った。

「ああ、じゃあ、行くか。姫様。」

「はいっ!」

元の世界では何もやることがなかった。誰かに必要とされることも
なかった。

この世界には俺の力が必要。できることがあるならばそれに答えた
い。

間に合うかどうか、俺は世界を救う決意を固めた。

第8話：力と格好は伴わない

シトリアと共にクレパまでやってきた。

・・・はいものの、どうしたらいいのかわからない。

真っ向から勝負を挑んでも勝てないだろう。

「・・・ここは、暗殺ですね。」

可愛らしい少女の口から出たとは思えない。
が、それしかないのかもしれない。

「暗殺って・・・どうしたらいいんだ？」

「シャミューシャは偉そうに町役場の中にいると聞きます。
今思い出したのですが、そういうえばこんなこともあるつかと・・・
つか、遊び心で、ここの町役場には隠し扉を設置してみたりした
んです。」

ゲームとかではよくありますよね？」

「む・・・確かに。」

「そこから入れば、上手くシャミューシャの後ろ側に回れるはずで
す。」

後ろに回ればこっちのもの。

・・・後は一撃で始末するだけです。」

そうやってシトリアはニヤリと笑った。

「そういえば、街の人っていないくないか？」

「はい、クラシユに特に狙われているクレパは重要保護区として、街の人は首都に避難させているのです。
で、一部エクサーで街自体を守っています。」

「へえ〜・・・」

「あ、あった。アレです。」

シトリアが指差す先にはいかにも町役場と言ったセンスのビルがある。・・・そういえば、こっちの世界の建物って、たまにこっちの世界と同じなんだが。ほとんどヨーロッパなのに。

「あ、公共の機関は遊び心で、
そちらの世界と同じデザインにしたりしてるんですよ？住民からは不評なんですけどね〜・・・浮いてるって。」

そうやってシトリアは苦笑いした。

まあ、確かに。

「そういえば、遊び心って・・・
全部シトリアが建物のこととか決めてるのか？」

「はい、まあ、姫ですから。」

姫ってそんな国事どころか細かいことまでするのか？

「あ、この壁です。・・・え〜っと・・・セイツ!!」

シトリアが壁を蹴飛ばすと、壁は簡単にはずれ、
中に入れるようになった。

「さあ、中に入りましょう!」

・・・カチツ!

ガシャン!!!!

・・・え?

何か踏んだような音と共に、

壁の抜けた部分が閉じられた。

「おお〜、これ、トラップにもなるんだな。」

シャミューシャの声。少し離れたところでシャミューシャは片手に
水晶玉を持ちながら武器紙をまじまじと見つめていた。

「お前らは占いとか信じない派なのか?
行動が全部筒抜けなんだが。」

シトリアが緊張した面持ちで口を開く。

「・・・どうしよう。」

ここは落ち着こう。
俺はシトリアに目配せした。

「ってか、何で幹部とやらのお前が率先して出てくるんだ。」

「常識には捉われないそれが俺のやり方だからだ。」

「それはこっちの世界では遠まわしに非常識と言っ気がする。強い奴は後から出てくるのが定番なんだぞ？」

「・・・ゲームの定番だが。」

「そうなのか？じゃあ、俺は最後に出なきゃだな・・・」

よし、乗ってきてる。

「それに、最後の最後で倒したほうがかっこいいだろ？こんな最初で潰したって何も格好良くないって。」

弱いものいじめみたいなものじゃないか？」

「ふむ・・・まあ確かに・・・。」

バカだ。強いけどバカだこいつ。

「な？分かったら一回自分の持ち場戻ったほうがいいって。」

「ああ・・・そうかもな・・・。」

そういつてシャミューシャは後ろを振り向き歩いていった。

ヒュンヒュンヒュンヒュン……

いつの間にか隣からいなくなっていたシトリアがあからさまなチャージ音を出しながらバカでかい銃を持って近づく。

「いつけー……!!!!」

ドオオオン!!!!!!!!

銃から発射された光線はシャミューシャに直撃……………

うわぁ……狙ったことだが、卑怯だなコレは…………。

「おいおい……何のマネだよ?」

直撃……したと思っていた。

シャミューシャは無傷。

「武器紙って便利だな……何でもできるじゃねえか。」

シャミューシャの周りにはうつすらと光の膜が見えた。

バリアってやつか…………。

「あぁ……!!祐樹さん!!!!!!」

シトリアが俺に残り少ないはずの武器紙を一枚投げる。

いや、戦っても無理なんじゃ…………?

武器紙には既に変わった形の図形が描かれていた。

これに描くのか？線を無視して描く……のはダメだよな。もし、効力が消えたりしたら困る。いや、既に困ってはいるけど。これは……そうだ……アレが描ける。

俺はRPGと言ったら剣だと思っている。

途中に色々試しても何だかんだで剣が一番強いからだ。

でも、それはRPGの話だ。あくまで俺は、剣の修行を積んだ主人公じゃない。

じゃあ……修行を積んだことがある武器を使ってみようか。

俺はその武器を描いてその武器の立体的な姿を思い浮かべた。

こっちの世界でもある……ゲームの世界でも大抵あるが、主人公に使ってもらえることはまずない、あの武器を。

「……どうした？何か出すのかと思ったら、お前、素手で戦うのか？やっと楽しめると思っただのによお？」

「祐樹さん……死にたいんですか……。」

「別にふざけてなんかない。」

俺には自信があった。何たって俺は、あっちの世界でこの小さな武器を使うことに関しては最も長けてるからな。

「はっ……ふざけやがって……。」

シャミューシャはローブから武器紙を取り出そうとする。

……ヒュン!!!

次の瞬間、手に取ったはずの武器紙は消える。

「え……?」

シャミューシャは驚いた顔で自分の手を見る。

「お前が……やったのか……?」

「何がだ?」

ヒュンツ!!! パリンツ!!!

次は水晶玉を壊した。

シャミューシャは急に軽くなった手を再び見つめた。

「すごい……。」

シトリアの声が聞こえる。……すごい?このくらい当然だろ?

次は……

ヒュンッー!!

「な・・・ヒュン!!!」「ちょ・・・ヒュン!!!ヒュン!!!」
「ま・・・ヒュン!!!ヒュン!!!ヒュン!!!ヒュン!!!」

「・・・痛いかな?」

シャミューシャは涙目だった。立場が今、明らかに逆転した。

「お前・・・その玩具で攻撃かよ・・・。」

「玩具?玩具にやられてるお前は何だ?」

「うるせえ・・・玩具使うようなガキになんで俺が負けなきゃいけないんだよ!!!」

シャミューシャが突っ込んできた。

は・・・バカめ。

俺はとどめの一発を込め、シャミューシャに向けて放った。

ヒュン!!!

その一発は、ちょうどシャミューシャの耳元に当たり、爆音を放った。

シャミューシャは一瞬で意識を失い、その場に倒れた。

シトリアが俺のほうに走ってきて言う。

いや、そんな笑いを堪えながら言われても。

「。。。。」

俺はシトリアを置いて町役場を出ることにした。

「ちょっと、祐樹さん!!!! 冗談ですって!!!! かつこよかったです!!!!!!」

シトリアがバカにする笑いではなく、笑顔で言った。

「でも。。。。剣術できるようになりたいな。。。」

勝ったことには勝ったのだが、何となく俺はすっきりしなかった。

第9話：旅立ち（1）

ブンッ！・・・ブンッ！・・・ブンッ！・・・

「で・・・俺は・・・いつまで・・・こうしてれば・・・いい・・・んだ・・・?!」

俺は部屋の中でバカみたいに重い剣で素振りをしていた。

「はい？剣を使えるようになりたいって言ったのは祐樹さんじゃありませんでしたっけ？」

ブンッ！・・・ブンッ！・・・ブンッ！・・・

「いや・・・言ったけどな・・・アレは・・・つぶやき・・・みたいな・・・もの・・・で・・・!」

するとシトリアは耳に手を当て、

「・・・はい？何か言いました？」

「やってられるかー!!!!!!!!」

俺は剣を投げ飛ばした。

「じゃあ、パチンコでもう戦い続けるんですか？ガキ大将ですか？貴方は。」

「意味わかんねーよ・・・。」

「ホント・・・意味分かりませんねえ・・・勇者さまあ・・・。」
真後ろからどす黒い声。

この声は・・・

俺は後ろを振り向こうとすると片手で頭を掴まれた。

「痛い痛い！！！！！」

「私も痛いんですよ？」

俺に飛び切りの笑顔を向けるリータは手に俺の振っていた剣を持っていた。

「え・・・あ、いや、あの・・・。」

「リータ、やめてあげなさい。」

シトリアが言うと、リータはすぐに手を離れた。助かった・・・。

「ってか・・・俺はいつになったら帰れるんだ？」

「一度帰らないと不味いのだが・・・。」

「ああ、ご安心を。」

あちらの時間は止めておきましたから。」

「え？どういうことだ？」

「あの、あちらの世界との入り口を閉じたのです。」

入り口を閉じればこちらの世界とあちらの世界は別世界。別世界となれば、時間軸も異なる・・・

・・・まあ例えて言うなら、2つの歯車があつたとして、2つがくっついていればどちらかが回されている限りそれは同じように回るけど、

2つを離せば2つの運動は同期しない・・・って感じでしょうか。」

「・・・まあ、とりあえず時間は大丈夫なんだな？」

「はい、誰かに入り口をこじ開けられなければ大丈夫です。
まあ、こじ開けられたときは2つの世界の終わりでしょうけどね。」

「・・・？」

俺が不思議そうな顔を見ると、シトリアは続けて話した。

「今、世界の主は力を蓄えているのです。」

その力が完全になれば、入り口は自ずと開かれ、世界の主の力はあちらの世界にも及びます。

後は、ヒーロー不在の怪物アニメ状態ですね。」

・・・考えただけでも恐ろしいな。

つまり、入り口を通ってあの邪族達が俺の世界で大暴れってことだろ・・・。

「これからの当面の予定ですが、
祐樹さんとは、これから世界中の占拠された街の解放、
及び邪族の殲滅・・・最終的には世界の主の撃破・・・」

「ちよ、ちよつと待てよ！」

俺、こんなんだぞ?! それでまたアレよりも強いやつと戦うのか?
！」

「旅先で強くなればよいのです。それに、一人じゃないんですから。
私とリータ・・・が一応います。」

「私がビシバシガシゴシバキボキ鍛えてあげますからね！」

リータが指を鳴らしながら言う。

バキボキがシャレにならないのですが……。

「で、とりあえず今はどうするんだ？」

「とりあえず首都であるリズレバークへ行きましょう。

まず、現在の状況を把握できないと動きようがないので、リズレバークには、馬車で……まあ、1日で着きます。」

「へえ……ってか、武器紙は使わないのか？車に変えれば断然速いだろ？」

「この街にあった武器紙がですね、取り戻したのはいいのですが、シャミューシャが使いまくってしましまして、この街にいるエクサーに分配したらなくなってしまったのです。」

「そうなのか。」

「さて、まあ、とりあえず今日は休んでください。

明日の朝、出発しますので。」

「あ、ああ。分かった。」

「では、良い夢を。おやすみなさい。」

そういって、リータとシトリアは出て行った。

俺は、端に置いてあったベットに寝転んだ。

・・・別にプレッシャーを感じないわけではない。
怖いと思わないわけでもない。

俺が、やらなければならない。俺が強くならなければならない。

俺は明日の旅立ちに備えて目を閉じた。

第10話：旅立ち(2)

「た……すけ……て……。」

暗闇の中、誰かの声が聞こえる。聞き覚えのある声。

「ゆ……うき……。」

しかし、誰だかは分からない。でも、なぜ俺に助けを求める？

「変な……黒い……服……が……私を……
助けて……暗い……怖い……痛い……。」

何が起きてるんだ？

俺は声を出して尋ねたかったがやはり声は出なかった。

もう、このパターンに慣れてしまっそうだ。

「早く……早く……。」

段々と声は遠のき、俺の視界は明るくなった。

「……夢か……。」

何とも気分の悪い夢、

こっちの世界で俺のこと知っているのは、シトリアとリータだけ。
となると……あっちの世界で何かあったのだろうか。

あっちの世界？・・・あっちの世界は、時間が止まってるんだよな？
じゃあ誰が、俺に助けを求めてるんだ？

・・・って、たかが夢でそんなに深く考えても意味ないよな。

「祐樹さん？起きてますか？」

「ああ、起きてるよ。」

「準備をして外に出てきてください。私とリータはもう準備できますので。」

「分かった。」

準備って言ったって、俺はこの世界にはほとんど何も持ってきてないしな。

俺は、引き出しの中にあつた衣服を勝手に取り出して、着替えて外へと向かった。

外では既にリータとシトリアがとんでもなく古い馬で小屋を引つ張るような馬車に乗って待っていた。

姫なんだから、もっと煌びやかな馬車を密かに期待していたのに。

「な、何ですかその目は！別にお金ケチったわけではないですよ！」

俺の視線に気付いたのか、シトリアは必死で弁解した。

「あまり目立つと邪族に狙われてしまうので、その対策なのですよ。」
「
リータがフォローを入れる。
まあ、確かにそうかもしれないな。」

「さあ、早く乗ってください！明日までには着きたいですからね！」
俺は馬車に乗り込んだ、中は思ったよりも綺麗で一安心。
インドア派は埃に弱いからな。いや、俺だけかもしれないが。

馬車がゆっくりと走り出した。

・・・忙しく音を立てる馬車の中。

「それにしても・・・何で祐樹さんはあんなにパチンコの扱いが上手いんですか？」
シトリアが半笑いで聞いてくる。

「あ？ああ、うちの親がな、そういう工場で働いてるんだよ。
んで、試作品だとかもらってたらいつの間にか・・・って感じ。」

「ふ・・・くく・・・高校生にもなってそれで遊んでたんですか・・・？」
シトリアは口を押さえて笑っている。・・・だから言いたくないのに。

「いや、小学校の頃の話だよ。一度取った何やらってやつだ。」

「ふ……ふふ……へえ……。」

……何でコイツはこんなに笑ってるんだ……。

「ところで、リズレバークってどんなところなんだ？」

俺は話を変えた。

シトリアはニコニコとした顔で答える。

「それはいいところなのですよ！！」

今はクレパのような重要保護区の住民を避難させているので少し人が多いですが、町並みも綺麗だし、空気もおいしいし……。」

「へえ……。」

よっぽどいいところなのかと思ったが、リータが少し嫌そうな顔をして言った。

「いや……、流石にあれだけ人がいると、

農村部生まれの私は少しつらいものがありますね……。」

「リータって農村出身なのか？農村と言うとあの……風車が回ってて、主人公が最初に訪れる街みたいな……。」

「はっ……え、あ、いや、そんな気もしたような気のせいだったかな……？」

リータが慌てて答えると、シトリアが説明を加えた。

「リータは農村部出身ながらも、独学で剣術の修行を重ねエクサー達の中でも超エリートな戦士なのです。」

「へえ〜・・・すごいんだな。」

「ま、まあ・・・」

リータは少し頬を赤らめながら言った。

「そ、そんなことよりも姫様、特にやることもないんですし、祐樹さんに色々説明しておきませんか？
できるだけ知ってもらっておいたほうがやりやすいですし。」

「ああ、そうですね。じゃあ、まずはこの地理くらい勉強してもらいましょうか。」

うっ・・・勉強・・・。

「大丈夫です。私はこれでも先生なんですよ？うん。教えるのはうまいつもりです。」

「まあ、校長にお金を手渡しただけですけ「姫、余計なことは言わなくていいです。」

校長・・・あいつ買収されてたのか。

「ま、できるだけ簡単に説明しますよ。まず・・・この地図を見てください。」

リータが取り出したのは・・・世界地図？

「はい、地理に関してはそちらの世界と大体同じなのです。だから、大体地名を置き換える感じで覚えてくれれば・・・」

「へえ……ってことは、今俺がいるここは、日本か。」

「や、違います。早くも違います。早くも脱落です。」
「何からだよ。ってか、何で？」

「ここは、そっちで言うヨーロッパ地方に位置しています。
あと、そちらの世界と少し違う部分があります。
1つは、この世界は全部の地方が橋で繋がれています。
ノリで姫様が作りました。」

ノリって……相当大規模な工事だろそれ。

「あと、決定的な違いとして、縮尺が全然違います。
日本なんて車を本気で飛ばせばで1日で一周できます。」

「へえ……」

「あと、目的地であるリズレバークはオーストラリア大陸の北端付近にあります。

元々はそちらで言うロシアにあったのですが、王様が寒いのはいやだと言ったので……」

何だそのふざけた理由は。

「ってか……縮尺が小さくてもヨーロッパから馬でアフリカまで
一日で……って
無理がないか？」

「いやいや、余裕ですよ。少し外を見てくださいよ。」

「え？」

言われたとおりに端にあつた小窓から外を見る。

・・・見る・・・ってか、見えない。いや、何も見えない。

「飛んでる？」

「はい！」

「何で？」

「それはまあ、この馬は俗に言う、ペガサスって奴ですから。高いんですよ。一日借りるだけでも。」

「ペガサス・・・空想の生き物じゃんか・・・」

そういえば・・・

「何で空が白いんだ？」

「えっと・・・んーっと・・・」

リータが少し困った顔で言う。

「ユーモア？かなっ！」

「いや、それで納得できたらすげえよ。」

「まあ、そこらへんはこちらでも解明途中みたいな。

そちらの世界だって全部が全部の現象説明できないですよね？」

「む・・・まあ、確かに。」

「で、まあ、話の続きです。現在邪族どもに支配されてるところが東アジア地域なんですよね。勿論日本も例外ではなしに・・・と、邪族が絡んできたところで、私たちが眠っている間の宿題です。」

そういつてリータはどこからか本を取り出してきた。

「これはこの国に古くから伝わり、現在も書かれ続けている書の・・・のコピーです。」

これを読めばどうしてこうなったのかも、今がどんな状況なのかも分かるはずですよ。」

そういつてリータは俺に本を渡し、シトリアと共に朝っぱらから眠りに着いた。

さて、じゃあ・・・読んでみるか。

俺は最初のページを開いた。

第11話：ヴェルイス国暦典

俺は渡された本の最初のページを開いた。

日付は・・・メルシニア暦A-51年？ダメだ。分からない。
よく考えたら違う世界なんだもんな。日付の数え方も違うだろう。

「やつほ〜！こんにちはあ！記念すべき777777人目のご主人様
あ〜！！」

あたしの名前は『ヴェルイス国暦典』だよ！
気軽にヴェイって呼んでいいんだからね！！！！」

ヴェルイス・・・ああ、この国の名前だっけ・・・
えーっと・・・どうしよう。女の子の声が聞こえるけど、どこから
突っ込むべきなのか分からない。

「聞いてますう？ご主人様あ〜。」

バタンツ！

俺は思いつきり本を閉じた。

いや、まあ・・・どうだろう。これは・・・どうだろうな？

よし、一度落ち着こうか。

これはただの本、This Normal Bookだ。あくまで
ノーマル。

声が出る本なんて聞いた事ない。あ、ああそうか、あの音声が出る
タイプのやつか？

ノリで内容の説明とかしてくれる便利な奴か？

「ムゴ・・・モゴ・・・ちょ・・・フグ・・・」

「・・・あー、最近の本はすごいわ・・・。」

俺の本を押さえつける手に反発がある。

うん、これはアレだ。右手に力を入れすぎて左手に圧力、そのノリで左手にも力を入れすぎて右手にも・・・あれ？よくわからなくなってきた？

「って・・・いい加減にしろー!!」

本は俺の手を飛ばし、勝手に開いた。

「ひどいですう!!さっきからなんなんですかあ?!落ち着いてください!!!!」

「いや、この状況で落ち着くってどうすればいいんだ?って言うか落ち着くってどういうことを言うのか俺に教えてくれ、教えてくださいお願いします。」

すると本はため息のような音を出してまた話出した。

「今のご主人様のような状態じゃない人のことを落ち着いた人と言いますう。」

「・・・OK、落ち着いた。本は普通喋るものだ。ってか、喋らない本なんてないよな?」

本は泣き声で答える。

「ごめんなさい〜！あたしが悪かったですう〜！！」

「分かればいいんだ。おとなしく閉じろ。」

「いやいやいやいや！！！！だから話を聞いてくださいってばあ！！！！！！」

・・・心なしかウザい・・・。いや、ウザい。何かグイグイ来るな。

「よし、とりあえず名を名乗ってみろ。」

「さつき言っただよ？！・・・えつとですね。私は、ヴェイルス国暦典。ヴェイと呼んでください。ご主人様あ。」

・・・こいつは、ネットオークションで売れば高く売れるんじゃないか？うん、いける。この妹ボイスでご主人様ならコアな人に

「何かいかがわしいこと考えてませんか？」

「・・・いや・・・別に・・・。」

・・・バレたか。

「とりあえず、何でご主人様なんだ？俺はお前を飼った覚えはない。」

「いや、本を一番最初に開いた人がご主人様・・・っていうか、ペットじゃないですよあたしはあ！！」

「・・・15点。」

「突っ込みを採点しないでください！！」

「ま、まあ、とりあえずヴェイ、この世界について話してくれ、5

0字以内で簡潔に頼む。」

「えっと・・・ヴェイルス国ができたのは・・・って、できる訳ないでしょうがぁ!!!」

「・・・87点」

「やったぁ!!!今回は高得点です!!!!・・・ってまたそれですかっ?!

・・・こほん、普通にお話ししますよ?

まず、最初のページから分かりやすいように言うので、真面目に聞いてくださいね!!!」

・・・いや、普通に読ませてはくれないのか。そう思ったが、ヴェイは勝手に話し出した。

「昔、ヴェルイスという青年がいました。

彼は不思議な力を持っていて、絵を描くことで、それを実体化することができたのです。」

・・・武器紙のことか?

「彼はその力で民に家を与えたり、食べ物を与えたりして、自分も含め裕福な暮らしをしていました。」

「え?ちよつと待て、武器紙の話じゃないのか?」

「いえ、とりあえず黙って聞いていてください。」

「・・・あぁ。」

「彼はその力を使い続け、彼の住む街や国・・・全世界はどんどん発達していきました。すべて彼の力で。」

・・・しかし、力はあっても彼は年を取りました。そして彼は最後の作品を描いたのです。その作品とは・・・ここです。」

この世界は彼がそちらの世界で大きな紙に描いた絵なのです。」

世界を描く？信じられない。

「あ、勿論この状態を描いたわけではないです。」

元々は、緑があつて水があつて土があつて・・・そんな簡単な絵だったそうです。」

しかし、彼はそれに加えて描いたのです。人を。」

「人を？」

「はい、生命を持つ人をです。」

彼は普通の人を9人、そしてエクサーを1人描きました。何故9人と1人だったのかは分かりませんが・・・、

エクサーはこの世界に絵を付け足す能力を持つ人なのです。」

成程・・・、だったら全世界を橋でつなぐことだって可能か・・・あれ？そういうことだよな？

「エクサーは何もないところに家を描き、普通の人にも与えました。しかし、エクサーには不思議な縛りがありました。それは、一人一本を一生に一度しか描くことができなと言ふことです。」

だからこそでしょうか、この世界には物が溢れることもなく、ちょうどそちらの世界と変わらない程度の生活ができています。」

「1つ気になるんだが・・・、そのヴェルイスって奴は、何でこの世界を描いたんだ？」

「それは・・・分かっていないのです。

彼がどんな絵を最初に描いたのか、などはすべて彼の日記からの情報であつて、そこに書かれていないことはまったく分からないのです。」

「そうなのか・・・、すまない、続きを頼む。」

「はい、先程この世界は大きな紙に描かれた・・・と言いましたよね？

しかし現在はその紙の殆どは残っていないのです。一部そちらの世界に残っていると聞いていますが。」

じゃあ、あの美術館の空の絵はその絵の一部だったと言つて何が。

「いや、ちょっと待て、絵がないのに何でこの世界はここにあるんだ？」

「・・・それがですね、絵がなくなったことによつて、この世界とそちらの世界が切り離されたのです。

切り離された・・・と言つのがどういふことなのかといつと、世界として独立した時間を持つたと言つことになりますね。

そちらの世界とこちらの世界をつなぐ入り口を閉じるとあちらの間は止まる、と言つのはそういうところからきています。

これはだいたいマズイことなのです。」

「マズイ？どういうことだ？」

「元々そちらの世界の常識から作られたこの世界は、そちらの世界と大体同じだったのです。」

しかし、世界として独立したことで、この世界独自の常識が生まれた。

つまりやりたい放題描きたい放題になってしまったのです。」

「じゃあ・・・ペガサスとかもそういう非常識からの産物と言っているか？」

「いえ、それは元々います。」

「・・・ああそう。」

見事に勘が外れた。

「邪族はその1つです。そして問題はその邪族を描いた人が・・・」

「人が？」

「あなた方の世界の人であると言っています。しかもそれがただの人なら問題ありません。」

しかしそいつはエクサーの才能・・・いや、ヴェルイスの血を引く者だったのです。

血を引く・・・それがどういふことかと言つと、無限に世界に線を加えることができるのです。」

「それって・・・邪族作り放題ってことか？それは相当マズイこと

「じゃ……」

「いえ、彼は既に死んでいます。ですから、邪族は今いるだけです。しかし、邪族は死にません。」

「体が真つ二つになると、粉々になるとそれは再生します。」

「じゃあどうやったら倒せるんだ？」

「それは……邪族の心臓を持つものがいるのです。そいつは……世界の主と言います。」

「そいつの心臓を貫けば邪族は死に絶えるとかどうだとか……。実ははつきりしていません。」

「邪族の心臓……？じゃあ世界の主って何者なんだ？」

「それは、ヴェルイスの血を引く者が死ぬ前に書いた最後の作品……
・
どうやらヴェルイスの人間は死ぬ前に何かやらかすのが好きなようです。」

「……ホントだな。」

「さて、これで現状の説明を終わります。」

「ああ、ありがとう。大体分かってきた気がする。」
するとヴェイは声色を明るくして、

「そうですねー！！良かったですうー！！」

「さっきまでの感じはどうした？」

「あれはお仕事用ですよぉ〜？普段はこっちなんですうー！！」
・・・ ああそう。

「さてー！！！何しましょうかあー！！暇です 暇です」

先程からのギャップのせいで、ウェイがよりウザく感じた俺は、
本を閉じた。

第12話：中間地点

俺はヴェイを押さえつけ近くに置いてあった紐で縛り、部屋の端っこに置いた。

するとリータが一度ううん・・・と唸って起き上がり寝ぼけ声で言った。

「む・・・祐樹さん・・・終わりましたか？」

「ああ、一応大体聞いたはずだ。」

「そうですね、ならよかったです。で、本は？」

「ん・・・ああ、そこに・・・」

そういつて俺は端に縛り付けてあるヴェイを指差す。

「え・・・ええ?! ちょ・・・何てことを!!」

そういつてリータは立ち膝でヴェイに向かって走り、紐を解いた。

「ん・・・どうした？」

「あのですね、この本はプライドが高いことで有名なんですっ! もう何も話してくれないかもですよ?!」

「プライド・・・こいつがか？」

「ぶっはあ〜!! あ〜、苦しかった〜!!」

ありがとございませう〜 えっと、あなたは・・・リータですねえ?」

ヴェイが自力で本を開き言った。

・・・全然プライドを感じないのだが。

「はい。お久しぶりです、0 - 様。」

「あつは！そんな名前で呼ばないでほしいですう〜 ヴェイって呼んでください〜！」

それにそれは一代目様の名前ですよ？しかも私はあくまで二代目様のコピーですからあ？

お久しぶりとか言われても私の中に入ってる情報しかないんですよえ〜。

ほら、例えば、リータが騎士団長に就任するときには緊張のあまりに団員全員の前で「ちょ、ちょっとやめてください！！！」

リータが慌てて止める。

・・・ちょっと気になるのに。

「つつーか、一代目とか二代目ってなんなんだ？」

「はい！ご主人様にはあたしから説明して差し上げますねえ〜？

えっと、私のような本は世界に沢山ばら撒かれていて、その全てが得た情報は一代目様・・・ってか二代目様を中心にデータを共有してるのですう」

「へえ、いやそうじゃなくて一代目とか二代目ってのは・・・」

「言われなくても話しますよあ？まったくご主人様だったらせつかちなんだからあ もう！」

・・・ウゼエ。

「祐樹さん・・・相当気に入られてるようですね。」
「リータがニヤニヤして言う。」

「うん、まあ、リータ。黙ってくれ。」

「じゃ、説明しますよお？えーっと・・・」

そついいヴェイはまた声色を変え話し出した。

「全ての国事を記録するために国を挙げて行われたOmniscience projectの産物として生まれた、人間の持つ情報処理能力、情報記憶能力、そして生命力を極限まで特化した高生命体、通称0-1。」
「性別は男、生命力を上げたことによつて、およそ800年間生き続けました。」

「800年・・・？信じられんな・・・。」

「0-Aの場合は全ての身体的活動を停止し、血流、脳波、細胞の成長なども全て管理下に置かれていた為、そのように長寿命になりました。しかし自らの希望からの肉体とは言え、国民から人体実験やら人じゃないなどと批判を受け、2代目の1-1は膨大な情報量に耐えうる程度に情報処理と記憶能力を上げるのみとして、身体活動も最低限は許可しています。当然一代目の情報もすべて受け継いでいます。」

「ってか、そんな体を希望する奴いるのかよ・・・。」

「はい、一代目は Omniscience project を考えたクオーツ氏が自らに改造を施しました。二代目はいつい最近なつたのですが、性別は女、それは王家の中の間がなつたとだけ私の中には記録されています。」

最後に私についてですが、私はその二代目の頭脳が全てコピーされています。そして一日に一回同期が行われています。」

えーっと・・・SFか？これ。」

「って感じかなあ〜？あはは〜」

先程までとはまったく違う明るい声色でヴェイは笑った。

「頼むからどつちかに統一しないか？ついていけそうにない。」

「いやまあ、お仕事はお仕事ですからあ〜 さあて！何か疲れちゃいましたあ〜！！！」

ヴェイのバカでかい声が聞こえたのか、シトリアが魔される様に起き上がった。

「ちよつと〜・・・うるさいですよ？祐樹さん・・・。」

「うん、まあすまない。けど頼むからこいつに言ってくれ。」

ドッスンッ！！！！

馬車が揺れる。

「な、何だ?!」

今まで小屋の外で馬を操り、寡黙を突き通してきていた運転手が呼びかける。

「皆さん、そろそろメルヴェイに着きます。下車の準備をお願いします。」

「あ、ああ、もうそんなに経ちましたか……。では、一度降りましょう。」

「え？一気に入くわけじゃないのか？」

「はい。ほら、お腹も減りましたし。」

グウウウウー！！

俺の腹が先程の馬車の音にも負けず劣らず大きな音を響かせた。

ふむ……。まあ確かに腹が減ってる。

「はい、着きました。」

運転手の声と共に馬車は止まった。

第12話：中間地点（後書き）

今更ですがあけましておめでとうございます。

そういえば今まで言っでなかつたなあと。

ところで、現在評価を募集中です。

前々から募集していますが、個人的な第一章が終わりに近づいてる故、一度はつきりと募集したいなあと。

では、この小説に対して何か感じましたらよろしくお願いします。

第13話：食事と決闘？（1）

俺とシトリアとリータの3人は、

ヴェイを馬車に乗せたままで馬車を降りた。

どうやら馬車は一時的に降りただけであって、

少し時間が経つたらまた同じ馬車で行くらしい。

ヴェイは「何で連れてってこないんですかあゝ!? 何で何でえゝ
?!」

などと騒いでいたが、気にしないことにした。

街の中に入るとそこは程よく賑わっていた。

程よい、というのは、露天商の声や街を歩く人の話し声は聞こえる
が、

人とぶつかるような心配があるほど人が多いわけではないと言った
感じだろうか。

ふむ・・・何で俺はこんな説明をしたんだろう。

「さてー、まずは腹ごしらえですね。」

「ああ、そうだな。何か店とか知ってるのか？」

リータがニコニコしながら話す。

「はい！私知ってます!! えーっと確かこの近くに・・・あった!」

リータが指差す先には、何だか案外普通の木造なお店。
まあいいな。

「うん、ここなら・・・行きましょう。」

シトリアとリータは一瞬目を合わせニヤリと笑つと足早に入っていた。

俺も後を追って入った。

中は特に・・・強いて言うならば汚い。衛生的にどうだろうって程ではないが。

「いらっしやい！こっち空いてるぜ！」

武器屋とかに居そうな強面のオジサンが出迎える。

いや、どこもかしこもガラガラなのだが。

中にはシトリアとリータしか客はいなかった。

俺は店主に軽く会釈し、カウンターの席にいるシトリアの隣に座った。

「で、何にすんだい？」

「え、メニューって無いんですか？」

「祐樹さんモグリですねえ、ここでは任せますと言つのが当たり前じゃないですか。」

シトリアがニヤニヤしながら言つ。

・・・いや、初めて来たところなんだから知らないのが当たり前じゃないですか？

「じゃ・・・任せます。」

「私はメルヴェイピザで。」

「あ、私もそれで。」

「おい、今普通に頼んだらお前ら。ちょ、すいません、俺もやっぱり「メニューの変更はできないんだ。すまんな兄ちゃん。」

店主がニヤリと笑う。

・・・はめられた？

店主はその場で調理に取り掛かる。

店主は驚くほど手際が良く、見る見るうちにピザが形作り窯の中へと入れた。

「そういえば・・・お金あるのか？」

「ああ、そのことならご心配なく、何しろ私はお姫様ですからねっ

！」

そう言ってシトリアは自分の胸を叩いた。

「・・・ああ、そう。」

「はい焼けました。メルヴェイピザ二枚！」

店主が2人の前にピザを置く。

「いったただつきまーす！」

2人がピザを貪り食う。目の前で作られたからこそなのか、メチャメチャ旨そう。

「・・・で、俺のはいんですか？」

「ああ、今から作るよ。」

店主が作業に取り掛かる、何を作るんだろう・・・

「それにしても・・・何でそのピザはそんなに旨そうなんだよ・・・むかつくな・・・。」

「え？ああ、はい？いや別においしくなんか無いですよあ？」
そういうリータは幸せそうな顔をしている。

「食べたいですか？」

シトリアもまた幸せそうな顔をして言う。

「もらっていいのか?!」

「ええ、私少しお腹一杯ですし。はい、あくん・・・」
シトリアが俺の口に向けてフォークに刺したピザを差し出す。

「いや、普通に食べていいか？」

「ダメです。ルールです。」

「何のだよ。いや、頼むから普通に食わせてくれ。」

「・・・いらないますか？」

俺の目の前で小さく切られているというのにピザの上に乗っているチーズがトロリとこぼれそうになる。うわぁ・・・。。。

「や、すみません何でもいいんでください。」

「はい、じゃ、あくん・・・。」

シトリアがニッコリとして口に近づける。

何だかむず痒いが俺は口を開け食べようと・・・

バタンツ！！！

ドアが開く、入ってきたのはシトリアと同じくらいの年齢に見える少年。

「姫え〜！！！！いつの間に・・・いつの間にそんな男を！！！！俺という人がいながらああ〜！！！！！！！！」

・・・何だこの展開。

気にせず食べようと思ったがシトリアが手を引っ込める。

「あ、あなたは・・・！！」

「そこのお前！！！！俺と姫を賭けて決闘しろお！！！！」

「いや、ちょっと待て、今のは別にそういうのじゃないぞ？話がちょっと飛びすぎ」表でろやあああ！！！！」

するとシトリアが俺の腕に抱きつき

「やめて！私この人とは離れたくないの！」

「てめええええ！！！！もう姫とそんな関係に・・・！！！！！！」

シトリアを見るとニヤニヤしながら俺を見ていた。・・・からかつてやがる。

「おい、いやコイツは今冗談を言ったただけだか痛たた！！！！」

少年は俺の腕を引っ張り外へと連れ出した。

口に物を入れながら頑張れー。と言っリータの声が聞こえた。

・・・「で、何で俺はお前みたいな小さい子供相手に決闘なんてしなきゃいけないんだ？」

「勝った方が姫に相応しい。これでいいな？」

コイツ・・・人の話聞いてない。

「おいおい・・・子供相手にあふんっ！！！！」

軽い一撃が空腹の俺の腹に当たった。

「おいおい、いつまで話すんだよ？男なら拳で語りな。」

「・・・ね？」

シトリアがため息混じりに言う。

いや、何が、ね？だ。どうしろと言うんだ。

「来ないんだっいたらこっちから行くぞ！！」

少年は俺に殴りかかってきた。

えーっと・・・俺は俺の顔に向かってくる手を受け止め、

後ろに回りこみ暴れないように抱きかかえた。まあ、子供だもんな。

「ちょ・・・やめ・・・やめろー！！！！この・・・この変態が！！！！」

変態？・・・えーっと・・・。

「シトリア、ちょっと質問いいか？」

俺は暴れる少年？を抱きかかえながらたずねた。

「コイツ・・・男か？」

シトリアはニツコリと笑って首を横に振った。

・・・今度は俺が抱きかかえている少年・・・？に尋ねた。

「お前・・・女？」

「変態！！」

俺は慌てて手を離すと少年・・・ではなく少女はすばやく俺から離れた。

「いやいやいや！！だってシトリア・・・なあ？！！」

「いや、私に振られても？」

「お前知ってたんだろうが！！」

「てめえ変態！！姫にそんな口聞いてんじゃねえ！！」

すると店から店主が出てきた。

「お客さん、もうできましたよ？」

ギョルルルル・・・

「・・・よし、お腹が減った。」

俺は店の中へと逃げた。

第14話：食事と決闘？（2）

「・・・で、何でお前も一緒にいるんだ？」

店主から呼ばれて店の中へと戻ると、

成り行きで4人席へと移動。

少年のような少女はニッコリしながらシトリアの腕に抱きついて
いる。

「あ？お前こそ何でいるんだよっ！」

シトリア姫と2人つきりで旅だなんてよお・・・」

「おーい・・・私見えてる？」

リータが少女に手を振るが無視。

少女に話しかけても話が進まなそうなのでシトリアに質問した。

「なあ、コイツは誰だ？」

「えーっと・・・私の追っかけ、かな」

「へえ・・・追っかけねえ・・・」

俺は少女を見ている。

よく見れば幼いながらに綺麗でどこか大人びた顔立ち。

服装は簡素なレザージャケットに短いレザーパンツ。

そしてブカブカした帽子を深く頭に被っていた。とりあえず普通の
少女の服装ではないだろう。

「彼女は私が呼んでおいたんです、これから一緒にリズレバークへ

と行くので。」

「え?!コイツも一緒なのかよ!俺はてつきり姫と2人つきりで・
」

少女はキツと俺を睨みつけながら言った。

「何でだ?」

「はい、ここから先にはちょっと厄介な敵がいるので、彼女には加勢してもらおうかと。」

「ああ!お前なんかより俺のほうがよっぽど姫を守れるからな!」
少女は自信満々に言った。

すると店主が近づいてきて、「はい、これお勧めな。」
店主が俺の前に料理を置く。

「・・・これ、何?」

「ベルイグベラベンソのカトウマヌイ添え。」
・・・何だそれ。

どんな料理なのかと言うと、黒い物質。料理じゃない黒い球体だ。

「さ、祐樹さん!早く食べてください!次やることもあるんです!」
シトリアが促す。・・・そんなこと言ってもな。

「・・・俺、あんまりお腹減ってない気がする。」

「・・・残す・・・のか?」

武器屋つばい顔の店主が本領を發揮、武器屋の店主と言ったら街一

番の強面と決まっている。すなわち残すなど言いたいのだろう。

「ほら、祐樹さん、私が食べさせてあげますから」
シトリアが俺に目配せをする。・・・ああ、そういうことか。

「何! ! 姫、これは俺が食べます! だから俺にお願いします! !」
そういつて少女は俺から皿を奪い取った。
・・・助かった。シトリアに感謝だな。

「はい、じゃ、あ〜ん・・・」
シトリアは黒い物質にフォークを突き刺し割ると、その一部を少女の口に運んだ。

少女はニンマリとしながらそれを食べる。

「う・・・う・・・」
少女が震える。やっぱりか? 相当まずいのか?

「最高においしいです! 姫! 姫に食べさせてもらえてよりおいしいです! ! もっとお願いします! !」

・・・? 意外だな。食べ物を見た目じゃないってか?
店主は微笑みながら少女を見ている。

俺は少女の目の前にある皿からフォークで少しだけ取り、口に入れた。

「ぐむおっ?! ! ! ?」

口の中に焼けるような痛み。・・・かと思うと錠剤を噛み砕いたかのような苦味

そして、吐き気を催すほどの甘さ、舌が痺れるほどの塩気・・・

「ひ（死）・・・ひむっ（死ぬっ）！！！！！！ばんばもめまべものば（何だこれ食べ物か）?!?!」

リータが、大丈夫?といいながら俺に水を差し出し背中を叩く。しかし顔は笑っている。

水を飲み幾分か落ち着いた俺は少女のほうを見る。

少女は顔を青くしながらシトリアから黒い物質を食べさせてもらっている。

少女は俺の視線に気付くとウルウルとした目で見つめてきた。

・・・食べるってか？

シトリアは気にせずあくんといいながら少女の口に黒い物質を運ぶ。

少女は涙をどうにか目でとどめながら俺を見る。

・・・ああゝ！！そんな目で俺を見るなあああ！！！！

俺は少女から皿を奪い取り、一気にすべて口に入れた。

「x & \$ - - ! ! ! !」

俺は今まで発したことがないような声を出した。

・・・その後の記憶は消えていた。

「……………目が覚める。」

「ん……ここは……?」

まだ舌がヒリヒリしている。
後頭部に軟らかい感触。

「……起きたか。」

俺の目の前には少女の顔。

「うわわわっ!!!」

俺は慌てて飛び起きる。

何だこのシチュウは。膝枕って……。

「あ、え、勘違いすんな!!!ただ、地面に寝かせんのもどうかと
思ったただけだこの変態が!!!」

少女は頬を赤らめながら否定?した。

「ったく……姫ともう一人の女は2人で買い物にいつちまったし・
・姫と一緒に買い物したかったな……」
少女はブツブツと言う。

「……悪かったな。」

「別にお前が悪いなんていってねえよ!あの……その、ありがとう
な。食ってくれて。」

少女は初めて俺に少し笑いかけた。

「ああ……そういえば、お前、名前は?」

「俺か？俺の名前は、フランチュール。」

「フランチュール？・・・くく・・・可愛い名前だな・・・」
うん、正直ギャップが凄い。

バシッ！

フランチュールは俺の頬を軽く叩き、姫のところに行ってくると言
って外に足早に出て行った。

そういえばここって・・・

「ご主人様あゝ！！何なんですかあの女は！！！！どどういう関係です
か！！現地妻ですか？！！」

ヴェイがバタバタと音を立てながら言う。

・・・あーあー・・・何だかなあ。

第15話：迷子（1）

何故だか分からないがヴェイに散々怒られて数分後。

「ふう、お待たせしました。」

少し疲れた顔をしながら3人が戻ってきた。

「何を買ったんだ？」

「はい？あ、えーっと、コレです。」

そういつてシトリアは武器紙を見せた。

「武器紙って、普通に売ってるのか？」

「ええ、大体の街には売っています。クレパのような田舎町にはありませんが。」

しかし高いんですね……。」
そういつてシトリアは苦笑いした。

「あと……これも……ありますよ。」
ドスンッ！

3人の中で一番疲れきった顔をしているリータが俺の前に大きな皮袋を置く。

「これは？」

「姫からの……プレゼントです……。」

俺は袋を開け、中に入ったものを取り出す。

これは……何？

「それは、フジユグレの革で作った鎧です。流石にその村民みたい

な服はダメかなあと。ここから先は少し危険ですしね」

へえ・・・俺は今着ている服の上に着た。

フジユグレって何なのかは知らんが、ちようど良い重量感。走れな
いというほどでもないし、どこか心許無い雰囲気もない。

「これ、いいな。」

「気に入ってもらえてよかったです。じゃあ、出発しましょう。」

シトリアがお願いします、と言うと馬車は動き出した。

出発して1時間経っただろうか、俺は体を横に倒し、シトリアは疲
れていなさそうだったが、3人は買い物疲れからか眠っていた。

ウェイもさつきから声を出していないという事は眠っているのか
もしれない。寝るのかどうかは知らないが。

むう・・・暇だ。

俺はとりあえず眠ろうと近くにあった薄めの布団を被り、目を閉じ
た。

.....ゴソ.....

何やら物音、大方誰かの寝返りだろう。

眠るときに物音に気を取られるとなかなか眠れなくなるんだよな。

.....モゾモゾ.....

モゾ？何だか変な音が.....

モゾ・・・

むおっ！何か布団に入ってきてる感触。

その『何か』は俺の目の前にモゾモゾと頭を見せた。
この帽子は・・・フランチュール。

「おい・・・何でこんなところにいるんだ？」

「・・・グスツ・・・。」

・・・返事はない。・・・泣いてる？

とりあえずこの状態にいるわけにもいかないので、布団から抜け出そうとする。

抜け出そう・・・としたが、フランチュールに酷い力で腕を掴まれた。出るなってか？

ガタンッ！！

馬車が少し揺れる。するとフランチュールはキャツ・・・と声を上げた。

フランチュールは俺の腕を掴むと、自分のほうへ引っ張り抱きついた。ってかおい、またこんな感じか？

「おいやめ・・・」・・・怖いんだよこの野郎・・・。」

言葉は威圧的だが弱々しい声。

「高いところ苦手なのか？」

フランチュールは黙ってうなずいた。・・・意外だ。

もう何も言つまい。これ以上腕を千切れんばかりに握られたらま
ったもんじゃないしな。

俺は再び目を閉じた - - - - -

- - - - -

- - - - -

・・・アレからどのくらい時間が経ったのかまったく見当がつか
ない。

背中に押し掛かるような力を感じる。フランチュールはまだ眠っ
ているようだ。

ズガアアン!!!!!!

馬車に大きな衝撃。

フランチュールにまた握り潰されるかと思つたが、

眠っていたお陰で大丈夫だった。

しかし何だ？

俺はフランチュールを起こさないように立ち上がり、運転手の近く
へと行った。

「何があつたんですか？」

「どつやら・・・奴等に感づかれたようです・・・。」
「奴等?」

「この辺りを縄張りにしてる、グーツマンです。奴等はいわゆる鳥人の姿で、ここを通りすぎる馬車を襲うんです。」

「・・・で、今まさに襲われてると?」

「はい。」

運転手は落ち着いた口調で答えた。

「・・・落ち着いてられないんじゃない?」

運転手は尚も落ち着いた口調で言う。

「・・・はい。やばいです。」

ズガアアン!!!

「ってか、今何されてるの?」

「えーっと・・・撃たれてます。」

「・・・俺はどうしたらいい?」

「追い払ってください。」

「・・・そんな無茶な。」

「その、少し出てください。今スピード落としているので大丈夫ですから。」

「いや、銃で狙われてるのに外に出ろってか?」

「このままではこの馬車ごと落ちますよ?」
「・・・。」

俺は外へ出た。外は相当な高さで下なんか見れたものではなかった。

「うわわわあああ！！！！！！怖い・・・怖い！！！！！！」

「怖いとかどうでもいいんでチャッチャと倒してくださいー。」
運転手の投げやりな声が聞こえる。

俺は仕方なく、さっきシトリアから何枚かもらっておいた武器紙を取り出し、銃を描いた。

・・・流石にここでパチンコを出すわけにはいくまい。

俺は少し大きめの銃を手に持ち、構える。

・・・しかしグーツマンとやらの姿は見えない。

「下にいますー。」

下？下を見るのか？

うう・・・。

俺は下を軽く見る。

・・・いた。

その姿は邪族のように禍々しいものではなく、どちらかと言うとかつこよい部類だった。

とりあえず俺は一発よく狙い・・・放った。

俺の銃は少し大きめの弾丸を出し、見事命中・・・するわけなかった。

さらにその攻撃で俺が外に出ていることに気づいたグーツマンは俺をジッと見つめ、
肩に背負っていた銃を俺に向ける。

「え、ちょ、待った待った！！！！」

ズドーン！！！！

「・・・え？」

「ちっ・・・起こしてくれればいいのによぉ・・・。
そういつて俺の隣にいるのは・・・フランチュール。
フランチュールが泣いたせいか目の辺りを赤く腫らしながら、シャ
ミューシャが使ったものと同じバリアを発していた。

「起こすって？」

「さっき姫が言ってただろ？この辺りはグーツマンの住処なんだよ。
だからそれを追っ払うために俺が呼ばれたんだよ。」
そういうフランチュールの膝はガクガクと震えていた。

「って言うか・・・大丈夫か？」

「問題ねえ。その銃をよこせ。」

俺は言われるままに銃を手渡す。

「って、お前、銃なんか扱えるのか」バンツ！！！！

グキヤアアア！！！！

恐らくグーツマンによるものと思しき悲鳴が響く。

「残り5匹……。」

バン！！バン！！バン！！！！バン！！！！

「残り1ひ……ヒイツ！！」

調子良く敵を打ち落としていたフランチュールが悲鳴をあげる。

「どうした？！」

「ふええん！！！！！！怖い！！怖いよお！！！！！！下……下見
ちゃったああ！！！！！！」

今までの口調からは想像できない泣き声。今まで見ないで撃つてた
つてのがすごいんだが。

尚も最後の1匹を打ち落とそうとするフランチュールは膝どころか
腕までガクガクに震えていた。

「祐樹い……手を……手を貸して……。」

震える声でフランチュールが言う。

俺はフランチュールの腕を支えた。

バンツ！！！！！！

その一発は見事グーツマンに命中。
グーツマンは悲鳴を上げながら落ちていく……。

ドオオオン！！！！！！！！

馬車が大きく揺れる。

グーツマンが落ち際に銃を放ったよう「あわわわわ!!!!!!」

「え、ちょ、フランチユール落ち着」

そう言いかけたとき、フランチユールは暴れだし馬車の周りの小さな囲いから飛び出てしまった。

フランチユールの腕を支えていた俺の体も例外ではなく空中に投げ出され……

「ああゝ!!!!!!」

パラシュートなしのスカイダイビング？

フランチユールと俺はドンドンとスピードを上げて地上へと降下していく。

もう半分失神状態のフランチユールが俺に捕まる、とつか抱き着く。

「おい！やめろ!!!スピードが!!!!!!」

フランチユールが俺にくっついたことでスピードはさらに上がる。

どンドン地面が近くに……

ズザザザッツ!!!!!!

……体になにかが刺さるような感覚を覚えたとき、

俺は意識を失っていた。

第16話：迷子（2）

・・・
「・・・う、うう・・・。」

アレからどの程度時間が経っただろうか。
体はそこらじゅう痛い、俺は生きていた。

どうやら森の木がクッションとなり何とか助かったらしい、
鎧に枝が大量に刺さっているということはそういうことだろう。
鎧を着ていなければどうなっていたか・・・想像するだけで恐ろしい。

そういえば・・・フランチュールは？

辺りを見渡すも何処にも・・・
・・・そういえば体が重い。

フランチュールは俺の上に乗っていた。

少しー安心・・・

俺はあちこち痛む体を、ゆっくりと起こす。

ゴロリとフランチュールが仰向けになる。
！！！！フランチュールは腹が血にまみれていた。

「おい！！大丈夫か？！」

・・・返事は無い。

おい・・・これはまずいんじゃないか？

血を見て少し気分が悪くなったが、そんなことを言っではいられない。

俺は鎧を脱ぎ服の一部分を切って止血を施す。

こんなことなら・・・もっと保健の授業、真面目に受けとけばよかった・・・。

俺は痛む体に鞭を打ち、フランチュールを担ぎ上げる。

うっ・・・体に力が入らない。でも・・・

俺はとにかくどこか人のいる場所へゆくために歩いた。

・・・

・・・

・・・

あれからどの程度歩いたか、何やら大きな音がする。

俺は音の聞こえる方向に進む、すると二本の大きな木の先に町が見えた。

助かった……。

既に体はボロボロ、疲れて今にも倒れてしまいそうだ。

町の中へと入る。

そこは小さなレンガ造りの家が並んでいた。

人通りは殆どない。

そんな時、一人の老人がいた。

「あの……すみません……病院ってどこにありますか？」

俺は焦る気持ちを抑え、ゆっくりとした口調で聞こえるように尋ねた。

「……。」

無視。

「すみません、聞こえていますか？」

少し失礼かと思ったがそう尋ねると、老人は俺のことをギロリと睨み、ペツ！とつばを吐き捨て何処かへ行ってしまった。

……は？

俺はその後、何人もの人に話しかけたが、なぜか誰も話を聞いてはくれなかった。

自力で探そうにも病院らしきものは見えない。

ダメだ……もう……動けない……。

俺はその場に倒れこんでしまった。

もう動く気力も無い……………、こんなところで……………死ぬのか……………？

再び意識が途切れそうなとき、声が聞こえる。

「おい！！あんた大丈夫か?!」

男の声……………

俺が男の声だと認知したとき、俺は意識を失ってしまった。

「おい……………おいつてばっ!!!!!!」

バシヤッ!!!!!!

顔が急に水に濡れ冷える。

「うわっ!!!!冷たっ!!!!!!」

俺は飛び起きる。それと同時に酷い痛み。

「おい、あんまり暴れるな。」

それは先ほどの男の声だった。

「・・・ここは・・・?」

「ここは俺の診療所だよ。まったく・・・あんたらもここに迷い込むなんて不運だね・・・。」

「フランチユールは?!」

男は隣にあったベットを指差し、言った。

「あ?あの女の子か?あの子なら平気だ。ほら、何かちゃんと止血できてみたいだしな。傷もそんなに深くねえし。」

「つーか質問ばっかだな?お礼の1つも言ってみろよ。」

そういうと男は笑った。

「すみません・・・ありがとうございます。」

「なあに、気にすんな。と言うよりあつちの女の子よりも問題はあんただ。あちこち骨が逝つちまつてるよ?」

「よくここまで一人担いで来れたもんだな。」

気付けば俺は体中を包帯やギプスで覆われていた。道理で体が動かない。

「まー、とっておきの薬を塗っておいてやったからな、3日で動けるようになるよ。」

「すみません・・・でも、俺お金は・・・」

「ああ、金か?別にいいよ。ボランティアアみてえなもんだ。あんたらみたいな行き倒れに金なんか求めてねえよ。」

それにエクサーのあんたがこんなところに来るなんて、何か訳アリ

なんだろ？」

「いや、普通に馬車から落ちて……。」

俺がそういうと男は顔を怖くして言った。

「馬車から？はは……笑えるな、その冗談……で、目的はなんだ？」

男は脅すようにいう。

「だから、本当に馬車から……」嘘つくんじゃないぞ！」

男はそういうと一度深くため息をつき、また話し出した。

「……悪い、怒鳴っちゃまって。お前みたいなガキが……そんなわけないもんな。」

「……どういことですか？」

俺はおそろおそろ聞いた。

男は質問には答えずに話し出した。

「もう知ってるかもしれないけど、この町はエクサーを歓迎するよ
うなところじゃねーんだ。」

だから、その怪我が治ったらとっとと出てってくれ……
3日は絶対安静。この部屋を貸すから絶対に3日間はあるな。いい
な？」

俺は黙って頷いた。

男は、頭を軽く押さえながら部屋を出て行った。

・・・全然意味が分からない。

エクサーって、この国を守るヒーローみたいなもんじゃないのか？
今まで行った街では、俺達はだいぶ歓迎を受けていた。

歓迎・・・それは姫であるシトリアの存在があったからかもしれない
が、

まずこんな風に排他的な対応を受けたことはこの世界に来て一度も
なかった。

混乱しながらも色々考えていると、

何だか気分が悪くなり、俺は眠りについた。

第17話：真実（1）

静かに空を駆ける馬車の中。

「姫……！！起きてください……！！」

リータの声。

ああ……眠い。

「何い……？」

「大変なんです！祐樹さんと、姫が呼んだ女の子がいないんです！」

「あ、フランチュールね？」

まったく、人の名前も覚えられないなんて失礼よね。

「ああ、はい……って、そんなこと言っている場合ではないんですよ……！！」

「何が？私は眠いんですよ……？」

「ここはグーツマンのいる地域じゃないですか……！！」

あ……。私の眠気は完全に覚めた。

そうだった……。そのためにフランチュールを呼んだんだ。万が一にもこの付近でグーツマンに襲われて墜落なんてできないから。

そりゃ危険だったのもあるけど、何しろこの地域には『あの町』があるから……。

「ってことは・・・祐樹さん達は落ちたのですか？」

道理でやけに揺れるなあと思ったわけだ。

本当にグーツマンに狙われるだなんて・・・。

「はい、先ほど運転手に尋ねたところ、襲ってきたグーツマンを倒した後に落ちたらしいです。」

祐樹さんはあの鎧を着ていますし、下は森ですから命は無事でしょうが・・・。フランチュールさんは・・・。」

「フランチュールならきつと大丈夫よ。祐樹さんならきつと助けてくれると思う。」

リータは一度、それは無理でしょうといった顔を私に向けたが、私がジッと見返すとまた話し出した。

「はい・・・ならまずは一安心ですね。」

「いや・・・問題は落ちたことよりもこの近くの町に問題があるの・・・。」

「この近くといたら・・・グオズイですか？」

「ええ、怪我をした祐樹さんはきつとそこへ行ってしまふ・・・それは何よりも避けたかったのに・・・！」

リータは不思議そうな顔をする。

「リータ・・・貴方はまだ王族に直に仕えて間もないものね、知らないのも無理は無いわ。」

いえ、知らなくても・・・いいことなの。」

リータはより不思議そうな顔をしたが、普通に話し出した。

「・・・まあ、とりあえず祐樹さんをその町に置いておくのには問題があるということは分かりました。今すぐにも助けに向かいますか？」

「お客さん。悪いがそいつは無理だ。」

運転手の声。

「どうしてですか？」

今行かないと困る。祐樹さんが事実を知る前に行かなければ意味がない。

「ただでさえ無茶な注文をこっちは受けてるんだ。一日で大陸を移動なんてよお。」

これ以上回り道されたらペガサスがもたねえんだ。グオズイまで辿り着くことなんて今更無理だ。」

「そんな・・・そこを・・・そこをなんとか!！」

ここで引き下がるわけにはいかない・・・。

「何とかって言われてもなあ・・・。ああ、そうだ。ここで陸に降りちまえばグオズイまで持つぞ？」

翼と足じゃ疲れ方が全然違うからな。ま、時間はかかるがな。」

「・・・姫、どうします・・・。」

「・・・もう諦めるしかないのか。」

祐樹さんが事実を知って戦う意志を失ったら・・・それこそお終いだ。

「運転手さん・・・それでいいです。グオズイまで向かってください・・・。」

「あいよ。」

馬車がゆっくりと降下していくのが分かる。

・・・正直、祐樹さんにはシャミューシャに負けて元の世界に帰って欲しかった。

祐樹さんと呼んだのだから、只の『彼女』の予言だったというのに。

ここまで巻き込んで・・・今、自分がどんな立場にいるのか、それを知ったならどうなるだろう・・・。

祐樹さんは私を怒るかもしれない。こんなところに連れてきたことを。

ドスンッ！！

大きな着地の音を立てて、馬車はグオズイに向かって忙しく走り出

した。

第18話：真実(2)

・・・あれから3日。

俺の体は男の塗ってくれた薬のお陰で大分動くようになり、フランチュールもあの後ずっと普通に眠っていた。

「・・・・・・・・」

外から声が聞こえる。

「エクサーを匿ってるんだろ!？」

「匿ってないって言ってるだろ?!?!」

俺を助けてくれた男と別の男との言い争いの声だ。

エクサーって・・・俺達のことか？

「祐樹、ここから出たほうがよさそうなんじゃねえか？」

散々眠って立ち上げられるほど元気になったフランチュールが言う。

ふむ、俺もそれは思う。

しかし3日もお世話になって勝手に出て行くのも気が引ける。

・・・ガチャッ

男が入ってきた。

「おい・・・どうだ？」

「ええ、大分体は動くようになってきてます。本当にありがとうございます……。」

「ああ、そうか。ならもう出て行ってもらおうか。聞こえたかも知れないが……そろそろ困るんだな。」

「……はい、分かっています。……けど、1つどうしても聞きたいです。」

この町では、なぜエクサーは嫌われているんですか？」

男は少し悲しそうな顔をして、質問には答えず話し出した。

「……外に馬車を用意しておいた。それに乗って何処へでも行ってくれ……。」

男が余りにも俺と話すのがつらいように見えたので、俺とフランチュールは男に軽くお辞儀をして部屋を出た。

外へ出るとそこには運転手を除いて2人乗りの小さな馬車があった。どうぞ、と運転手が後ろを指差したので俺とフランチュールは馬車に乗り込んだ。

「……どこへ行きますか？」

……ふむ、どこへ行ったらいいのだろう。当然シトリアたちとは連絡を取れていないし、普通にリズレバークへ向かっていいのか分からない。

「ここからリズレバークまでの間に街はあつたか？」

フランチュールが運転手に言う。

ああ、確かにそれが妥当かもしれないな。

「ここからだ・・・ピリユを通ります。そこでいいのですか？」

はい、と俺とフランチュールは2人で答えた。

静かに馬車は走り出した。

「祐樹、今更だけど悪かつたな。よく覚えてないがたぶん俺のせいで落ちたんだろ？」

フランチュールが申し訳なさそうに言う。

「・・・いや、別に大丈夫だよ。・・・ま、意外だったけどな。」
そういつて俺はからかうように笑った。

「人間誰でも苦手な物はあるもんだ。うん。」
フランチュールは照れを隠すように一人うなずきながら言った。

「ところで・・・さっきの街つてどういうところなんだ？」
フランチュールは急に話が変わったせいか少し驚いた顔を見ると、
答えた。

「いや、俺も来たのは初めてなんだ。何か・・・気味悪いところだったな。今馬車の中にもずつとジロジロ見てきやがった。」

ジロジロ？・・・何だかいやな予感が・・・？

「あ、着きましたよ。」

運転手が言う。馬車の窓から見ると、そこは先ほどまでいた街よりも少しばかり近代的な街だった。

いや、近代的と言っても先ほどまでいた町が余りにも低い水準だったからかもしれんが。

「祐樹さん！！！」

シトリアの声。シトリアとリータが馬車の進む先で手を振っていた。

俺は運転手に止まるように言い、馬車を降りて2人へ駆け寄った。

「どうしてここに？」

「グオズイまで行くつもりだったんですが・・・途中で馬が怪我をしてしまったため、ここで待つことにしていたのです。」

グオズイ・・・さっきの町のことか。

「ところで、さっきの町のことなんだが・・・」

俺が聞こうとすると、シトリアは遮るように話した。

「大分時間を使ってしまいました。新しい馬車を手配してあるので、とりあえずまたリズレバークへ向かいましょう。」

・・・？聞いちゃいけないのか？

近くに用意された馬車に乗り込んだが、何故かシトリアは不自然なほど口を開こうとしなかった。

第18話：真実（2）（後書き）

こんばんは、甘味です。

次回、個人的には第一章最終話。

第一章が終えたら番外編をいくつか入れたいと思います。忘れられると困るので第二章に手をつけながら、ですが、では、これからも『あおしろ』をよろしく願います。

第19話：真実（3）

シトリア達と共に馬車に乗り込んで数分立ったか、フランチュールとリータは珍しく仲良く会話していて、残された俺とシトリアはまったく口を聞いていなかった。

・・・怒っているのだろうか。

こついつときは、もう謝るしかないんじゃないか？

俺はシトリアの近くへと行き、
できる限り腰を低め、

「すまなかつた！」とだけ言った。

シトリアは少しびっくりした顔をして、
何がですか？とだけ笑顔で言った。

どうやら・・・怒ってはいないようだが・・・？

「なあ、さっきの・・・。」

俺がそう静かに言うとシトリアはふう、と一度ため息をつき真剣な顔で聞いた。

「・・・気に・・・なるんですか？」

俺は黙って頷いた。シトリアは何か決心したような顔をして続けて話す。

「・・・分かりました。・・・祐樹さん、あなたはエクサーはこの世界でどのような存在だと考えていますか？」

「どのような存在？それは・・・」

「世界を救うヒーロー的な？」

小学生みたいな返答だがそれ以外思い浮かばない。

シトリアは何故か少し悲しそうな顔をしてまた話し出した。

「では・・・この世界の人口は約6億人程度。でその中で何人に一人がエクサーだと思いますか？」

何人に一人？それは・・・まあ少ないことは確かだろう。

「10万人に一人とか？あ、これは少し大袈裟か？」

「全然違います。いや、ある意味惜しいのですが、正解は、約100001人に1人です。」

「・・・え？」

「つまり、10万人に1人がエクサーではないということになります。」

「・・・いやいや、だってお前、エクサーは超越する者だとか何だとか・・・。」

「本を読んだときに知ったかもしれませんが、最初10人の人がいて、そのうちエクサーは1人だけでした。」

で、エクサーと普通の人の間に生まれた子供もまたエクサーとなります。

そうなる・・・当然どんどん増えることはわかりますよね？

まあ、勿論どんな血も薄まっていくなわけですが、エクサー特有の能力は全て受け継がれています。」

「エクサー特有？」

「世界に絵を付け足せること、武器紙を使える事ですね。血が薄まることで武器紙からできる武器自体の力が弱まる、というのが特徴です。」

多くのエクサーの描いた武器では邪族1匹も倒すことができません。

「

「ふむ・・・って言うか、つまり何が言いたいんだ？」

「今、この世の中の一部ではある思想が広まっています。」

・・・それは、エクサー至上主義。

つまり、エクサー以外の人間を特殊な下卑たものと扱うことです。

「

・・・何だそれ。」

「冗談ではないです。エクサーと普通の人間の間での結婚はタブーとされ、人間は今後増えることも減ることもありません。」

「.....」

「え？」

「シトリアも・・・同じ考えか？」

そういうとシトリアは顔を赤くして怒った。

「そんなわけないじゃないですか！！！！祐樹さんの目には私がそん

な考えを持つような人に見えてるんですか?! 私エクサーって大嫌いなんです!!」

「あ、いやすまない。分かった。・・・でも、まあ、それで?」

シトリアは一度深呼吸して話す。

「祐樹さんが世界を救うと言うことは、この世界のエクサー至上主義を完璧なものにするのです。

エクサーのお陰で世界が救われたとなれば、当然エクサーたちは自分達のことをより優れていると過信するでしょう。

普通の人間達は今以上の差別を受けることになります。

・・・祐樹さんは普通の人間達に相当恨まれることになるでしょう。

」

「・・・、それで?」

「・・・え?」

シトリアは一度驚いた顔をして続けた。

「いや、何も感じないんですか? 恨まれるんですよ? いいことをするの。」

「・・・だって、俺がどうにかしなきゃ恨むも何もみんな終わるんだろ?」

「ええ・・・はい、まあ・・・。」

「だったらそんなこと言ってる場合じゃないだろ。エクサー至上主義? いいじゃんかそんなの完成したって。」

取り返しがつかないわけじゃないだろ？そんないかれた考え、後でぶっ潰せばいいじゃんか。」

俺がそういうとシトリアは何故か怒り出した。

「祐樹さんは馬鹿なんですか？！祐樹さんはこういうべきなのに！感謝も何もされないならこんなことやる意味ないよって！！！！！！こんなところ早く出て行きたいって！！！！！！」

まったく・・・全然わかんないですよ・・・。。。」

怒ったと思ったらシトリアは大きな声で泣いた。

・・・何なんだか。

「姫っ！！どうしたんですか！！！！！！」

フランチユールがシトリアの泣き声に気付いて言う。

・・・あ、嫌な予感。

「祐樹さん・・・祐樹さんがあ・・・」

シトリアが勘違いさせるのに都合の良い部分だけ言う。

「てめえ！！！！姫を泣かせるとはどう言うつもりだ！？?!」

「え、おい、いや、違うぞ？なあ、シトリア。」

シトリアは黙って俯く、心なしか震えて・・・笑ってる。はは・・・笑うのか泣くのかはつきりしろよ・・・。

「祐樹てめええー！！！！！」

バンバンッ！！！！

小さな馬車の中で拳銃の音が楽しく響いた

第19話：真実（3）（後書き）

こんにちは、甘味です。

個人的な第一章の終了もしまして、

次回から少しずつ番外編を入れようと思います。

これからも『あおしろ』をよろしくお願いします。

番外1：フランチユールの冒険（1）

「ねえ、フランチちゃん。遊ぼ？」

「おい！ガキは黙ってる！今日は俺と遊ぶんだもんな？」

「おいおい、黙って聞いてれば・・・俺に決まってるだろ？」

私の目の前で頭の悪そうな男達がもめている。

まったく、私はあなたたち全員まとめて興味が無いというのにな。

私は常に無表情を作り、彼らがもめている間にすっと抜け出す。

いつもこんな調子。男はみんな顔なんだものね。

私の住んでいる街は小さな田舎町。

言葉も、容姿も、考えも汚い人で溢れている。

犯罪なんて当たり前。この街の人は例え目の前で犯罪が起きても平気でコーヒを啜る。

そんな街に私は住んでいる。

できるだけ人目につかないように・・・歩いていても誰かと出くわしてしまう。

その男の子は手に花束を持ち、頬を赤く染めてジッと私を見ていた。

「あ、あの・・・」

声をかけてきた。やっぱり私なのですか。

「何ですか？」

私は無表情で答えた。

可愛らしい顔立ちのその男の子はどきまぎしながら私に告げた。

「その雪のように白い肌を持つ花のように可憐な貴女の全てを愛しています。僕と・・・」

男の子はそこで言葉を詰まらせた。はぁ・・・。

「ダメです。全然ダメです。無駄に綺麗な言葉で飾ってる時点でダメです。」

周りを言葉で飾らなければならない気持ちなんて大したことないに決まっています。

よって、私は貴方とはお付き合いできません。さようなら。」

私は強い口調で男の子に言い、後ろを振り向いた。

後ろで男の子の噁り泣きの声が聞こえる。

「もう僕は駄目だ」とか「生きる意味が無い」とか。ああ、もう。

私は早足で男の子の泣いている背中を追い、静かに耳元に口を近づけそつと言った。

「貴方は十分魅力的ですから、もっといい恋をしてください、ね。」
そして私は再び後ろを振り向き走った。

早く私のこと忘れてくれればいいのだけれど。

男の子の見えなくなるところまで走って私は一息ついた。・・・
息つきたかったのに。

私の目の前には強面の見た目20代前半の男。どうやら愛の告白、
ってわけではなさそうだけど。

「なあ、その可愛い嬢ちゃん。俺と一緒に楽しいところ行かないか？」

まあ、どうせろくな所では無いと分かるけれど、一応聞いてみた。

「楽しいところとは、どこですか？」

「へへ・・・興味持ってくれてんのか、まあ、すぐ分かるからよお。」

そういつて男は私ではない誰かに目配せをする。

するとどこからか3人の男が現れた。

「・・・どういうことでしょうか。」

「あ？お楽しみ之余興だよ。」

そういつて男達はニヤニヤして私を見る。

はあ、何故こんなに面倒な人たちに出くわすのでしょうか。今日に限ったことではありませんが。

男が私を捕まえようと両手を広げる。

・・・何が楽しくて貴方達に捕まらなければならないのですか。

私は自ら男の懐へ入り、鳩尾に一撃浴びせた。一瞬のこと。何があったのか他の3人には分からない。

「・・・あれ、どうやらお仲間さんは気絶してしまったようなのですが。」

わざとらしくそんなことを言ってみる。お願いだからこれで察して

逃げ帰ってほしいのですけど。

男達は一度驚いた顔をしたが、結局私に向かって飛び掛ってきた。

え……、もう、嫌なのに。

私は1人に鳩尾への一撃、そしてもう二人のお腹には堅いモノをグリグリと押し当てた。

「撃たれたくなければさっさと倒れてる人を背負ってどこかへ行つて貰いましょうか。」

……それと、そんな態度では女性は誰もついてきてくれませんかよ？ 第一貴方達、格好悪いですし。」

私がさういうと男達は青ざめた顔をしてどこかへと行った。

……ふう。

ふと視線に気付く。大方私を助けようともしたのでしようか、男がガタガタと震えながら影からこちらを見ていた。

あー……。もう。

……私は、自分ではよく分からないけれども結構綺麗な部類らしい。

けれど、この容姿で得したことなんてあまり思い浮かばない。

強いて言えば……。ドアを開けなくても誰かが開けてくれる事くらいかな。

ああ、誰か私の心を物凄い勢いで奪ってくれる人はいないのでしょ

うか。

そうすれば初めてこの顔が役に立つというのに。

・・・ふいに何やら賑やかな音。この街では珍しいその楽しげな音。今日は何かあったかしら？

私はその音に向けて足を進めた。

すると、音の元ではパレードが行われていた。そこには一台の車がゆっくりと走っていて、その周りには男達が群がっていた。

ああ、そういえば聞いていた。

確か最近王女が死んだとかどうとかで、私と同じくらいの子供が姫になったとかどうだとか。

それで、世界中を回っているだとかどうだとか。

まあ、私は関係ないけれどね。

・・・けれどやっぱりどんな子なのか気になるわけで、私は人ごみの中へと入っていった。

珍しく周りの男達は私のことを気にすることなく姫とやらをボーッとした顔で見つめていた。まあ、それはどうでもよいとして。

私は男達を押しつけて車の近くまで行った。

・・・私は息を呑んだ。

姫は男達が見とれるのも分かるほどに綺麗で清楚で輝いていた。

「綺麗・・・」意識せずともそうつぶやいた私の声に気付いたのか、
姫は私をジーツと見つめ、
ニコツツ！と、擬音がくつついてきそうなほどに飛び切りの笑顔を見せた。

今日の日記。 姫は大変なものを盗んでいきました。 私の心です。 とも口ずさみたくなるほど。

こんなつまらないことを言ってしまうほどに私は酷く動揺していた。

いや、アレ運命の人じゃね？

ってゆーか、もう、他にいなくね？

もはや、今日会ったこと自体運命じゃね？

あ、分かった。 私、姫と結婚するために生まれたんだ。 もう、それしか考えられないわ。

「姫っ！...!!」

私はボーっとしているうちに走って行ってしまった車に駆け寄り、声を出していた。

「何ですか？」

「私と・・・結婚してくださいっ！...!!」

自分でも何言ってるのか分からないくらいバカなことを言った。

けど、姫はそんな私にまたニツコリと笑ってみせて言った。

「無理 だってあなた、女だもん」

ガーン。こんなときに性別と言う壁があるなんて。

「・・・だったら・・・私・・・いや・・・俺・・・男になります
っ!!!」

姫は一瞬驚いた顔をした。正直私も自分で言っておいて驚いた。
すると姫はまた私に笑いかけて、車から一度降りた。

側近と思しき老人が呼び止めたが、姫はそれを気にせず私の元に歩いてきた。

緊張でガタガタ震えている私の首を抱え、口を私の耳元に置くと、
「期待しといてあげる、よ」

耳に当たる姫の吐息で私の体温は急・上・昇
自分の顔が真っ赤になっているのが分かる。

姫は私から一歩離れるとパチツ とウインクしてまた走って車に戻
っていった。

・・・それから10数分、姫がこの街から去っていくまでの間、私
はずっとその場に立ち尽くしていた。

心臓をはちきれんばかりにドキドキさせながら。

そして次の日。

「フランチュールさん!!!何ですか?!その格好は!!!!」

「うつせえよボケ共が！！近寄ってくんじゃねえ！！」

帽子にレザージャケットとレザーパンツにレザースーツ。普段は親父の趣味であるお姫様衣装だけでも、今日は断固拒否した。まあ、周りの男達が驚くのも無理はないだろう。

「うえええ〜ん・・・フランちゃんが・・・」

「泣くなバカ！！ウゼえんだよ！！」

私・・・改め俺は完全に変わった。
姫に相応しい男になるために。

方向性が違うか？そんなことは無いだろう。

まあ、とにかく・・・

・・・どうしよう。

そういえば相手は王族家だぞ。

俺の家も一応この街では一番の金持ちだが、王族家とはまったくつりあわない。

・・・そうだ・・・。思いついた。

「親父！！！！俺、旅に出る！！！！っつーか拒否権は無い！！」

「そうか・・・お前もそんな歳になったか・・・。ならば何も言うまい、コレを持ってゆけ。」

やけに物分りの良い親父は俺に銃を手渡した。

「その銃は我が一族に代々伝わる銃でな、無限に弾を発射することができる。」

きつとお前の助けになるだろう。それと・・・これも。」

親父が手渡してきたのは、小さな紙とペン。

「これは・・・？」

「それは武器紙と言ってな、そのうちお前でもどうしても勝てない敵が現れるだろう。そいつと戦うときに好きな武器を描けば、きつとお前の力になるだろう。お前にはこの紙を使いこなす素質がある。」

「・・・よくわかんねーけど、サンキューな！親父！」

「ちよつと待て、その前にその服を脱いでこつちを・・・。」

親父が持ってきたのは・・・お姫様衣装。

バンバンッ！！！！

親父からもらった銃は早速役に立った。

・・・と、まあ俺は旅に出た。

王族に認められる英雄になるために。そしてゆくゆくは姫と結婚す

るために。

番外1：フランチュールの冒険（1）（後書き）

番外編第一回、フランチュール編第一話です。

第13話でフランチュールがシトリアに呼び出されるまでのお話となっています。

ちなみに2話構成です。

フランチュール編の次にリータ編のお話も既に浮かんでいるのですが、このペースでは第二章に入るまで何日かかるのか少し不安ですが、どうにかやっつけていこうと思います。

引き続き『あおしろ』をよろしくお願いします。

番外1：フランチュールの冒険（2）

俺は、各地で依頼を受けながら旅をすることにした。人々に認知されていけば、王族家の目に留まり、姫との結婚を許可されるに違いない。

私は、主に街を荒らす盗賊団や、人々に危害を加える動物の討伐を主に行った。

何故なら一番目につくし感謝されるからだ。そこは効率よくいこうと思う。

カー・・・カー・・・バサバサバサッ！！

私の目の前に伝達鳥が飛んできた。

伝達鳥とはこの国の主な遠距離の伝達手段。そのスピードは超高速、とにかく速く飛ぶことのみの特化したフォルム。

所謂、定向進化ってやつだ。

伝達鳥は手紙を運ぶことに使われる。

私の前に現れた伝達鳥にも手紙が付けられていた。

私はその手紙を取り広げる。

フランチュール殿へ

どうも初めまして。私はリズレバークのジャベル＝ヤ・シピルと申します。

最近の貴女の活躍の程を聞きつけ、是非やっていただきたい依頼があるため、こうして筆を取らせていただきました。

ほほう、俺も結構有名になってきたな。もう、リズレバークから依頼が来るほどになるとはな。

私は王族家専属の料理人でありまして、10日後にある貴族内の食事会にて、

王様より『みなを驚くような料理を作れ』とご命令をいただき、フランチュール殿にはその材料を集めていただきたいのです。

材料なあ？

草集めなんてお断りだぞ。俺は農家じゃねえんだ。

勿論普通の材料ではございません。
集めていただきたい材料は・・・

ここで一枚目が余白をたっぷりと残しながら途切れる。
もったいぶる意味がわからねえよ。

・ 風神竜の血

え、あ、ちよつと待て、この時点で結構無理じゃ・・・。

・ 鬼山天狗の扇

・ 人喰い葡萄

・ 鉄人の剣包丁

・ 魔神虎の小指の爪

・・・よし、この依頼は流石に無理。

軍隊がいるだろ。これは。

以下の材料がシピカ湖沿いの塔に保管されています。それを運んでいただきたいのです。

むっ。急激に拍子抜けた。ただの運びの依頼か。

じゃあ俺はあんまり関係ないな。こんな甘い依頼を受けても意味はない。

報酬として、幾らか金をお渡ししたいと考えておりますが、私の一存では払える額に限度がありますので、

さらに、食事会への参加を報酬として考えております。

私の料理を存分に味わっていただきたく思います。

食事会・・・？それって、姫の親である王様がいるんだよね？

今のうちに仲良くなっておいて・・・ふふ・・・

オーケー受けたあ！！この依頼！！俺が責任を持って届けるぜ！！

と言うことで意外にもシピカ湖の近くにいた俺は、すぐにその塔へと向かった。

「・・・ここか。」

塔に到着。・・・洒落ではない。

塔と言う割にはそこまで高いというわけではなく、3階建ての只の建物と言った感じだった。

俺は早速中に入った。中は結構広い。

「ひっ！誰ですよ！？」

どこからか少女の声が聞こえる。上か？

何故いるのかは知らんがここは格好良いくところ。

「私の名はフランチュール！王家専属料理人から依頼を受け、食材を受け取りに来たっ！」

「王家？そつですの？じゃあ・・・」

トットツと音を立てながら少女は階段から降りてきた。

えーつと、え？

少女の体は手足が獣のようだった。

獣・・・とも呼べないか。何と言うか、悪魔のような手足だった。

「はい、フランチュールさんこんにちは。私は『世界の主』様よりこの塔を守るように命じられたキュペルと言いますの。」
と、少女はニコリと笑いかける。

世界の主？何それ？

少女は続けて話した。

「フランチュールさんは此処に用があるということとは私の敵さんですの。だから死んでもらうのですの。」

少女は飛び切りの笑顔で……って、え？

「いや、ちよつと待って。全然状況がつかめない。俺は只食材を……」

「問答無用ですのー!!!」

キュペルはその大きな足で一気に私に向かって走ってきた。

速いっ……

少女は俺に体当たりを食らわせた。

「ぐっ……。」

売られた喧嘩は買う。それが男だ。例え相手が年下であろうともっ!!!

俺は親父から譲り受けた銃を構えた。

最初使ったときは気付かなかったが、この銃は超高压で空気を押し固め、

その空気を打ち出す仕組みになっているようだ。

だから弾は減らない。威力も普通の鉛玉を打ち出す銃にまったく劣らない。

バンッ!!!

俺は少女の足に一発当てる。

「・・・何かやりましたの？」

少女は・・・無傷？

当たったはずだろう？俺が外すなんてこと・・・。

パンツ！！パンツ！！

再び足を狙って二発。少女は動くそぶりを見せていない。当たっている・・・はず。

「無駄ですの」

少女はニツコリと笑ってみせた。

「私は半邪ですの　いくらパンパンその玩具で撃っても一生勝てませんの」

半邪？何だそれ？

答えてくれるかは知らないけれど一応聞いてみた。

「半邪って何？」

すると少女は腰に手を当てて胸を張りながら言った。

「それは、人間と邪族の能力を半分ずつ受け継いだ新たな種族なのです！ふっふっふ　私は凄い子ですの」

・・・邪族・・・聞いた事がある。

そう、それは親父が昔言っていた。

そしてその邪族に通じるのは・・・武器紙か！

私はそういえば持っていた武器紙とペンを取り出す。

さらさらさらりと絵を描く。

「・・・何ですか？それ。」

私の手元に出上がったのは、・・・うん、これはもつとからど
うみても銃だろう。

「銃だ！！！」

「それって、あの、鉄の塊と言っんじゃありませんの？」

「うるさい黙れっ！」

どこからどうみても銃だというのに・・・。ねえ。

バンツ！！

「武器紙で作られたものだと分かっいて当たるおバカさんはいま
せん。」

おお、ちゃんと弾がでた・・・。

って、そこはびっくりするところではないな。どこからどうみても
銃なんだから。

少女は余裕に避けた。

バンツ！！バンバンツ！！

「何度やっても無意味ですの〜」

少女は俺の撃ち出す弾を避けながらも近づいてくる。

まずい、この距離はつ！！

ガキインツ！！！！

銃が・・・。

「自分からやってくるほどだからよっぽど強いのかと思ったけど、全然弱いですの〜」

そういつて少女はその禍々しい腕を振りかぶる。

やられるっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんてね。

バンツ！！！！

「この後に及んでそんな銃で撃つんですの？意味が無いと何度も・・・」

「はい残念でした。自分でわかってないのか？」

俺の打ち出した空気玉は少女の腹を貫いていた。

「半分邪族なのは分かったが。肝心なところが人間じゃ仕方ないよな。」

おお、今、俺かつこいいぞ。

・・・さ、最初から気付いてたんだぞ!!
ただ、すぐに終わらせるのもどうかなーって思ったただけだ!!

少女はその場で灰になって消えた。

「ふう、これでは持ち帰るだけだな。」

俺は階段を上っていった。

・・・

・・・

・・・

一階の柱の影。

「チツ・・・やっぱり出来損ないじゃあ守りきれなかったか。

まあ、いい。全てはあの方の思い通りに進んでいる。面白いものも
見れたしな。」

カツ・・・カツ・・・

男は静かに塔を後にして行った。

「お、重いっ！重すぎるぞコレは！！運ぶだけで筋肉が隆々になりそうだ！」

大きな荷物を持ちながらゆっくりと階段を下りるフランチュールの知らないところで、

確実に何か動き始めていた。

と、俺は何かか期限までにリズレバークに到着した。
重いのなので移動に時間がかかってしまった。

「おお！フランチュール殿！お疲れ様です！」

料理人が俺を出迎える。

「てめえどういことだこの野郎！！番人がいるなんて聞いてねえぞ！！」

料理人は不思議そうな顔をして言った。

「変ですねえ。その塔には警備兵2人しかいないはずですが？」

「警備兵？そんなの何処にも……。」

「ま、まあいいじゃないですか。で、材料のほうは？」

「ああ、これだ。・・・っしょっと。」

俺は重い荷物を料理人の前に置いた。料理人は中身を見る。

「・・・はい、確かに！では、明日、食事会ですので！ご参加ください！場所は・・・」

その後俺は料理人から食事会の場所や今日泊まる宿を聞き、報酬の金を受け取った。

「さて・・・何をするかな。」

そういえば初めてだな。リズレバークに来るのは。

人が多いったらありやしねえ。みんな平和ボケした顔してるなあ。

俺はそんなことを考えながら街を歩いていた。

バサツ！！バサバサバサツ！！！！

俺の前に伝達鳥が現れた。おいおい、俺は明日大事な用があるというのに・・・。

まあ、一応中身は確認しておくか。

フランチユールへ

メルヴェイに来なさい。

以上。

誰だよコイツ。偉そうに。ぶっ飛ばしてやろうか？差出人はどいつだあ？

シトリアより

「すぐに行きますっ！！！！！！」

俺は街の中で手紙に向けて精一杯の返事をした

番外1：フランチユールの冒険(2) (後書き)

こんばんは、甘味です。

と、まあこのような形で第13話に繋がります。

次はリータ編です。

本編では地味になりかけているリータが大活躍？します。

番外2：リータの道（1）

私の名前はギベルニャ・シャミューレイル＝ペレプリーチル・ケルパ。

親の悪ふざけで付けられたこの長い名前は私は大嫌いだ。

「いや、悪ふざけではない。出産前日に見た映画に感動してその主人公の名前が・・・」と私の親は言った。

・・・それを悪ふざけと言っただと思っ。

ともかく明後日王国騎士団の入団試験の日。

何をするのかは聞いていないが、恐らく実技的なものを見るのだろう。

「そっといえばあの映画の主人公も騎士だったな・・・。」と私の親は言う。

・・・何だか嫌な気分になった。

私の住む町はペルニーと言う小さな農村。ちなみに小さくて甘くて美味しくて高いピッツルと言う果物で有名だ。

大抵は家の農業を継いでいくのが当たり前になっているこの町で、

何故私が王国騎士団に入ろうと思ったのかと言うと、

それは3年前の話。盗賊団に村が襲われたとき、王国騎士団の人が助けに来てくれた。

その姿が余りにも格好良くて私もそうなりたと思った。と、まあそれだけ。

女が騎士になるって言うのは結構有り得ない話らしいが、そんなの私には関係ない。

その騎士団に憧れてからは私は家の農業を手伝うと共に、必死で剣術の練習を重ねてきた。

たまに家の仕事を休んで隣の大きな街にある依頼板の仕事に手を出すこともあり、

それで得た収入のお陰で親も私の頑張りを分かってくれたのか、騎士団の入団試験を受けることを許可してくれた。

「あの主人公も最後には転んで突き指をして死ぬんだよな……。」

……本当にそれ……どんな映画だったんですか？

依頼の報酬から少しずつ貯めていたお金で馬車を借りて、私は一日かけて首都のリズレバークへと来た。

試験は明日。今日は観光しようかな。首都なんて来たことないからね。

いや、明日受ければ毎日この景色を見ることになるのだろうけど。

……それにしても人が多い……。

何だこの人の多さは。今日は祭りでもやっているの？と言うくらい。

街にはお店が沢山あって、一日中歩いても飽きないのではと言うくらい。流石首都と言うか。

「おいっ！早くしろ！！」

男が誰かを呼ぶ声。

呼ばれた誰かは何か大きな荷物を担ぎながら男の元へいき、2人で路地へと入っていった。

………怪しい。

どうせ暇な私はその2人を尾行することにした。

長く細い道を通っていく。中には人一人しか通ることができないような道もあった。

私も少し通るのがきついくらい。いや、胸の話ね？他は全然よ。うん……全然……。

それにしてもそんな道をどんどん進める男達が凄い。

行き着いた先には小さな家があった。

中に入っていく男達を見て、私はドアから中の様子を伺うことにした。

「ここまで来れば大丈夫だよな！」

「ああ、この場所は誰にも知られてねえ。」

いや、私に知られてますが。

うーうー！と中で唸る声。

「おっと、起きちまったみてえだな。おい、マスク外してやれ、丁重にあつかわねえと。」

男が「ああ」と言うと、ガサガサと音を立てて、次に声が聞こえた。「何なんですか貴方達は！！」

少女の声。・・・これはもしや、誘拐とか言うやつですか？

「へっへ、この前貴女様のお姿拝見してよお、惚れちまったんだわ。」
「そういつて男はいやらしく笑った。」

「わ、私みたいな何の力のない子供を誘拐したって何も意味はありませんよ?!」

「おいおい、何言ってるんだよ。第3王女様が・・・。それに第2王女も病気で死に掛けてるらしいじゃねえか？未は王女にだってなるかもしれねえ、これを放っておく手は無いだろ？」

「う、うう・・・。」

「くぅ〜！泣いてる顔も可愛いなあおい！コレは高く売れるぜ〜！？」

「売るのが？国を脅して金を分捕ったほうが良くねえか？」

「いやいや、俺の知り合いで超高値で買うつーやつを知ってるのがあるんだよ。」

王族家なんてどうせ財布の紐ゆるめやしねえ。ま、そんなこと後でいいじゃねえか。とりあえず今は商品価値を調べとこうぜえ・・・？」

男達が気持ち悪い笑い声を発する。

「いや・・・いやっ！！何するんですか？！！変態！！！！！！」

つて・・・聞いている場合じゃない！！

バタンツ！！

「やめなさい貴方達！！」

私は声を張り上げた。

男は少し驚いた顔をしてから言った。

「・・・ああん？何だてめえ、どこからきやがった。」

「私のことなどどうでもいいでしょう。その子を放しなさい！！」

「お前・・・ずっと聞いてやがったのか。これは生かしちゃおけねえなあ・・・。」

男がナイフを取り出しながら言う。

「おい、殺さないでこいつも売りつけちまっつてどうだ？」

「へへ・・・お前いいこと思いつくなあ・・・。」

そういつて男は私の体を品定めでもするように見た。

「・・・ダメだな。売れないわ。これじゃ。痩せてはいるが胸もな

バキッ！！ドカッ！！！！ボコッ！！！！！！ガスッ！！！！ドスッ！！

!!!ヒューー・・・ガツシャン!!!!!!

・・・ふう、片付いた。

え？別に怒ったわけではないですよ。決して。

やっぱり人間として見る目がある人も無い人もいるわけで。まあ、勿論この人達は見る目が無いわけですけどね？

別にそんなことで怒るなんてこと・・・いや、ただ少女を助けることが最優先だったわけで、決して胸がどうか言うことで怒ったわけではないです。

「大丈夫？」

私は少女を縛り付けていた紐を取ろうとしながら言う。

「ああ、全然大丈夫よ。あ、いいわ。」

そういつて少女はブチッ！と音を立てて一人で紐を切った。

「え・・・。」

「別に全然大丈夫だったのだけど、まあありがとう。丁度ぶん殴ろうとしたところで貴方がきたから、拳を痛めずに済んだわ。」

そういつて少女は立ち上がり、うっくんと腕を上には伸ばした。

「え、いやさつき泣いてた・・・。」

「ああ、その方が油断させやすいじゃない？まあ、こんな雑魚、油断させなくても余裕に倒せるけどね。」

・・・。

「貴方、騎士団の人？」

少女が私に言う。

「いえ、明日入団試験を……。」

「そう、せいぜい頑張ってね。」

「は、はい！」

少女はトットツと家を出て駆けていった。

……そういえば何で敬語で話しちゃってるんだろう。

酷く損をしたような気分になりながら、私はその場を後にした。

番外2：リータの道（1）（後書き）

こんばんは、甘味です。

一応解説を入れると、ギベルニヤ・シャミュール＝ペレプリイ
チル・ケルパとは、リータのことです。

何故名前が違うのか、と言うのは2話で明らかになります。

ちなみにリータ編は4話構成の予定です。

1、2話は騎士団長就任のお話。

3、4話は学校で先生をしているときのお話です。

こんなに番外編を頑張っでどうするのだろうというの目は瞑って
一気に書き上げようと思います。

では、引き続きよろしくお願ひします。

番外2：リータの道(2)

「えー、本日は大変良い天気恵まれ、

まさに何と云いますか、試験日和とでもいいたいでしょうかね。

もう、とにかく今日は皆様の頑張り日和と云いますか。あ、私は騎士団長のリータと云うのですがね。

騎士団長って言うのは、まあ……………」

…………話長い…………。

今日は入団試験。何故式を執り行っているのか分からないんですが、とにかくこいつは何なんですか？先程からにこやかな顔で話し続けている。

いや、これが講評とかなら分かります。いや、百歩譲ればそれは分かりません。

「と、言う感じの仕事をしているわけなのです。

まあ、とにかく私が一番偉いということだけ分かっていただければそれでいいかなーなんて。

とにかく今日は良い天気恵まれましてね、まさに試験日和と云いますか……………」

それさつきも言ったよ！

先程から日差しを浴びながらも立って話を聞かされている入団志願者たちももうフラフラ、私もフラフラだ。たぶん30分は余裕で過ぎた。

「…………と、まあこんな仕事をしているわけで。ふう、で、まあ私

が騎士団長になったのは今から3日前のお話になりますね。

あのときは私も若かった。上司にも逆らいたい盛りでね、もう騎士なんてやめてやるうかと何度思ったか・・・ふう・・・」

3日前？3日でこんなに老けたんですか？

心なしか騎士団長もハアハア言っている。そんなに苦しいなら喋らなくて良いのに！もう1時間近く経ったころ。

「おら、てめえ、いい加減にしろやあ！！こっちは試験受けにきたんだっつーの！！」

誰かが一人そう思ったと思ったら、それに乗じて周りの入団志願者が騒ぎ出す。

ああ、大変だ。止まらない。

正直私もそれに加わろうかと思ったが、騎士団長の顔を見た瞬間にそんな気は一瞬で消えうせた。

騒ぐ入団志願者はその顔は見えていない。その・・・鬼よりも怖いだろうその顔に。

私の隣にいた子とふと目が合った。

彼女も半泣き状態。私も半泣き状態だ。

ジャキンッ！！

騎士団長が剣を抜いた。・・・あ、マズイ。私はこんなとき動物的本能が働くんだなあ、ふと思った。

私はその騎士団長の様子を見て、恐れからペタリと座り込んでしまった女の手をとっさに取り、

避難した。一応・・・いや、死活問題だった。

ヒュンッ!!!

騎士団長の剣が一閃を放った。

「……え？」

先程まで騒いでいた入団志願者が静まる。

特に何も起きて……

ズドドドドドドドドドドッ!!!!!!!!!

騎士団長の足元から地面が崩れていく。そのままポカンと立ち止まっ
つてしまっている入団志願者まで崩れていき……。

ズズズズズズズズズズズ……。。

……先程までいた入団志願者はおよそ50分の1となった。つて
言うか6人しかない。

騎士団長は入団志願者が地面に落ちていった穴を見てニッコリとし
た顔を取り戻すと言った。

「今年は6人ですか!いやあ、予想通り残りませんでしたか!」

……へ?

「入団試験終了です。良かったですねえ、皆さん。」

・・・これは後から知った話。

これは毎年行われている試験方法で、騎士たるもの耐え忍ぶ力を持って。だとかそういうものらしい。

大抵誰かが騒ぎ出すか、貧血でぶっ倒れるかで殆どいなくなるらしい。

さて、これで私は晴れて騎士団に入団できた。・・・達成感が0なのは言うまでもない。

・・・それにしても騎士団長は素直に凄いと思った。

地面が崩れるほどの技って・・・と、思っていたが。地面が崩れたのも元々仕掛けがしてあったからだとか。・・・ダメだね。

まあ、とにかく騎士になれた、何も言うまい。

「あ、あの!!」

そっいえば私が助けた女が私の目の前にいた。

「あの、ありがとう!!えと、名前・・・」

「リータ。」

・・・え？

「ああ、リータさん!本当にありがとう!私、騎士になるのが子供の頃から夢だったの!!」

「え、いやいやいや、私何も喋って・・・」

「謙遜しちゃダメよ。リータ。」

私の後ろで勝手に声を出していたのは・・・昨日の少女。

「え、あ、何でここにリータ？」

色々疑問が出てきて色々混ざった。

「何よ。あなたは騎士団長ながらも、あえて入団試験に入り込み有望な若者を選び、助け出したんじゃない。」

少女が言った。

「そうなの！？リータさん！貴女、騎士団長なのですか！」

「そう、貴女も誇りに思うことね。リータに選ばれたことを。」

「はい！本当にありがとう！リータさん！では、失礼しました！」
女は私と少女に一礼し、走っていった。

「・・・って、どう何がどうしてどうなったの?!」

また色々混ざった。すると少女はふうとため息をつき、話し出した。

「あの、入団試験のあとに騎士団長が倒れたのよ。歳の割りに頑張りすぎたみたいで。」

騎士団長は私が選んでるから、就任させて3日でぶっ倒れるような人を選んだー、なんてなったら私の人選にミスがあったってことになるじゃない？

困るじゃない？で、ま、昨日貴女が良かったのよ、本当に、その、丁度良かったの。」

「……それ、誰でもいいんじゃないの？」

「ええ」

少女はニツコリと笑っていった。

「でも、こんなチャンス滅多に無いわよ？」

む……そりゃそうだ。

「はい、じゃあ、決まりと言うことで。」

「え、何も言つてな……」

「じゃあ、明日から早速仕事だから。あ、そういえばまだ名前を言つてなかったわね。私の名前はシトリア。この国の第三王女よ。」

第三王女って言ったら……あの、相当偉いあれ？

「私の名前は……」「貴女は今日からリータ。今日は就任式があるから参加してね。」

……何かもの凄く押し込まれた感が……。
でも、まあ今度からあの長い名前を名乗らなくて済むことを考えると、親には悪いけど少し気が晴れたり……。

午後5時。

私は何もかも初めて見るものだらけの宮殿へと就任式にやってきていた。

カタ・・・

就任式まで時間がある。暇だった私はせっかくだし彼方此方みて回りたいなど、無駄に広い廊下を歩いていた。そんな時、その音は聞こえた。

何だろう？どこから聞こえてるんだ？

どこから・・・分かった。あからさまに盛上がっている壁。と、布。・・・隠れているつもりなのだろうか。

「何をやってるんですか？」

「何?!見つかっただど?!」

・・・布をバツと投げるとそこにいたのは若い男だった。

「・・・誰だお前。」

いや、貴方が誰ですか逆に。

「いや、今明らかに怪しいのは貴方なので、貴方から名乗ってください。」

「俺か？俺はな・・・この宮殿で国王を暗殺しに・・・ハッ!」

男はとっさに口を押さえた。え、マジ？

「本当なら、見過ごすわけには行きませんね。騎士団長として！もうすっかり騎士団長気分。というより、言ってみたかった。」

「違うっ！口が滑っただけだ！」

「いや、せめて否定しなよ?!」

「あ……………」

バカなのか？いや、バカだろう。これは。

「…………まあ、いい。どうせここで死ぬんだからな。お前は。」

「…………へっ？」

ガキイイインツ!!!!!!

男はいきなり剣を振った。私がつさに回避するとその剣は地面にぶつかり大きな音を立てた。当たったらひとたまりも無かっただろう。

仕方ない…………

私は剣を抜いた。

「私の名前はリータ！貴殿の名を名乗れ！」

騎士はこんな風に戦つような気がする。映画で見た。

「あん…………ああ、俺、騎士じゃねえからわかんないわ。」

キインツ!!

私は剣でガードした。今度は…………こっち、からっ!!

ガイנטツ!!

・・・へ？私は男の腕を切った。・・・はず。男は普通の服を着ている。なのに剣が通らない。何故？

「ほお、威力抜群だな。これ。」

「な、何をしたんですか?!」

「おいおい、それで武器紙を使ったなんていえるわけ無いだろ?」

「思いつきり言ってますが?!」

「はっ!しまった!!」

武器紙・・・?聞いた事がない。

もう一度っ!

ザシュツ!!

今度は普通に男の腕に私の剣がかすった。

「つて、ええ?!これ、一回しか効果出ないのか?!!!」

「・・・へえ、そうなんだ・・・。」

「ちょ、ちよつと待て!!!!」

そういつて男は胸ポケットから紙を取り出した。

「何、それ?」

私は分かりながらもあえて聞いてみた。

「あん?武器紙・・・ハツ!」

それ言われて描かせるバカいないよねえ？

私は剣を振りかぶり死なない程度の一撃を・・・

「はい、残念でしたー。」

誰かの声が聞こえたかと思うと目の前がボツと赤くなり、私が今倒そうとした男は一瞬で灰となって消えた。

「へ？」

「惜しかったな残念ー！でもま、コイツはバカだから勝てないとおかしい、か。」

何処から聞こえているのか分からないその声。

「誰だ?!」

「さあ？俺もわかんねえな。」

そういうと、私はこの場から何かが消失したことを感じ。男の声は聞こえなくなつた。

・・・何だつたんだろう？

つてか、そういうば・・・時間?!マズイ!!私は走って会場に・・・

バンツ!!

「遅れてすいませんっ!!!!!!」

番外2：リータの道(2) (後書き)

こんばんは、甘味です。

12話でヴェイが言っていたリータの恥ずかしい話とはこのことでした。

緊張ではなくリータは頑張ってた戦っていたということなんです。次回からリータ先生編です。

では、これからもよろしくお願いします。

番外3：学園リータ（1）

騎士団長として仕事を始めて数日、私はシトリア姫に呼び出された。姫、つまり先日第二王女だったヴェラ様はお亡くなりになり、シトリア様は第二王女に就任なさったのだ。

ふふん、王族家の話にも詳しくなって、私もすっかり都会っ子だね。なんて。

こつちのことは勝手が分からないことが多かったりする。

ここでは女性は結構丁重に扱われるみたい。

食事も誰かが持ってきてくれるし、剣の手入れもしてくれる。・・・まあ、剣の手入れはどうせ後で自分でもやるんだけどね。

でも、あの就任式での一件以来、どうも団員になめられてる気がする。

「鎧の下にも服は着るんですよ？」とか。セクハラだ畜生。まあ、

その場で彼がどうなったかは言うまでもないけど。

他にも「スプーンとかフォークって使えますか？」とか。

お前らの中で私はどれだけ原始的なんだ畜生。あの一件でどうやら完全なる田舎者だと思われてしまったらしい。

・・・田舎者＝裸という方程式はどうかとも思っが。いや、裸になつたわけでもないけどね？

・・・と、呼び出された部屋はここだな。

コンコンッ

「リータ？入って。」

「失礼します。」

中に入るとそこには未来的な機械がどっさり。見たこと無いものだらけだ。

「ああ、リータ。その辺りの椅子に座って。」

「あ、はい。」

私が椅子に座ると姫は真剣な顔で話し出した。

「今から言う話は王族家の中でも知る人は殆どいないこと。絶対口外はしないで欲しいの。」

王族家でも少ないような話を何で私に？

そう疑問に思ったが、私は黙って頷いた。

「今、この世界はとても危険な状況にあるの。貴女・・・と言うよりこの世界の人の殆どは知らないけれど。」

危険？こんな穏やかなのに？

「クレパ、カエムの住人がリズレバークに住んでいることは知っていますね？」

ああ、確か、国の大規模な工事で一時的な移住だとかどうだとか。そんな話は聞いていた。

私は再び頷いた。

「表向きでは違う理由でこの街に住むようにしているのだけど、本当は違う。」

今、あの街は『クラシユ』と言う邪族たちの組織によって狙われているの。」

「え？」

クラシユだとか邪族だとか・・・知らない単語が多すぎる。

「街を守るために私が作った組織。それが『エクシル』。エクサー、って知ってる？」

「あ、はいそれは知っています。でも、その力は今の人間には殆どないと聞いていますが。」

「一部を除いて、ね。その一部を集めた組織が『エクシル』なの。私にもエクサーの力が20%近く残ってる。」

王族家でできるだけエクサーの血を持つ者を作るためにエクサー同士での結婚、出産を長年に渡って続けてきた。

その成果が私、ってわけ。」

「成程・・・。それで、つまりどういうことですか？」

「私が貴女にこれからお願いすることは全部で二つ。」

一つ目は貴女に『エクシル』の幹部として騎士団長に加えて働いてもらう。」

街を守るため、それなら当然やるべきでしょう。騎士として。私は頷いた。

あ、いや・・・

「ちょっと待ってください。私に戦う力なんてあるんですか？」

「あるの。何故かね。エクサーとしての力は私より貴女のほうが強いわ。恐らく覚醒遺伝ってやつだと思っただけねど。」

成程。

「で、二つ目とは何ですか？」

「ええ、とりあえず、リータにはあっちの世界に行ってもらおうから。」

「へ？あっちって？」

姫は一度考えるような顔をしたかと思うと、どこからか紙袋を取り出して私にポイツと投げると、部屋の奥へ行った。

「え、姫？どういことですか？」

ガッシャンッ！！！！

え？何この音・・・

ウィーン・・・ズドンッ！！！！

えっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

次の瞬間、私は意識を失っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ハッ！！！

目を覚ました。ここは……え、どこ？

「お、起きましたか。」

って言うか……誰？

ベットで眠っていた私を見下ろす男は、メスを持っていた。

「……え、いやいやいや?!?!何者ですか?!」

「あ、はい？ああ、すみません。コレはアレです。服をアレしてアレしようかと。」

「ああ。成程。服をアレね？なら……ってならじゃないでしょう?!ホント何者ですか?!只の変態ですか?!」

「おいおい、俺は姫さんから頼まれたんだぜ？とりあえずアレだ。今回の任務を見ようぜ。」

「……任務？」

「ああ、姫さんから渡されてるだろ？」

・・・ああ！そういえば！

私は何となくいつの間にか握っていた紙袋を開ける。

中には紙と・・・紙束と・・・紙束・・・紙ばかり。

とりあえず私は男にも聞こえるように紙の中身を読んだ。

「リータとクロイドへ。

そっちの世界で救世主を探してきなさい。

そっちの世界で使えるお金は準備しておいた。それで。」

・・・アバウト過ぎじゃない？

ああ、でも成程。この妙な人の絵が描かれてる紙がこっちの世界でのお金ってことね。・・・何か信用ならないけど。

クロイドとやらは私に何だか変な服を差し出して言う。

「よし、じゃあ、とりあえず着替える。俺の見える場所で。」

バキッ！！ドカッ！！ボコッ！！！！

「・・・いや、あの、これ、こっちの世界の服なので・・・すいません・・・。」

クロイドは半泣き顔で言った。

「あの、ってゆうかこっちの世界とかそっちの世界って何ですか？」
私は何事も無かったかのように言った。

「ん？姫さんから聞いてないのか？まったく・・・でもただで口を開くわけにはいかねえな。俺の口を開けたかったらお前の服の胸の部分のボタンを開くことから

バキッ！！ドスッ・・・！

「いや、ホントその、これはお約束みたいなもので・・・あの、ほら、天井ってやつ・・・。」

「あん？もう一発か？」

「すみません・・・。」

私が短剣をグッと握って見せるとクロイドは短剣をチラチラ見ながら話し出した。

「えっとだな、あの、簡単に言うなら、そうだな。・・・。」

・・・余りにも長かったので省略。どこが簡単？

「・・・。人の話聞くのをこんなに嫌になったのははじめてかも・・・。」

そしてその話が今までいた世界は作られた世界だとか、余りにも現実からかけ離れていることもその嫌気をより増大させた。

「まあ、徐々に分かっていたのを見て男はそうだった。」

露骨に嫌な顔をしていたのを見て男はそうだった。

「・・・で、結局私達はどうすればいいの？」

「えーつとだな、俺が姫さんから聞いていたのは・・・
あー、この近くの学校の生徒の中に救世主とやらがいるらしいんだ
わ。そいつを見つけ出してつれて帰るんだとよ。」

「・・・で、その人の名前は？」

私がそういうとクロイドははっとした顔をした。

「・・・分からないのね。」

「ああ、そうだ！目の色が真っ黒な人がそうだとか言ってたぞ。」

「へえ、で、その学校に普通に入って行って大丈夫なの？」

「ああ、お前が先生になるから大丈夫。」

「・・・え。」

「え、何、勉強しなきゃいけないの？マジ？無理だよ？」

「そのために俺がいるってわけだ。こっちの勉強にも興味あってな。
お前は俺が書く紙の通りに授業をやればいいよ。」

「成程。」

中等学校で脱落した私には無理だもんね。

「で、そのさつき渡した服が明日から着る先生の制服って訳。で、
と・・・とりあえず、サイズが合ってるかどうか調べたいな、と。」

クロイドが私の体をジーツと見る。

「あー、しまった。姫さんから聞いてた話より酷いな。合いそうに無い。胸の慎ましさが半端じゃ

バキッ！！ボコッ！！ドンッ！！ドストドストドス・・・

「待て待て待てっ！！そんなに言うならここで着てみる！俺の目の前でほらこの下着まで着替え

男は限りなく薄くて先が見えるような下着を取り出して言う。

・・・。

ゴキバキゴッ！！！！

私の首への一撃にクロイドは有り得ない音を出すと動かなくなった。

番外3：学園リータ（1）（後書き）

どうも、甘味です。

私事により少し更新遅れてしまいました。すみません。
次回番外編最終話。

少し前からリンクに設置してあるのですが、

『あおしろキャラ紹介プロジェクト』を実施中です。

よければ一読、さらによければご協力よろしく願いいたします。

では、今後ともよろしく願いします。

番外3：学園リータ（2）

「先生、おはようございます。」

「……、あ、先生って私のことか。」

「あ、ああ？！おはよう、えーっと、……。」
名前を思い出せなくて困っているとその男子生徒は私をジーツと見て、わざわざ名乗ってくれた。

「赴任したばかりだから仕方ないですね。僕は祐樹って言います。」

むうっ！コイツめツ！さりげないフォローが染みるぜツ！
とか何とか考えてみたり。

「……でも、こんな生徒ばかりならうまくやっていけるような気がする。」

「……って、ハッ！！しまった！私は人探しが目的だった……
この調子で大丈夫なのかな……。」

「先生？」

祐樹君が不思議そうな顔で私を見る。

「あつ、ああ、祐樹君！さ、教室行きましょう！」

はい、と頷く祐樹君と共に私は担当する教室へと向かった。

「はい、初めまして皆さん。私は梨射多リイタと言います。先日既に話が
あつたかもしれませんが、
本日から、えーっと、まあ幾らか勤めます。特に文学の授業を担当
します。」

男子生徒たちがフウ〜!!!と唸る。

ふっ。私の美貌を持つてすれば、当然の反応ね。

よく見れば盛り上がっているのは端にいる眼鏡男子集団のみだとい
うことは目を瞑っておく。

ところでそういえばさっき祐樹君と会ったときは意識してなかった
けど、祐樹君は目の色が黒だったなあ。

・・・で、何でみんな目が黒いんですか？

右の女子から左の男子までみんな目が黒いんですけど？・・・え、

何？誰でもいいの？救世主だらけですか？・・・クロイドのやつ・・・。

「では、今日一日頑張つて勉強しましょうね・・・。」

私は早速の幸先の悪さに頭を痛めながら教室を出た。

どうやらこの学校は何校かの学校と隣接・・・と言うより合同で学
校事業を行っているらしい。

先生もあつちの学校へ行つたりこつちの学校で授業をしたり・・・
大忙しだ。

学校は小等学校だったり中等学校だったり、男子高校もあつたり女子高校もあつたり・・・全部で5校にも及ぶ。

私は来たばかりだから、と2校分の授業しか割り当てられていない。

・・・で、ものの見事に迷いましたとさ。

どうしよう。授業前だから誰もいない。職員室にも戻れない・・・。

あわわわわ・・・やばい。心なしか動転してわああああ・・・！！！！

「せ、先生。大丈夫ですか？」

私が頭を抱えていると男子生徒が話しかけてきた。

「え、こんな時間に何で？」

「あ、いや！あの、えーっと、ちょっと体調が悪くて・・・。そんなことより、先生こそ授業じゃないんですか？」

「え、いや・・・その・・・迷っちゃった、テへ」

頬に指を当てて可愛さアピールッ！これで道を教えてくれない男子はいな

「先生なのに分からないんですか？そういうものは事前に知っておくべきですよまったく・・・。」

なッ・・・！？私のアピールが効かないっ？！な、何だ、この不屈き者はっ！

「君、名前は？」

この不届き者の名前を聞いておこつ。

「浩太です。」

浩太は一度ため息をついて廊下の先を指差していった。

「次の授業だったら、ここを真つ直ぐ行つて右に曲がつて真つ直ぐ行つて突き当たりで左に曲がつたところの突き当たりの教室です。」

ふつ、何だかんだで教えてくれるのね。

「そう、ありがとう。」

私は飛び切りの笑顔を浩太に………つて、いねえええ………
……失礼にも程があるでしょ………。

えつとー、真つ直ぐ行つて………。

ああ、着いた。ここだ。

そういえば……浩太は私の担当のクラスの生徒だったはず。何で
違うクラスの私の授業の割り当て知ってるのかしら………？

……ああ、そうか。あの子私のファンね。あの、今流行のツンド
ラだかツンメレとか言うやつね。きつと。うんうん……。

ドアの前で頷いていると中の生徒がジッと私を見ていた。いけない
いけない………。

ガララッ！

「どうも、おはようございます。
今日から皆さんの国語の授業を担当する梨射多です。まだ分からないことだらけですが、どうかよろしくお願いします。」

私はそういつて生徒達にペコッと一礼した。

生徒達はポーッと私を見る。・・・？

「え、えと、じゃあ、授業始めようかなー・・・。」

よくわからない空気の中、私は授業を始めた。

「じゃあ、教科書の153ページから、えーっと・・・宏詩君。ここ、読んでください。」

私は名簿から一番近くにいた生徒を指した。

「あ、あひ?!」

あひ、って何？

「あ、わえ?おうあ??!ああわあわあ?!?!?!?」

「・・・大丈夫?」

私が少し顔を生徒に寄せて言うと。その生徒の顔はみるみるうちに赤くなった。

・・・バタ・・・

「え……。」

宏詩君は机に大きな音を立てながら伏せ倒れた。

教室がざわめく。

「だ、ちょ、みんな!!ちょっと落ち着いてっ!!?あわわわっ!!」

「先生が一番落ち着こうよ?!」
そういつてくれたのは見知らぬ女子。あれ、このクラス、女子居たの?

「え、つと、これ、え、どうすればいい!?!」

思わずその女子に聞いてしまった。情けない……。

「と、とりあえず保健室っ!!!!」

「そっかつ!じゃ、じゃあ誰かつ!!!」

ガタガタガタツ!!!

………みんな行くことないよねえ……。

「あはは、初日から先生災難ですね〜。」
さっきの女子生徒が言う。

……?……私が不思議そうな顔をしているとその生徒は続けて話した。

「このクラスは女子が私しかいませんし、教科の先生も男の先生ばかりなんですよ。」

だから、先生みたいな綺麗な人が来たからみんなボーっとしちゃって。宏詩君なんかガチガチに緊張しちゃって。」

そういつて女子生徒は可愛く笑った。

ほほう、この女子見る目があるではないか。

「貴女の名前は？ごめんなさい、まだ覚え切れてないの。」

「あ、私は咲つて言います！木城咲です！」

「へえ、これから色々よろしくね、咲さん このクラスで頼れるのは咲さんだけみたいだし……」

全員出て行ってしまったときに開けられたドアを見つめながら私は苦々しく笑った。

キーンコーンカーンコーン……

「……と、鳴りましたね。結局殆ど授業できませんでしたね……あはは……。」

「さて、じゃあ、咲さんは次の授業の準備しよっか。じゃあ、私は職員室に戻るね。」

咲さんは私に授業頑張ってください と手を振ると次の時間の教室へと移動していった。

・・・はっ！しまった！！職員室ってどろちやっっていけばいいんだろ
っ？！！！！！

・・・

・・・

・・・

と、まあ黙ってたらしりて着くかなーとか思ったけどやっぱり無理
な訳で。

私はさっきも見たような廊下をうろろろしていた。

ヒュンッ！！！！カランッ・・・

・・・へ？

私の目の前を通った何かは壁にぶつかり大きな音を立てた。

壁に刺さっているのは・・・クナイ？何でこんなところ・・・ヒュン
ヒュンッ！！！！

危なっ・・・「誰！？」

私は声を張り上げ周りを見渡した。しかし、そこには誰もいなかった。

・・・どうなってるの・・・？

結局私は誰がやったのか知ることでもできず、職員室に辿り着くこと
もできず、何となく家路についていた。

まあ、今日はもう授業は持ってないはずだから平気なはずだけれど。
今頃、学校も終わったに違いない。だいぶ長い時間迷っていたし。

「……。」

つい最近聞いたことのある声が後ろからぼそぼそと聞こえた。

「誰?!」私が振り向くとそこにいたのは、見る目がない男代表の
浩太だった。

「ちょ、そんな怖い顔しないでくださいよ。先生と一緒に帰ろうか
な」って思っただけですから。」

何だ……ふっ、もてる女はつらいわね……。
私と浩太は一緒に歩き出した。

浩太が歩き出して少し経つと話し出した。

「そういえば、梨射多先生ってどこから来たんですか?」

「えっと、まあ、遠いところからかな。」

としか答えられない。この世界の地理は分からないし。

「遠いところって?」

浩太がまたたずねる。

「遠いところは……遠いところよ。」

「……………」

浩太がボソボソと何か単語を口にした。

「え？」

「いえ、何でも無いです。まあ、誰にでも事情はありますよね。」
そういつて浩太は軽く笑って見せた。

「誰にでも…………ね。」

浩太は再び繰り返して言うと、何か違うところにいるかのように空を仰いだ。

何だか不思議な子…………そう思って私は何かを聞こうとしたとき、
浩太はいつの間にかどこかへいなくなっていた。

番外3：学園リータ(2) (後書き)

こんばんは、甘味です。

少々長くなってしまったので、学園リータ編はもう少し続きます。
次回は本編に関わる結構大切な話になります。

では、これからもよろしくお願いします。

番外3：学園リータ(3)

先生として働き始めて何週間か経った。

もうこっちの生活にもすっかり慣れ・・・って、アレ？そういえばここに何しに来たんだっけ？

「リータあ、腹減ったぞこのやろおお・・・!!」

クロイドが学校の教科書などがぶちまけられた机に突っ伏しながら言う。

「はいはい・・・分かったよ・・・。」

「お、つつーか待て、やっぱり料理つつたら裸エブドカツ!!」

私が机を蹴ると机はクロイドの鳩尾へとダイレクトヒットした。

このセクハラ病は何週間経っても治らない。ふっ、まあ私がそれだけ魅力的ってことよね。

クロイドがいつものように「すみませんすみません・・・普通に作ってくださいお願いします・・・。」と、

腹を抑えながら頼んできたので、私は仕方なく作ることにした。

トントントントント

こちらの食材の扱いにも慣れてきた。

どれも美味しいし栄養もある。特にチョコレートとか言うお菓子を

作った人は天才としか思えない。もうすっかり虜だ。

最近お腹周りに少し不安を感じてきている。あっ、少しね？少し。。。

ジュージュー！

学校での様子は・・・そうねえ、祐樹君と、浩太と、咲さんとは良
く話すわ。

一番のお気に入りは祐樹君ね。生徒と先生の危険な恋・・・悪くな
いわ。

別にこつちの世界の昼ドラとか言うものに感化されたわけではあり
ませんよ？

・・・はい、できた。

「クロイドー？できたよ？」

「ダメだ。そんなんじゃ俺は立ち上がれねえ。。。ご飯ができ
たかどうか新婚さんの教えてくれ。」

「ご飯、出来上がりましたよ、あなた・・・って何言わせるんだ
アホッ！

あー、もういいから運ぶの手伝って！」

「えー？顔を近づけて上目使いでおねだりしてくれれば
何かを言いかけたクロイドに、私は包丁を握りなおし、もう一度聞
いてみた。

「普通に手伝う・・・よな？」

「喜んでっ！」

何でコイツは何かマニアックな注文をするんだ……。
ってか、何？レパトリー無限なんですか？

「って、おお〜！！凄いなリータ！相変わらず物凄いできだ！これ
だったらいつでも俺の嫁に迎えてや

キッチンの小さなテーブルに置かれた料理を見て、そう言いかけた
クロイドのわき腹をギュっ！と抓り、黙って運べと笑顔で言った。
褒められるのは嬉しいはずだけど、何だろう、クロイドに褒められ
ると何かむず痒いのよね。

何だろうこの感じは……。不快感かしら。

「いただきます！！！」

そう手を合わせて言うと、クロイドはガツガツと食べ始めた。
……。まあ、こうやって食べてもらえるなら作り甲斐がある……。
かもね。

「美味しいよ。リータ。」

ふと箸を止め、クロイドが真顔で私に言った。

「だっ……。え……。そう……。。」

わ……。何で私ドキドキしてるんだ……。

何だこのドキドキは……。

一人でモジモジし始めた私をクロイドが不思議そうな顔で見たので、
私はごまかすように箸を手に取り、食べ始めた。

む・・・我ながら美味しい・・・

「ふー、食った食った・・・。ごちそうさまー・・・。」

プルルルルッ！！！！

電話の音だ。え、何で？

「はい、・・・もしもし。」

「あ、リータ？突然だけど帰って来てくれない？」

「・・・姫？」

あっ！しまった！救世主を探しにきたんだった！！！！

「え、あ、すみません！まだ救世主は・・・。」

「いや、それはもういいわ。どうせ無理だと思ってたから。こっちでどうにかコンタクト取ってみるわ。」

・・・と、こんなことは今はどうでもいいの。邪族が急に各地で暴れだして、人不足なの。だから急いで帰って来て。」

・・・？よく分からないけど非常事態なことは伝わってきた。

「・・・で、どうやって帰ったらいいんですか？」

「・・・ノリ？」

「ええ?!?!? 帰る方法無しですか?!」

「冗談よ。クロイドに伝えておいたから。そこから来て。」

・・・ホントに非常事態なのかな・・・。

私は電話を切った。

「で、クロイド、どうやって帰ればいいのか?」

「んー・・・とだな・・・。」

帰る方法は意外にも家の中にあった。

何故かお風呂が元の世界と繋がっていたようだ。いや、何かの拍子に帰っちゃったらどうするつもりだったの?

「あ、おかえり。リータ。」

繋がった先でシトリア姫が出迎えた。

・・・何か異世界を旅してきたって感じが0なんだけど・・・。

「リータ、クロイド。早速だけどグオズイに向かってくれる? 物凄く速い馬車は用意しておいた。どうにか・・・頑張つて。」

「リータ!!! 早く行くぞ!!!」

クロイドが張り切って……と言っより焦って私の手を引っ張り、馬車の元へと走っていった。

私達は馬車へ乗り込み、グオズイへ向かった。

クロイドは焦る気持ちを抑えようとしているのか馬車の中で膝を震わせていた。

「……どうしたの？」

私はクロイドに尋ねた。

「グオズイは……俺の故郷なんだよ。」

「えっ……」

なるほど、だからこんなに焦ってるんだ……。

「……着きましたよ。」

運転手が言った。

って、本当に速いっ！……いや、それに越したことはないのだからうけど。

私とクロイドは馬車を降りた。そして、それと同時に私達は言葉を失った。

私達の見る先は、怪我をした人や、ボロボロになった家屋があった。

ふと街の誰かが私達を見つけ、声をあげた。

その声と同時に私達に向けられたのは、嫌悪の目だった。

「今更来て……何を……」「エクサー至上主義が……」

「只の人間は・・・死ねと言ってる・・・」「あれこそ・・・
悪魔・・・」「エクサーを・・・許すな・・・」

人々がそう口々に言った。

今まで黙っていたクロイドが口を開いた。

「リータ。・・・楽しかった。けど、お別れだ。お前がここに居ちやいけない。」

「え、クロイドは・・・」

「俺はエクサーじゃない、医者だ。この街に必要なんだ。リータ。お前には今できることは何一つない。」

クロイドは突き放すような口調で言った。

「・・・帰れ。」

私は黙って馬車に乗った。そうするしかなかった。

さっきと同じように物凄いスピードで走る馬車がリズレバークに着くまでの時間が、限りなく長いような気がした。

番外3：学園リータ(3) (後書き)

こんばんは、甘味です。

ようやく番外編終了です。

次回から何事もなかったかのように本編に戻ります。

では、これからもどうかよろしくお願いします。

第20話：始まりの最初

フランチュールの大暴れも治まった頃、シトリアはすっかりいつも通りに戻っていた。

正直、誰かに恨まれるってのは勿論相当嫌だ。

良いことをするというのがに恨まれるなら尚更。

でも、何ていうのかな……。ここで逃げるって言ったならシトリアが悲しむような気がした。

さっきは俺は早く出て行きたいと言っべきだ、と言われたけど、きつと本心じゃないって分かったし。

んー……。シトリアを悲しませちゃいけないってとっさに思ったんだよな。

って、何考えてるんだろ俺は。

考えるほどよく分からなくなっていく頭の中を振り払うように首をブンブンツ！と振った。

ふと窓から外を眺めるリータの姿が見えた。

その顔はとても悲しそうだった。

「リータ？」

俺は話しかけるべきか少し迷ったが、静かに声をかけた。

リータは俺のほうを向き、聞いた。

「祐樹さんの手当って……。誰がしたんですか？」

「……？いや、名前は分からないけど、とりあえず医者なことは確かだな。」

リータは何故か少し驚いたような顔をして、そうですか……とまた窓を向きなおした。

「知り合い……なのか？」

リータは窓の外を向いたまま答えた。

「以前、共に仕事をしたことがあったんです。彼との時間は、今思うととても楽しいものでした……。」

……でも、救えなかつたんです。彼の故郷を。」

言ってる意味は良く分からなかったが、俺は言った。

「……今度こそ、救おうな。」

俺の言った言葉に、リータが何を感じたのかは分からない。けどリータは、小さく頷いた。

「もうすぐリズレバークです。下車の準備をお願いします。」

運転手の声が聞こえる。

そういえば、そういえば過ぎるが……

「ヴェイって・・・どこだ？」

シトリアも今思い出したように言った。

「あの本・・・えーっと、ここにありますが・・・その、大分前から黙りっぱなしなんです。」

俺はシトリアからヴェイを受け取り、開いた。

前、一瞬だけ中身を見たが、そのときは文字がびっしりと書いてあった。

「文字が・・・消えた？」

リータが驚いた顔をして俺の持つ本を覗き込み言った。

「まさか、1 - 様に何か・・・？」

ふむ・・・確か二代目がどうだとかってやつの話だな。

「その1 - ってやつはどこにいるんだ？」

「リズレバークにいるはずですよ。リズレバークに何かあったのかもしれません・・・。」

「あー、着きましたよ。」

運転手がそういつと馬車は止まった。

俺達は馬車から降りた。

「ふむ・・・特に街には異常ありませんね。丁度いいです。祐樹さんも一度彼女に会ってみましょうか。」

グギョルルルルル！！！！・・・

「・・・と、その前に腹ごしらえですね。うん。」

シトリアは頬を赤らめながら言った。

第20話：始まりの最初（後書き）

こんばんは、甘味です。

ようやく第二章スタートです。

と、言ってもこの話は何だか新しさが無いので、
実は第一章と第二章の狭間のお話だったりします。

次話でようやく第二章らしく・・・なるはずですが、
では、第二章からもよろしくお願いします。

第21話：ルート切り替え

「ああ、食べた食べた。食べましたね。うん。」
シトリアが幸せそうな顔で言う。

「……いや、ま、おいしかったけどさ……。」

「どうしたんですか？」

シトリアが不思議そうな顔で聞いてきた。

リータは俺と同様に居心地の悪そうな顔をしている。
いや、まあ美味しいのはいいんだ。

「ま、美味しかったからあいんじゃないか？」

知らないおじさんが目の前にレギュラー顔でいなければ尚いいんだ。

「………っつーか、誰だよお前は。」

「ちょっと祐樹さん。仕方ないじゃないですか。どこも満席なんですから、少しくらい相席になっちゃっても。」

「……少し……か？これが。」

360度どこを見ても人しかいないこの空間が、か？

「兄ちゃんらあ、旅してんだろう？」

目の前のおじさんが俺に聞く。

「え、ああ、はい……まあ……。」

「いや、だから出た」「ふっ、それほごです。」
シトリアは誇らしげに言った。今ほどコイツに恨みを持ったことはない。

「よおっしい、ではあ、とりあえずここから出るかあ?」

「いえ、この場でいいでしょう。」
ええええええ……シトリアの言葉を聞いてリータと俺はもうどうにでもなれとテーブルに突っ伏した。

「そうかい?じゃあ、早速見てもらおうかあ。」

ゴロゴロとよくわからないものをテーブルに出した。一つ俺の頭に当たり、それは俺の頭にぬるっとした感触を残した。
もう、何か突っ込むのも面倒だな……。

「えーっと、まずこれはよう、あの、伝説の剣士の……弟子が愛用していた……」

「……アイマスク。」

いや、もうそれって、只のアイマスクだろ。

一瞬そんなことを思ったが、口に出すことは無かった。

「……どうしよう。」

シトリアが言った。迷うのか?NOのほうに即決じゃないのか?

「待て、兄ちゃん。こんなものでビックリされちゃあ困るぜい?」

俺は伏せてるのに何で分かるの？いや、当たってねーし！

「仕方ねえ、兄ちゃん。これなら兄ちゃんは絶対気に入るだろうよ。」

おじさんがごそごそと音を立てるので、俺は少し頭を上げて、それを見た。

「……これだぜい。」

俺の中に衝撃が走った。こ、これは……

おじさんは俺を見てニヤリと笑った。

これは……メイド服と言う名の聖服パーフェクトコスチューム!!!これは……まさしく伝説の品アイテム!

スカートのフリルから生まれる芸術的インスピレーション!!!
そして、膝から腿にうかがえる絶対領域おとしのロマン!!!

か、完璧だ……。

いつの間にか俺は天に手を突き上げガッツポーズをしていた。
俺を夢から覚ましたのはシトリアの冷めた目だった。

「……いや、まあ、これは……買いだろ?」

シトリアの目を気にせず俺は言った。

「買いだな。これは、買いだ。うん。っつーか俺が買う。」

そう言ったのはフランチュールだった。

「え、お嬢さん、着るんですかい?」

「えっ、ん、あ、いやこれはだな。その、な。別に俺が着るわけじゃないけどー……。」

フランチュールは頬を赤くして言った。

……是非とも着てほしい。そう思ったのは秘密だ。

「よし、じゃあこれはお買い上げってことでい。」

おじさんはサラサラと値段を書いて、服と共にフランチュールに手渡すと、フランチュールはお金を渡した。

……それから2時間。

結局楽しんでしまった俺とシトリアとフランチュールの買い物は続いた。

リータは死んだように眠っていた。

シトリアはピツツルとか言うよく分からない果物を購入。そしてその場で食べつくした。

そしてアイマスク。インクが切れないペン。切っても切れない爪きりを購入。

最後のは縁結びのお守りだとかどうだとか。ようするに錆びて使い物にならない爪きりにしか見えないのだけど。

フランチュールは、メイド服、くまのぬいぐるみ、毛糸の可愛い帽子、可愛い可愛い赤い靴を購入。

フランチュールはその全てを腕に抱き、満面の笑みを浮かべている。

「別に可愛いから買うわけじゃないぞ！男として……こんな軟弱な品物は責任を持って使……じゃなくて処分するだけだ！」

・・・とのじゆ。

「・・・さて、じゃあ、そろそろ行きましょうか。」

リータは、ようやくかとガバツと起き上がった。

「へっへ、お買い上げありがとうございます。」

そういっておじさんは人ごみの中に何となく消えた。

・・・まあ、結局旅に役立つものは何一つ買えなかったんだけど。

「ああ、物凄く満足です。」

店を出て、シトリアはアイマスクを額にかけながら言った。

「さて、では、早速城に向かおうかと思ったんですけど・・・」

「けっ。」

「・・・もう暗いですし、明日にしましょうか。城までは少し遠いのです。」

こんなグダグダな調子でいいのだろうか。俺は何だか少し不安にな

つ
た。

第21話：ルート切り替え（後書き）

こんにちは、甘味です。

何だか全然進展が無いように見えますが、大丈夫です。進展・・・しております。

このお話は次回に向けての布石の役割を果たしています。それが次話で伝わればいいなあと。

では、これからもどうかよろしく願います。

第22話：勇気の祐樹

「おいっ！そっち持て！」

「え？どこ？」

「右だっつーの！箸持つほう！！」

「右？」

「そっちじゃねえ！！」

「いや、俺にとっての箸を持つほうなのはつきりしてもらわねえと……」

「お前にとっての右！」

「ああ、そっちか。よいしょっ……」

薄らと聞こえた声と共に、俺の脚は軽くなった。

「……誰だお前ら。」

俺が声を出すと、2人の男はあたかも聞こえていなかったかのように、2人で話し始めた。

「……おい、何か起きたっぽいぞ？」

「やばいな。チーさんに怒られちまう。お前がな。」

「え？お前が起こしたんじゃね？」

「いやいや、俺はもう図書館並みの静かな声しか出してないから。むしろ安眠に導くくらいの声しか発してないから。」

「え、いや俺は図書館どころかもはやテレパシーで話してたけど？」

「いやいや、お前はもう年末の工事並みに音立ててたぞ。」

「いや、お前こそ。」

「いや、お前が。」

「いや、おま」おめーらどっちもうるせえんだよ!!!」

永遠に終わらなさそうなやり取りを、俺は怒鳴って止めた。
男達はキョトンとした顔をしたあとまた話し出した。

「おい、やべーよ。マジで起きてるよコイツ。」

「やべーな。軽く起きたフリしてるのかと思ったたらマジで起きてるよ。」

「軽く起きたフリをしてどこか眠くないような雰囲気を漂わせてみただけなのかと思ったのによ。」

「いや、もしくは軽く眠くないフリをして起きた雰囲気を漂わせた
「またそんな感じか?!お前から何しにきた!!!」

いい加減飽きてきたこの展開の中、俺はまた大声で言った。

すっかり暗くなったあの後、俺達は近くの小さな宿に泊まっていた。
シトリア達は三人部屋、俺は一人部屋で眠っていたわけだが・・・。

「お前をさらいに来た。・・・んだっけ?」

男はもう一人に向かって言った。・・・せめてはつきりしろよ。

「おい、おまえらあ?いつまでタラタラやってるんでえすかい?」
何やら昼に聞いた声が聞こえた。

「チーさん!すいやせん!コイツ起きちまったんです!」
男が声を揃えて俺の部屋にドアに向かって言った。

「ったくよう。寝たままで捕まえろって言っただらいい?」

ガチャツと音を立てて入ってきた男は、昼のおじさんだった。

「お前は・・・!!」

「おつい、昼はありがとうございました。でも、こっちはこっちで仕事なんでえ。おとなしく捕まってもらおうって言うことできい。」

「チーと呼ばれたおじさんはそう言ったあと、今度は、俺を捕まえようとしていた二人の男に向かっていった。」

「こっちの女一人にガキ二人は捕まえといたからよう。そっちはもう適当に連れてきてほしいんだぜい。」

外で待つてるからしてえ。急がないと俺が怒っちゃうからよう?」「チーはそういうと男達をギロリと睨んでからゆっくりと部屋を出て行った。」

「は、はいっ!」

男達はポケットからスタンガンと思しき物を取り出すと、俺の首へかざした。

バチバチッ!!と音を立てると、俺は一瞬で意識を失った。

ガタガタツ!!と言っゆれと共に、俺は目を覚ました。

「い、いいは・・・？」

俺はどこかで目隠しをされ、体を縛られていた。このゆれは・・・馬車に乗っているのだろうか。

「祐樹さん・・・起きましたか？・・・何か捕まっちゃったみたい？」

シトリアが小声で言った。

「・・・ま、言われなくても分かるな。」

「どうしましょ？」

シトリアは落ち着いた声でいった。落ち着いている場合じゃなさそうなのがするが。

「どうしましょって・・・どうしようもないだろう。他の二人はいるのか？」

「目隠しされているのでどうにも・・・でも、さっきから声がしないので、たぶん此処にはいない・・・ですね。」

「そうか。」

そういつて俺は深くため息をついた。

・・・何だろう、今凄くピンチなはずなのに、自分が余りにも落ち着いていることに不思議な感覚を覚える。

こっちの世界に来てからこっちの時間感覚が俺の元の世界と変わらなところを考えると、まだ1ヶ月も経ってない。

その間に、色々なことがあった。元の世界で、こんなに色々なことが一気に起こったことがあったか？・・・ないだろう。

俺が救世主だとかどうだとかでこっちの世界にやってきて、シャミューシャと戦って、負けて、勝って。

・・・あれ？・・・で、俺・・・何やったっけ？

馬車で飛んで・・・あと・・・グーズマンと戦って・・・
・落ちた。

・・・何だかな、結局俺は役に立ってない気がするんだよな。

・・・もうな、俺、何しに来たんだ？って感じだな。

「・・・祐樹さん？」

俺の出す物音に気付いたシトリアが、小声で聞いた。それに俺はクスクスと笑いながら答えた。

「・・・で、こんなときこそ、大活躍！・・・ってのが、救世主ってものかなって思うんだ。」

「え？何が・・・」

シトリアの声を無視して、俺は立ち上がり、言った。

「・・・じゃ、ちょっとやってくる。」

暗い馬車の中、俺は懐から武器紙を2枚取り出した。
んー・・・よし、描けた。

俺は近くの小窓を2つ開け、その2つの窓に、描いたあの武器を向け・・・放った。

パヒュツと、弱々しい音を放ったそれはカキンツと何かに引っかかる音がした。

俺は武器から手を離れた。あの、アクション映画とかで見た覚えがある、鍵爪のついた縄を発射する銃を。

その大きめ銃は小窓のところに引っかかった。それと同時に・・・

ガツ・・・ガガガガガツ!!!!!!!!!!キイイイ!!!!!!!!!!

鉄の車輪のきしむ音と共に、馬車は止まった。外では無理に止められた馬が唸っている。

・・・全て計算どおりだ。・・・こんなにうまくいくとは思ってなかったのは秘密だ。

「ど、どうしたんだ!!!!!!!!!!」

後ろから声が聞こえた。ははぁん、さっきのやつらとかリータたちは後ろのもう一つの馬車に乗ってるんだな？

さっきまで意気込んでいた俺だが、急に弱気になって逃げ出したくなつた。

第23話：消えた本と現れた少女

煙の中から現れたのは、真っ黒な服を着た少女だった。・・・お迎えですか？

「祐樹？」

「あ、いや・・・誰？悪魔？」

少女は、少し嘲るような顔をしたあと、言った。

「私の名前は、シトラス。・・・って言っても分からないでしょうね。1 - と言えば分かる？」

「1 - って・・・お前が？」

「まあね。ま、話は後。まだ一匹ゴミが残ってるみたい。」
そういうとシトラスは俺の乗っていなかったほうのがあったところをチラッと見た。

そこには、チーが体についた砂をパツパツと手で払っていた。チーは俺達に気付くと怒っているのか少し大声で言った。

「お前らあ？まったくよう、なーんてことしちやってくれてるんですかい？バカ部下二人は逃げちまったでしょう？」

シトラスはチーをギロツと睨み、言った。

「部下同様に逃げるなら今のうち、ですよ？」

「はん？ばあか。逃げなきゃいけねえのはお前らですよ？」

チーは背中に背負う袋から、ビンを取り出したかと思うと、その中身を俺達に向かってばら撒いた。
その中身は小さな黒い玉のようなもので、地面に落ちても・・・特に何も起きない。

「チツ・・・」

シトラスは舌打ちをした。しかし表情な何だか余裕そうだ。

・・・お前は余裕でも俺は余裕じゃなさそうだ。この匂い・・・やばい。

チーはニヤつとして懐から見慣れた小さな木の棒を取り出すと、シユツと自分の服にすり火をつけた。

そしてその火を黒い玉にめがけてヒョイツ・・・

「座標、 a k f t 2 3 1、 h j f k w b 1 2、 q r k h r t 5 3、
k h r t g b 4 1 2 3 4。」

ベクトル全方向変換。中心oへ。防膜設定10%。」

爆発する直前。シトラスがそうだった瞬間。黒い玉がある場所を大きな四角形の膜が包んだ。

「セット完了。・・・ベクトルムーブ。」

・・・爆発・・・した・・・よな？

うん・・・爆発・・・した・・・はず。

無傷なシトラスは黒い玉があったはずのところへと歩いていった。そこには真っ赤な球体があり、シトラスはそれを手にとってチーに向かっていった。

「さてさて、これは何でしょうか？」

チーは何が起こったのか全く理解できず呆然とシトラスを見る。

「はい、時間切れ、不正解者には・・・罰、ゲー・・・ムッ！！つと！」

シトラスは赤い球体をチーに向かって投げつけた。

ズドオオオオオン！！！！！！！！！！

・・・・・・・・・・。え？

「ふう。」

そういつてシトラスがパンパンツと手を払った。

「お、おい！？今、何があったんだ？！！」

「えーつと・・・ま、祐樹に言っても分からないと思う。さ、とりあえず妹とかを助けましょっか。」

・・・・・・・・・・妹・・・・・・・・？

「え、聞いてないの？シトリアは、私の妹だけど？」

・・・あ、そういえば何だか似てる気がする。って言うかそっくり

だな。

この、何かたまに少しイラッとくる性格も。

俺とシトラスは、もう既に殆ど原型を残していない馬車からシトリアたちを引つ張り出した。

リータとフランチュールはあの爆音の中で眠っていた。・・・のんきなもんだ。

シトラスがシトリアの目隠しをはずすと、シトリアは後ろへのけぞり言った。

「ば・・・化け物!?!」

・・・そりゃないだろ。

「ゆ、祐樹さん!何でコイツが・・・ちよっと、これ、早く撃ってください!!--」

「え?え?」

何で?

俺が訳の分からない顔をしていると、シトリアは「あー、もう!!--」と言って武器紙を取り出しサラサラと書くと、大きな銃器を手に持った。

「いや、ちよっと待て、お前・・・」

俺が止めようとしたとき既に遅く、シトリアはシトラスに向けてでかい一発を放った。そしてそれは直撃した・・・

「・・・貴女ってこんな子だったかしら？お姉さん悲しいわあ。」

・・・はずなのに何で無傷？

「・・・チツ・・・化け物め・・・。」

シトリアがシトラスを睨みつけた。

「ちよ、ちよつと待て！全然話が読めない！」

俺がそういうと、シトラスが先ほど当たったはずの銃弾を手に持ち、まじまじと眺めている中、シトリアが説明を始めた。

「アイツは、あの1 - なんです。全ての知識を持ち、この国でただ1人の・・・無限筆者なんです。」

無限筆者？

俺が疑問を持つ顔を見ると、シトリアはそれについて説明を加えた。

「本来、エクサーは世界に一本だけ線を加えることができる。そんなことを聞いたことがあるはずですよ。」

無限筆者であるアイツは、それが無限にできる。つまり、パンだろ
うが、ペンだろうが・・・爆弾だろうが、何でもその手だけで生み
出すことができるんです。

それだけじゃない、この世界にあるものの全てを自在に操ることができるのです。あるものをどこかへ飛ばしたり、大きくしたり、小さくしたり・・・。」

・・・そうか！だからさっきのは・・・爆発を縮小したってことか。それなら説明がつく・・・よな。

「つまり・・・コイツはこの世界で最強で最悪な災厄なんです。」

「最強って・・・世界の主よりもか？」

「はい。」

・・・え。それじゃ、俺いらなくね？

「ただ・・・。」

シトリアはシトラスをチラッと見ていった。

「アイツに任せると、世界の主どころかこの世界全てを破壊しつくす恐れがあるんです。」

「どっついうことだ？」

「性格に・・・相当問題があるんです。」

シトリアは悲しそうな目で言った。

・・・いや、何それ。

「性格って・・・姉妹なのに、ホントに酷いわね・・・。すっかりいいお姉さんになったってのに。」

シトラスがいつの間にか近くに来て言った。

「・・・じゃあ、何でここにいますか。アナタは研究所で監視の下にいたはずでしょう。」
せっかく、檻の中にいるあなたをみんなで見下してやるうと思っただのに。」

・・・それはそれで性格としてどうなんだ？

「え？だって、妹がこんな・・・こんな楽しそうなことやってるのに、黙ってみてるのはつまらないじゃない？」
シトラスがニンマリと笑いながら言った。

シトリアは、はあとため息をついていった。

「・・・で、目的は何なんですか？」

「いや・・・ヴェイとして会うのも面倒だし、どうせなら直接会って共に人生を歩もうかな？って。・・・ご主人様、とっ」

そういつてシトラスは、腕を折らんばかりにギュッと俺を抱きしめた。

折らんばかり・・・っていうか、心なしかボキッって言わなかった？

「そういうことですか・・・。でも、祐樹さんはこの国に必要なんです。貴女に奪われる訳にはいきません。」

「あら？貴女ってそんなごまかす子だった？私の妹なのに・・・祐樹が欲しいなら、国とか言わないでそう言えばいいじゃない？」

「なっ！ど、どういう意味ですか?!」
シトリアが慌てて言った。

「え？わからなかったの？じゃあ、祐樹にちゃ〜んつと説明してあげよっかな〜？」

もう・・・何かどうでもいいからとりあえず俺を離せ。

普通ならもう、抱きしめられて凄く嬉しい状態かもしれないが、とにかくもう、腕がマズイ。逆に曲がってない？もはや逆に曲がってない？何？この怪力娘。

心地よさっつーか、痛み痛み痛み・・・もう痛みしか感じないけど？

「・・・とりあえず、それを離しなさい。」

シトリアが言った。すると俺は何とか離された。ああ・・・。って言うかまだ痛い。

でも、『それ』って何だ。それって。

「・・・ま、この感じやめましよう？別に私まだ悪いことしたわけじゃないんだから。」

「・・・・・・・・研究所、どうやって出てきたんですか？」

「そりゃ、研究員全員をボコボコに・・・・・・・・。」

・・・化け物だったな。うん。

「で、それで帰れない。どうするつもりなんですか？」
「ま、一緒に旅しようかなーとか思ってる感じかな。」

「嫌です。」
シトリアはきつぱりと即答した。

「それに・・・貴女はもう長くここにはいれないでしょう？」

「・・・ま。そうね。」

「どういうことだ？」

もう、さっきから何だか蚊帳の外にいる感じだ。

「・・・あー、何でこの体にしちゃったのかなー・・・。」
シトラスは悲しそうに自分の体を撫でた。
そして、今度は俺に向かっていった。

「じゃ、あの本。もうちょっと大切にしたいな。ヴェイとして・
・・・この・・・物語を見させてもらうよ。じゃあね。」

そういうと、シトラスはフツ・・・とどこかへいなくなった。

俺は本を取り出した。

本には、字がごちゃごちゃと戻っていた。

第23話：消えた本と現れた少女（後書き）

こんばんは、甘味です。

悲しすぎます、紙一重でヒロインになり損ねた少女、シトラスは僅か2話出て終わりです。残念です。

普段はテンション低いけど、メールとかチャットではテンション上がる人っていますよね？

シトラスはその類の子です。だからヴェイはあんな感じですよ。とうことです。

次回、バレンタインにちなんで番外編。

シトラスも登場するといいなあと思います。

もう、番外編ですから、場所とか時間とか、何でこの人いるの？とかなるかもしれませんが、目を瞑っていたみたいです。

では、次回番外編。よろしく願いいたします。

番外4：バレンタイン大作戦？1（前書き）

PCの不調により、バレンタインが過ぎてしまいました。申し訳ないです。

番外4：バレンタイン大作戦？1

「祐樹さん。ちょっといいですか？」

何だかよくわからない部屋の中。

ここがどこなのかは、まあ、今は伏せておこうか。

俺の名を呼んだのはリータ。手には……………暗黒物質。

「……………それ……………何？」

「チヨコレートです。」

「何で黒いの？」

「原材料にこだわりました！コートジボワールから10キロ直輸入ですよ！」

リータはポンつと自分の胸を叩いて言った。10キロっておい。

「……………いや、色々突っ込みどころがあるんだけどさ……………」

「市販のチヨコを溶かして手作りチヨコと言い張るのはどう思うんだい、祐樹君よ。」

「何で、急にタメ口なんだ。っつーか、もしかして……………カカオがらか？」

「当たり前です。私のチヨコに対する愛情をなめてもらっては困りますね。」

「で、まあ、その失敗作が出来上がったってことか。」

「失敗なんて失礼な！ちよつとビターに仕上がってますけど！」

「いや、それ、焦げてるんだ。無理するな。」

そういうとリータは、ゴホンッ！と咳払いをして、静かな口調で話し始めた。

「と・・・とにかくですね・・・、チョコレートの作り方を教えて欲しいんです。」

「砂糖とか粉乳を入れるってことは確かだけど・・・俺も力力から作ったことは当然の如くないからなあ・・・。って言うかさ・・・誰にあげるの？」

「へ？」

「へっ？って・・・バレンタインが明後日だからチョコを作ってるんじゃないのか？」

「バレンタイン・・・監督？」

「何でそっちを知ってるのにこっちを知らないんだ？」

・・・ふう、バレンタインってのはなあ・・・その、女がだな、日頃お世話になってる人とか、好きな人にチョコを送るイベントだよ。」

「もらえない人は災難ですね。」

そういつてリータはプツ！と吹いた。

「その発言で、世の中の9.5割の男を敵に回したぞ。」

「つまり、アレですか・・・、チョコを使って人間関係を円滑にしようとかそういうのですか。」

「・・・ま、そういう使い方もあるな。」

「でも、ま、私には関係ないですね。」

「お前・・・マジで10キロ分一人で食べるつもりだったのか。」

リータは一瞬固まり、自分のお腹をさすと言った。

「・・・ちゃんと運動しますよ!」

「そういう問題じゃない。」

すると、ガチャっと言う音と共に、見覚えのある男が入ってきた。

「ただいま・・・って、何だ祐樹、来てたのか。」

「あつ、クロイド! 丁度良かった、チョコレート作り方教えて!」

リータがクロイドに向かって言うと、クロイドは顔を赤くして言った。

「・・・まさか、俺にか? 俺になのか?! いやいよお前も俺を求め

・
そういいかけたとき、リータがクロイドの頭をバシッと音がするほど強く叩いた。どうやら、クロイドはちゃんとバレンタインのことを知っているようだ。

「ああ、そう照れるな。俺に任せる・・・完璧なチヨコを作ってるぞ!!」

・・・それって結局お前の作品ってことにならないか？ま、それで幸せならばなにも言うまい・・・。

俺はリータとクロイドがドタバタと台所へ向かう中、誰に言ってもなくつぶやいた。

「・・・何かもう大丈夫そうだな。俺、帰るぞ。」

俺は部屋を出た。

・・・と、言っても帰るところは、この隣の部屋なんだけどな。

俺は徒歩7歩で自宅に到着。

「ただい・・・って、うおっ?!」

玄関に届くほどの悪臭が立ち込めている。

「あ?!祐樹かつ!!ちよ・・・助けてくれ!!」

と、フランチュールの声。何でうちにいるんだ。何でうちの台所にいるんだ。逆に助けてくれ。

「おいおい・・・まったく何やって・・・」

台所上がる火柱を、フランチュールは呆然と眺めている。

「って、おいおいおい？！！！！？！？何で燃えてるの？！何をどうすればこうなってくれるんですかっ？！」

よし、とりあえず落ち着こう。こういうときはタオルを濡らしてだな・・・。

・・・と、何とか沈火完了。これより、事情聴取です。

「・・・で、まず、何をやってた。」

俺の目の前で申し訳なさそうな顔をするフランチュールは答えた。

「その・・・チョコレートを姫に・・・。」

「頼む、どうすればチョコレートがあれば見事に燃えるのか教えてくれ。」

「ほ、ほらっ！チョコレートにお酒入ってるやつあるじゃん？そのノリでチョコにお酒をバアっと・・・。」

「・・・。」

俺が黙って睨むと、フランチュールは居心地の悪そうな顔をして弁解した。

「いや、でもさっ！それを考えたのは俺じゃないぞ！その・・・シトラスがっ！！」

「シトラス？」

「ほ、ほらっ！そこに！」

誰かがこそこそと、台所を出て行った。・・・シトラス・・・。

俺が、おい。と言うと、シトラスはゆっくりと姿を現して言った。

「だ、だって、この子が、あまりにも純粹だから可笑しくって・・・」

「シトラス・・・お前、知ってて言ったのか・・・。」

「とりあえず、この場をきれーいにしろ。それで許すから、もうとりあえず勘弁してくれ。ていうか、自分の家でやってくれ。」

「そ、それだけはやめてくれ！姫は最近、毎日昼ドラ 通販 時代劇の順で常にテレビの前にいるんだ！その目の前で作ったらサブライズ感がなくなるだろ！」

・・・。

「よーし、帰れ。とりあえず綺麗にして帰れ。」

そういつとフランチユールは渋々とこげた壁などを拭き始めた。

「シトラス？勿論お前も同罪だと思っただがどうかな？」

俺はこっそりと部屋の出ようとするシトラスの肩を掴み言った。

「私は・・・えーっと、用事があるからっ!!!!」

シトラスはそういって俺の腕を逆に曲がらんばかりに蹴りつけると、すばやく部屋を出て行った。

「祐樹！終わったぞっ!!」

えっ、早くない？

フランチュールは一目散に部屋を出て行った。

まさか・・・。

・・・俺はボロボロになった壁を少し涙目になりながらも拭き続けた。

番外4：バレンタイン大作戦？1（後書き）

どうも、こんにちは。甘味です。

あんまり更新の間が空きすぎるのも問題なので、とりあえず2話構成と言うことで何となく書きました。

実はこれは後々の伏線に……。

何て言うと、後で回収し忘れそうなので言いません。

皆さんはバレンタイン、どういう風に過ごしましたか？

彼女（彼氏）を隣に幸せでしたか？……

ゴホンっ！いえ、別に悪いとは言いませんとも。

ちなみに私は、自分でちよっと高めのチョコを買いました。

板チョコの分際で500円もするんですよ！

あ、とても美味でした。

では、次話もよろしくお願いいたします。

番外4：バレンタイン大作戦？2

何だかんだでバレンタインデー当日。

俺は近所のコンビニに菓子を買いに行った帰り、

「あ、祐樹さん。今日暇ですか？」

そう言ってきたのはシトリア。

「一緒に『天下統一奮闘記』見ましょう。」

『天下統一奮闘記』とは、

天下取りの將軍達の頑張りを100%おふざけで完全第三者的に説明する番組。

若手芸人が將軍役などを務めていて、完全にくだらない感じになっている。正直、超子供向け番組だ。

・・・で、何で俺はこんな説明をしたのか。

シトリアが指をクリクリと動かしながらブツブツと呟く。

「もう、ホントまったく・・・信さんとかのことをあんなふうにするなんて本当に信じられない番組ですよまったく・・・。」

いや、あのですね、別に心から見たいわけじゃないですよ。

あーゆるー変なのを見て、將軍達の素晴らしさをより、実感するといえますかね・・・。

ほら、スイカだって塩をかけることで余計に甘く感じたりしますよね？ね、それと同じ。

ですから、べ、別にあんなおふざけ番組、毎週楽しみにしているわけではないですし・・・。」

・・・毎週楽しみにしてるんだな。

「え、って言うか、アレって火曜日じゃないか？」

「いえ、大丈夫です。録画してあるので・・・はっ！」

シトリアはしまった！と言った顔で口をふさいだ。

しかし、ゆっくりと口から手を外し、口笛混じりに言った。

「あゝ、フランチユールが録っていた？みたいな感じみたいだった
？ので？いや、録っちゃったものをすぐ削除って勿体無いと思っ
た
り？」

・・・何か少しかわいそうに見えてきた。

「ま、まあ、このくだらない番組と一緒に笑ってやりましょうよ。
・・・で、今日暇なんですか？」

「んー・・・ま、今日は土曜日だしな。じゃ、見るか。」

バレンタインなんて別に特別何かする日でもないしな。

「じゃ、あとで私の部屋に来てください。今日はフランチユールも
バカ姉もいないんです。何でなんですかね？」

「さあ・・・？」

俺は、軽く手を振り2つ隣の部屋に入っていくシトリアを見送ると、
自分の家へと戻った。

・・・そういえば、何故シトリアやリータが物凄く近所に住んでい
るのかは伏せておこうか。

「ただい・・・むおっ!!」

物凄い悪臭。ずっと昔に理科の実験でかいたことのあるにおい。・・・昨日と何だかデジャヴだ。

「・・・フランチュールか・・・?」

台所へ向かった。まあ、大体同じ。唯一の変更点は・・・火柱が立ってないことかな。

「よし、2つ程聞こう。どうやって入った?どうしたらこうなった?」

「えっと、一つ目は、針金・・・」

そういつてポケットから細い針金を取り出す。・・・アレってマジでできるんですか?

「二つ目は、えーっと、アンモニア・・・」
ふむ・・・やっぱりアンモニアか。

「水に入れたら・・・凄く臭くて・・・。」

・・・そりゃそうだ。よく見るとフランチュールは少し泣き目だ。

「もう一つ聞こう。何でアンモニア?」

「チョコにパンチを効かせようとか・・・」
そういつてフランチュールはチラッと台所のドアを見た。

「・・・シトラス。またお前が吹き込んだのか・・・。」

「・・・見つかった？」

「よし、今日こそ綺麗にしる。俺は今からシトリアのどこに行くから、本当に綺麗にしる。」

「なつ、てめえ！！姫とっ」

「いや、待て、逆切れされる義理はないはずだ。」

俺はちゃんとやっておけよ。と言ってシトリアの部屋へと向かった。玄関を出て、刺激臭から解放された感覚は、ちよつと癖になりそうだ。

「お、祐樹さん。来ましたね。」

「あー、うん。菓子もあるぞ。」

そうやって俺はさつきコンビニ買った菓子の入った袋を見せる。

「準備がいいですね！」

そうやってシトリアはニッコリと笑った。

「ささ、どぞどぞ奥に。ソファーやら何やら準備は完璧です。」

奥のリビングへ進むと、・・・うん、ホントに完璧だ。アメリカの映画と違ってこういう感じだよな。ソファーで、ポップコーンみたいな。

「さあてっ」

シトリアがわくわくした顔でリモコンのスイッチを押す。

『てんかとーいっふんとーきっ』

子供の声のタイトルルコールから始まった番組。・・・うん。

手に大きな本を持つ中堅芸人の司会者が言う。

『えー、今日は本能寺の変について何となくやりたいと思います。本能寺についてのことは・・・全て！この本の内に！』

・・・くだらねえ〜・・・。あ、今、どこ笑うべきか分かった？

うん、一から説明しようか。つまりだな、本能寺と、『ほんのうち』をかけたんだ。うん、説明するほどでもなかった。

隣で笑いを堪え肩を震わせているシトリア。

ここで、若手芸人達の登場。光秀役・・・うん、誰だコイツ。信長・・・うわっ。これは酷い。何で信長太ってるんだ。

『ふはははは！！殿！貴様を焼き豚にしてくれる！！』

で、ここでアメリカのコメディっばく観客の笑い声。

『な、何！！てめえ！！裏切るのか！！』

『あん？てめえ、殿とか言われて調子乗ってるんじゃないの？』

『・・・すみません・・・。』

謝っちゃったー！信長、超腰低いっ！光秀、今少し睨んだだけなのにっ！

『ま、いい加減お前に媚びへつらうフリをするのも飽きてきたしな。そろそろ俺が天下とるぜえ！』

『は?! いや、俺なんてもう、天下とる寸前なのに、』 『何か・・・文句あんのか?』

『何もありませんごめんなさい・・・。』

やっぱり謝ったー!! 信長、土下座しちゃったー!!!

・・・結局結構楽しんじゃったわけで。・・・まあ、ああいう番組も甘く見ちゃいけないってことが分かったわけで。っつーか、これ歴史関係ないじゃん。普通にネタじゃね? これ。

シトリアは・・・隣で堪えられなくなって俺の膝に倒れこみ笑い死んでいる。

「おい・・・シトリアー・・・大丈夫かー?」

俺はシトリアの頬をぺちぺち叩いて言った。

「ふふ・・・祐樹ふあん・・・焼きぶ・・・ぶふっ!!」
ダメだ。再起不能だ。

しかし、普段は姫とか呼ばれて結構ツンとしてるシトリアが、こん

なに笑って子供っぽい顔してるのを見たのは初めてかもな……。こうして見ると……。ちょっと可愛かったり。やっぱり子供は子供らしい顔してなきゃだよな……。って、俺はおっさんかよ。

「楽しく……。ないですか？」

シトリアが、俺が何か考えている顔をしているのを見て聞いてきた。

「……。いや。楽しいよ。とても。最高に。」

そう言うとシトリアはニコッと笑って言った。

「私も今、最高に楽しいです。こうして……。祐樹さんと一緒に過ごせて。」

俺はドキッとした。何か……。何か言わなくちゃ……。

「……。俺……。」

シトリアは俺の言葉を遮り、言った。

「ここには女性が男性に気持ちを伝える日があって……。今日、なんですよね。だから……。」

シトリアは、俺が買ってきた菓子のうちの20円チョコを手に取り、包み紙を取った。

「今年は……。ごめんなさい。これを……。」

そういつてシトリアは、俺の口にゆつくりとチョコを入れた。

「来年……。いや、私は全然料理できないから、再来年とかになっちゃうかな……。その……。待っていてくれますか？」

さっきは言葉が浮かばなかった。でも、今度はすぐに浮かんだ。

「ああ、待つよ。いくらでも。ずっと。」

俺がそういうと、シトリアはチョコレートみたいに甘く笑った。
・そして言った。

「……。来月……。期待してますからね」

それか！それが狙いだっただのか？！

しかも、そのチョコ、買ったのは俺だぞっ？！

「来月も……。来年も……。再来年も……。その次も……。その次も……。その次も……。ずっと……。」。シトリアは目をつぶり、自分の胸を撫でながら誰にも聞こえないようにそう呟いた。

「たっだいまー！！って、あっれ……。取り込み中？」

大声で入ってきたのはシトラス。そしてその後ろからフランチューー

ル、リータ、クロイド……。全員集合ですか？

「あっ！わわっ！？いや！違うのっ！」

そういつてシトリアは慌てて起き上がった。

「怪しいなあ、お姉さん、そういう交際関係には目を光らせないと……」

そういつてシトラスはニヤリと笑った。

シトリアはシトラスを無視して言った。

「その……で、皆さんは急にどうしたんですか？」

「その……今日はみんなでパーティーしたいと……シトラスが。」

フランチュールがモジモジしながら言う。後ろに隠しているのは……黒くて甘い……そういうことか。

「で、俺達は買い物とかしてたってこと！」

クロイドが大きな袋を俺とシトリアに見せびらかした。

……みんなが準備をする中、ふとフランチュールが俺をくいくいと引つ張った。

「何？」

「てめえ……その……姫からその……あくん……って……あくんって！……そうじゃなくて……その……」

「あ……って、お前、見てたのっ？！」

フランチュールは、俺の言葉を無視して言った。

「違う……違う……えーっと……お前は……俺の恋敵^{ライバル}。だから……その……友チョコってあるだろ？」

で……その、恋敵^{ライバル}チョコってことで……。これ。……あげる。

「

フランチュールは俺に向かってリボンで綺麗に結ばれた袋をポイッと投げると、みんなのところへと戻っていった。

「フランチュール……はは……ありがとうな。」
俺は誰に言ったわけでもなく呟いた。

準備が終わり、みんなで一つのテーブルを囲んで座る。

「……じゃ……食べましょっか。皆さん、この国の風習は分か
りますよね？」

シトリアがそういうと、全員が勿論！と頷いた。

「手を合わせて……いただきますっ！！！！！」

……

.....

.....

「クロイド……これ。……その……えっと……チョコ作る
の手伝ってくれた……お礼。」

.....

「姫……これ、ちょっと……失敗したかもしれないけど……
頑張って作ったんです。食べてください！」

.....

「リータ……ありがとう。来月はあまりの美味しさに死なないよ
うに覚悟しておけっ！」

.....

「ふふ……ありがとう……これ、美味しいじゃな
い」

.....

.....

「祐樹い、私って凄く偉いと思わない？」
シトラスが言う。

「何で？」

「みんなの今日のために、こんな催し開こうって言ったんだよ？いやーっ、妹には必要無かったみたいけど？」
シトラスはニヤツと笑った。

「…………お前も見てたのか？」

「さあ、どーでしょうっ！？ま、今日は楽しもうよー！」

「はいはい……………」

今日、チョコレート…………もらえた人、もらえなかった人、いると思う。

良くわかんないけど…………なんていえばいいのかな…………。

チョコレートの有無とか関係なく…………全ての人に、幸せな『今日』がありますように。

あ、俺はもらってるからって、こんなこと言ってもむかつくか？…………
まあ、別にどう捉えてもらっても構わないけどさ…………？

『今日』を生きる全ての人に…………ハッピーバレンタイン。

番外4：バレンタイン大作戦？2（後書き）

こんばんは、甘味です。

ようやく、バレンタイン特集終了しました。

結局場所とか時間とか設定とかがうやむやになりましたが、お楽しみいただけたでしょうか？

バレンタイン終わってるのに最後のところ書くのは少し恥ずかしかったですけど……。何とか本編に戻れます。

バレンタイン。私の中では毎日がバレンタインです。

ということ、いつでも私にならチョコレートを送ってもらっても構いません。

チョコレートを郵送するのが大変なら是非『評価』or『感想』をどうぞ。

第24話：終わりの始まり（前書き）

最近更新滞っております。
申し訳ありません。

第24話：終わりの始まり

俺とシトリアは、壊れた馬車の材木に座っていた。リータとフランチュールは今だ眠っている。

俺の隣に座るフランチュールはゆっくりと俺に尋ねた。

「・・・あのバカ姉・・・どう思いますか？」

どう思っつて・・・？

俺が答える前にシトリアは、ふう〜と大きく音を立ててため息をつけて言った。

「あのバカ姉・・・彼女の体の状態は、非常に不自由な状態にあります。それこそ、外に出ることなんて一日中許されないほどに。大量の情報の処理する彼女の脳を支えるために、彼女には普通の人間に必要な量とは比べられないほどの栄養が必要です。」

「ってことは・・・さっきのは。」

「そう、あのバカはバカなりに自分の栄養が足りなくなったことを察知したんです。」

「そっ！そゆこと〜 シトリアちゃんよくできましたあ〜！」

そう言ったのは俺の手に持っている本。

「・・・シトラス・・・。」

「あはは〜 ご主人様〜？私はヴェイですよ〜？」

「うん・・・そのテンションは何とかならないのか？」

「え〜？そんなこと言ってご主人様はヴェイのこと大好きなくせに！きやは！」

シトラス・・・いや、ヴェイがそういうと、シトリアはグルンツ！と俺のほうを向き、キツと睨んだ。

「おい、分かった。ヴェイ。やめろ。いや、やめてください。」

「そんな・・・ご主人様！あの夜に二人で交わした愛は嘘だったのですかっ?!」

「・・・祐樹さん・・・」ポキポキツ！「も〜う、知らない間にそんな関係ですかあ？」ゴキゴキツ！

シトリアは指を鳴らし、俺の肩を掴んだ。

「いや、待て、あの夜って何？昼ドラ？いや、何で？全然信憑性ないだろ？いや、待て・・・」

「話は、今ここでたっぷりと聞かせてもらいましょうか？」

「すみません、待つてください。俺は無実です。」

そんなやり取りの中、ヴェイがやれやれと言った口調で言った。

「あれね？シトリアちゃんとご主人様は喧嘩ですかあ？仲悪いですね〜」

「おい待て、事の発端は全部お前だぞ。」

「・・・ええ!? 何で外?!」

リータとフランチュールが同時に叫んだ。・・・遅すぎ。

シトリアが急に落ち着いた顔で言った。

「二人が起きましたし、少しふざけてはいられませんね。

祐樹さん。今、凄くまずい状況だったこと、分かりますか?」

「ん?」

「奴等、何か言っていないませんでしたか。」

「あ、ああ、確かあのチーとか言うやつが、『仕事だ』って。」

「つまり、誰かに依頼された。そう考えて間違いないでしょう。あのチーは私達を捕獲する目的で昼に接触してきた。どういふことが分かりますか?」

「・・・?」

「私達の行動が、筒抜けってことです。・・・いや、前から分かっていた。裏切り者は、この国にいるんです。」

「・・・全然意味が分からないんだけど。」

するとシトリアは、少しため息をついて続けた。

「私は首都に行く。と事前に一度伝えておいたんです。リズレバークの宮殿・・・いや、まあ私の家にですね。

本当ならばその情報は外に出るはずがない。だから、この国の誰か・・・それも相当な権力者がその情報を使って私達を何やらしようと考えたのです。

そしてソイツは・・・世界の主の配下の人間。」

「何でそんなこと分かるんだ？」

「以前私は、この国中で起きた邪族の関連することについて一気に調べたことがあります。

その中で興味深かったのが・・・リータ。フランチュール。貴方達のこと。

一つはリータが宮殿で何者かに襲われた事件。

そしてもう一つが、フランチュールが国からの依頼で国の持つ倉庫で邪族に襲われたこと。二人とも・・・覚えてる？」

リータとフランチュールは不思議そうな顔をした。・・・覚えてないんだな。

「まあ、いいでしょう。その事件は両方・・・高い地位を持つ人間にしかできないことなのです。

宮殿内には当然それなりの地位の人間しか入ることはできない。

倉庫のことも・・・普段ならば2人の警備兵がついてあるはずでしたが、何故かその日だけその二人が誰かによって警備から外されていたのです。」

「警備？」

「はい、その代わりに邪族が待ち構えていた・・・といったら、世界の主が関連しているのは否めないでしょう。」

「・・・成程。で、結局どうするんだ？」

「そろそろ・・・」

「ご主人様！！」

シトリアが言いかけたとき叫んだのは・・・ヴェイ。

そして慌てた口調で話しはじめた。

「ご主人様・・・落ち着いて聞いてください。私も・・・正直何が起こったのか理解できないのですが・・・。
クレパが・・・『消滅』しました・・・。」

「消・・・滅？どういうことだ？」
クレパといったら・・・俺が最初にきた町か？

「分かりません。クレパに置かれていた私の一部・・・計21冊の全ての反応が今この瞬間に消えたのです。」

するとシトリアが話し始めた。

「いい加減・・・ゆっくりしてられないようですね。行きましょ
う。」

「・・・？」

俺が不思議そうにシトリアを見ると、シトリアははっきりと答えた。

「やつを・・・世界の主を・・・倒すんです。」

・・・いや・・・それはいいけど・・・誰が？

「ご主人様！頑張ってくださいね」

・・・ああ、やっぱり俺・・・。

でもさ、一回誰か聞いてくれない？

・・・俺さあ・・・まだシャミュージャと
しか戦ったくらいしか本当に何もしてないよな？

「さあ、皆さん！行きましょう！」

もう何だが、「いよいよ！」って時、
俺は少し逃げたくなって泣きたくなった。

第24話：終わりの始まり（後書き）

こんばんは、個人的第二章終了です。

第二章はすごく短いですが、まあ、『個人的』、ですので。

次回から最終章。

前代未聞の殆ど戦わない主人公『祐樹』。

彼ももう少しカッコイイところを見せてくれる・・・はずです。

どうか最後まで見届けていただけると嬉しいです。

では、次話以降もよろしくお願いいたします。

第25話：もう一つのプロローグ

真つ暗な部屋の中。

黒いフードを被った男は蝋燭ろうそくに火を灯し、汚れた木のテーブルの上に地図を広げる。

「ねえ……何でこんなことするの？」
女の声。

男は一瞬振り向いたが、またすぐ地図を見ながら言った。

「君には分からないと思うよ。咲。
でも、これはやらなければいけないんだ。どうしても。」

「ホントに……全然分からない。何で私がこんな目に遭わなきゃいけないの?!」

「ここどこなの?!何をしてるの?!何を考えてるの?!」

咲はガチャガチャと音を立てながら泣き叫んだ。

咲の腕は壁に鎖でつながれている。

咲は静かに泣きながら言った。

「何でこんなことになっちゃったの……?浩太君……。」

「……分からない。けれどこれはずっと前から決まっていたんだ。
運命めいどってやつ……かな。」

そういつて浩太は、はは……と笑った。

「でも、もう少しで終わらせることができる……この、最後の『失敗作』を。」

そういつと浩太は地図に四ヶ所画鋏を刺した。

「これで……よし……と。」

「何を……しようとしてるの？」

「君はただ黙って僕の傍に居ればいい。君は邪魔な虫を払ってくれるだけでいいんだ。」

「……」

咲は黙り込んだ。

すると、ガチャッと音を立て誰かが入ってきた。

「世界の主様。どうやら奴等が動き出したようです。」

「いよいよ……か。まあ、いいよ。もう遅い。準備は9割がた整ってる。」

「どういたしますか？」

浩太はそうだなあ……と言って少し考えたと云った。

「クラシユの幹部を何人か……送っておいてくれ。勿論殺したって構わない。この世界の人間には価値なんてないんだから。」

「しかし・・・あの、祐樹とか言う人間は？あれはこちらの世界の人間ではないでしょう。」

祐樹という名を聞いて咲が叫んだ。

「祐樹？！祐樹がいるの？！」

浩太は咲に向かって言った。

「ああ、来ているよ。だから君を連れてきたんだ。」

そして次は入ってきた男に向かって言った。

「・・・愚問・・・だな。僕がこの世界に足を踏み入れた人間に情を移すとも思っただかい？」

「いえ・・・申し訳ありません。他には何かありますか？」

「ああ、西のコトウール、南のリズレバーク。それと・・・東のチレブイン。それぞれにありったけの邪兵を待機させておいてくれ。クレパには・・・必要ない。既に手を加えておいたから。」

「了解しました。・・・では、失礼しました。どうか、世界の主様の最後の願い、叶いますように。」

「ああ、ありがとう。君にも期待しているよ。」

男は深く一礼し、部屋を出て行った。

「さて・・・と。そろそろ始めようか。やっと・・・やっと終わら

せられる・・・ふふ・・・はは・・・はははは！！！！！」

浩太の笑い声が響く部屋の中、咲はただ一人で泣いた。

第26話：亀裂の入った絵（前書き）

また前話から間が空いてしまいました。
申し訳ありません。

第26話：亀裂の入った絵

「何……あれ……。」

シトリアが啞然とした顔で言った。

俺達はクレパに起こった異常を調べるため、馬車でクレパへと向かっていった。

その途中、クレパはまだ大分先にあるはずだが、急に馬車が止まった。

何があつたのかと、馬車から少し降りると、明らかな異常がクレパのある方角に見えた。

「あれが異常の正体……ですね。」
ヴェイが珍しく落ち着いた声で言った。

異常の正体……それは、『無』だった。
比喩的なそれではなく、本当にクレパがあつただろう場所が消えている。

その『消滅』は天にも及び、あの空が白く雲が青い天までもが消えている。

シトリアが話し始めた。

「……これは、世界の主の仕業……としか考えられませんね。
どうやら本当に落ち着いてはいられないようです。」

「……で、どうするんだ。」

「……分りません。完全に先手を取られました。今までも邪族から攻撃は受けていましたが、それは本当に微々たるもの。こんな強引な手段、初めてです。」

フランチュールが難しそうな顔でシトリアに言った。

「って言うか、その、世界の主の目的って何なんですか?」

「分からないわ。今までは侵略……だと思ってたけど、違ってみた。自分のものになる町をわざわざ消すなんて……ありえないもの。」

「っていうか、その……ごめんなさい。あの……凄く皆さんが遅くて、その……ごめんなさい。待ち疲れちゃって……来ちゃいました。」

突然誰かの声が聞こえて、その声の主は現れた。

そいつはシャミューシャ同様に黒いローブを着ていた。

「誰ですか、貴女は。」

シトリアが尋ねると、その女は丁寧に答えた。

「その……私は、メルシイって言います。世界の主様に……その……クレパで待ち構えろって言われてたんですけど、暇だったので、来ちゃったんです……。ホントにごめんなさい……。」

「世界の主?! ってことはお前……。」

「え? あの……その……ごめんなさい。……死んでくれますか?」

そういうと、メルシイは背中から弓を出した。

「祐樹さん……お願いします。もう、何でもいいので。時間もな
いです。」

「……お前はさあ……何で落ち着いてるの？普通に死ねとか言わ
れてるのに。」

「まあ……やるしかないならやるしかないのか？」
俺は何となくつぶやいた。

「これ、武器紙です。」

んー……何を書こう。って、考えてる暇ないな。もう……アレ
でいい。

ピシッ！！

俺の放った鉄球はメルシイに当たった。
しかしメルシイはまったく痛がる様子を見せず言った。

「……シャミューシャさんは格好つけて鎧を着ていませんけど、
私はちゃんと着ています……。その、そんな玩具は……。その……
死んでください！」

メルシイは勢い良く弓を引いて同時に3本の矢を放った。って……
危なっ……！

・・・って、誰もいない?!
俺一人で戦うのか?!あいつらどこに行った?!

「お仲間さんたちは・・・いなくなりましたね・・・。・・・じゃあ、そろそろ普通にお話して構いませんね。」

メルシイは急に饒舌になって弓をしまつと、スラスラと話し始めた。

「率直に言つと、この世界はもうすぐ完全に崩壊します。」

世界の主様の手によって。貴方方が普通に戦おうと、貴方達の抵抗などものともせず計画は進むでしょう。」

「崩壊・・・?」

「ええ、もうご存知かもしれませんが、この世界は所謂一枚の絵。世界の主様はその絵をビリビリに破こうとしてらっしゃるのです。」

「破く、って、どういうことだ?」

「まず、あのクレパ。あれは、世界の主様によって絵に亀裂を入られた状態。当然のことですが・・・亀裂が入れば破れやすくなりますよね?」

それに加えて、西のコトウール、南のリズレバーク、東のチレブイン。この四つの街は・・・いわばこの世界の四つ角に当たります。そのそれぞれに亀裂を加えることによって、この絵・・・この世界は極端にもろくなる。

そしてトドメとして、この絵の中心の地であり、世界の主様の支配化におかれた地。そこに特別強力な一撃を浴びせる。すると、この世界は完全に破けます。

破けるとどうなるか・・・まあ、大体分かるかも知れませんが、

絵と言うものはある一定の面積引き裂かれると、その絵としての価値を失います。

つまりこの世界は価値を失い、消滅。」

そういつてメルシイはパチン！と指を鳴らして見せた。

「そんなの・・・意味わかんねえ。そんなことして、何の得があるんだ？」

「この世界は・・・ヴェルイス様の・・・いや、世界の主様の最後の作品。」

最後にして最大の・・・失敗作なのです。」

「いや、この世界はヴェルイスつてやつが作ったんだろ？世界の主は何も関係ないはずじゃないのか？」

「ヴェルイス様は・・・今も生きています。」

ヴェルイス様は、本当の最後には『自ら』を描いたのです。」

「自ら・・・を？」

「はい。ですから、世界の主様というの・・・ヴェルイス様そのもの。」

だから、世界の主様は、自分の作品であるこの世界を壊そうとしているのです。」

「何で、この世界を・・・？何も悪いところはない。この世界に何の罪がある？」

するとメルシイは天を指差しながら言った。

「あの青い雲、白い空。何の意味があるか分かりますか？
世界の主様は……この最後の作品で、貴方の住む世界とは真逆の
……平和な世界を望まれた。」

世界の主様……ヴェルイス様は、戦いの耐えないそちらの世界に見切りをつけ、新たな世界を創ろうとして、この世界を描いたのです。

……しかし、思い通りには行かなかった。
この世界も戦いに溢れ、差別に溢れ……平和な世界とは言えない。
失敗作となったのです。」

「……。」

「失敗作は消してしまうに限る。そう考えて、世界の主様は今回の計画の決行を決めたのです。」

……少し話すぎましたね。まあ、いい。私はそれだけ貴方に『期待』しているのですから。
さあ、祐樹。私を殺しなさい。」

「……は？」

「貴方の仲間は、私が『特別な矢』でコトウール、リズレバーク、チレブインに送っておいた。世界の主様の計画を阻止するために。祐樹、私を殺して、南へ向かってください。世界の主様の地……ギリードへ。」

何言ってるんだ、協力……してくれてるのか？

「今、私を殺しておかないと、いずれ私は世界の主様の手駒となっ

て今度こそ手加減無しで貴方と対峙することになるでしょう。
だから祐樹、私に人としての意識がある今、殺してください。」

「そんな、意味が・・・」

何で、殺さなきゃいけないんだ？

すると、メルシイは背中から一本の矢を取り出した。

「・・・祐樹、貴方はもうそんな風に迷っていらなくなる。・・・
ま、信じていますよ。きつと、うまくいってくれると。」

メルシイはニコツと笑って、矢を自分の首に突き刺した。

「お前?!何やって・・・」

メルシイはかすれた声で言った。

「南へ・・・向かって・・・ください・・・・・・・・祐樹・・・・・・・・急いで・・・・・・・・」

そういうと、メルシイはその場に倒れこんだ。

第26話：亀裂の入った絵（後書き）

こんにちは、甘味です。

次回からは、祐樹以外の3人それぞれの戦いのお話。そろそろ終わりそうな雰囲気を感じ出してきました。

では、次話もどうかよろしくお願いします。

第27話：シトリアwithシトラス（前書き）

本当に・・・本当にすみません。

また大分時間が空いてしまいました。

第27話：シトリアwithシトラス

「……痛た……ここは……？」
周りを見回す。

ここは……私の第二王女就任で世界中を回ったときに見たことがある。

確か……チレブインっていうところね。

……でも、何でこんなところにいるのかしら？

……ああ、あのメルシイとかいう奴の射た矢に刺さったんだっけ……？

……まあ、いいわ。きつと、何か意図があつてのこと。
彼女は敵じゃないのかしら？

「隊長！侵入者です！」

「えー？何ー？マジ超侵入とかたるいんですけどー？つか、体勢とか整つてねーし、このタイミングで侵入とかありえなくなーい？」

……やっぱり、敵だったみたい。

つていうか、この人は人間……なの？
何て禍々しい顔……

「貴女は……化け物？」

「えー、マジそういう冗談むかつくんですけどー。バリどう見てもフツーだしー？ちょ、自分可愛くないからって拗ねてんのか知らないけどー？」

ふざけんのやめてくんないー?」

私はニツコリと笑って言った。

「あつ!ごめんなさい!余りにも『グロテスク』なお顔だったので、間違えちゃいましたー!」

あれ?っていうか、それ、そのメイクってわざとやってるんですかあ?.....あつ!そっか!すいません!今日はサーカス団が来てるんですね!

ピエロさんは貴女ですか!あー、すいませんホントに!」

「は?マジあんた喧嘩売ってんのー?

このローズ様に勝てるでも思ってたのー?んー?クソガキのお嬢ちゃん?」

「.....うるさいですね。さっきから、むかつくんですよ。その顔といい、話し方といい、顔といい。」

あ、ほら、部下もさっき貴女に話しかけるときめちゃめちゃ嫌そうな顔してましたし。」

「マジなのかてめえ?!」

ローズは物凄い顔で部下を怒鳴りつけた。

部下は話をそらす。

「た、隊長!そんなことより、こいつが世界の主様から言われていた奴等の一人ではっ?!」

「あー.....?.....マジそんなこと知らないんですけどー?」

「ノベル様から人相書きを渡されたでしょう?」

「.....知らねえって言ってるだろーが!」

「.....なくしたんですか?」

「片っ端からぶつ潰せばいいんだろ！」

「・・・なくしたんですか・・・。」

「つつーことだ、クソガキ？仕方ないから、ローズ様が直々にぶつ殺してやるんでー？マジ感謝してほしいってゆーかあ？」

「・・・いいでしょう。これ以上話すのもイライラしますし、どうせ戦う運命だったのでしょう。」

本当は私は戦ってはいけない身なのですが・・・この際・・・そんなことどうでもいい。

『殺す気』で貴女と戦いましょう。」

「つーことで、第一弓隊！マジこのガキ撃っちゃって欲しいんだけどおー。」

「なっ・・・！」

いつの間にか10人近い兵士がローズの後ろから現れ、矢を構えていた。

ちっ・・・まずい。一人だと思ってなめてたか・・・。

私は一斉に放たれた矢を横に飛んで避ける。

「へー、避けれちゃうんだあ？第二戦闘隊！行っちゃって〜？」

すると、一般的な邪族が10・・・いや、20匹ほどローズの後ろから現れた。

私は武器紙を取り出す。

動くのはあんまり好きじゃないけど・・・仕方ないわ。

私は細身の剣を描いた。そして形を思い浮かべた次の瞬間、それは立体の物へと変わる。

「へえ、ここで使うんだあ？それー。」
ローズがニヤニヤと笑いながら言った。

「グギヤオオー!!!」
・・・醜い鳴き声。ふう、気持ち悪いけど・・・。

一匹が襲いかかってきた。
私は飛んできた足を横に避け、そのまま膝に剣を突き刺し、そのまま体を真つ二つに切り裂いた。

「・・・やるじゃーん？」

当たり前。伊達にあのバカ姉の下で生きてない。

私は前衛の三匹に大きく踏み込み、右端の一匹に剣を突き刺し、大きく左に振る。
・・・これで、四匹。

「・・・ふう・・・。。。」
「え〜？もう息上がっちゃってるの〜？マジ雑魚なんですけど〜。そんなんで、このローズ様に逆らったの？って感じだし〜。」

「・・・止まらない口ですね。」
私は手に持っている剣を一匹に投げつけた。

そして、自分の持っている最後の武器紙を取り出し、一瞬で描く。

「……？何それえ〜？そんな細腕でそんなでかい剣振れんの？」

「馬鹿に……するの……やめてもらいましょう……か。……重い。いけるかな？って思ったけど……重い。」

私の体ほどある大剣。

自分でもどこからこれを使いこなす自信がでてきたのか分からないけれど、……どうしよう。

剣を持ちながら少し迷っていると、声が聞こえた。

「シトリア。ガードして。」

「はい？」

私はとつさに剣を自分の前に置く、すると剣に大量の矢が当たって、大きな音を立てた。

「……誰？」

「何、お姉さんの声も分からないくらいに慌てるの？」

声を出していたのは、私の背中に巻かれていた本だった。

「ヴェイ……ですか？」

「いや、シトラスよ。祐樹がいないところで、何でキャラを作らなきゃいけないの？……ま、いいわ。大分まずいみたいじゃない？」

「……別にそんなことは……」

「私、教えなかつたかしら？騎士の心得、第4条。戦いにおいて、常に自分に有利な場所、敵、武器が与えられるとは限らない。

如何なる劣勢に立たされても……」

「自分の有利になる環境を作る……でしたっけ。」

「正解さ、続いて問題です。敵の数は、私の一部から見たところでは、敵の数は弓兵が50人、邪族が100匹ってところ。場所は、左、右には岩壁。背後には少しのスペース、けど行き止まり。つまり逃げ道は無し。武器は体格に見合わない大剣。武器の変更は不可。さあ、どうやって切り抜けますか？」

「……また難しい問題……ですね。」
私が普通に姉と暮らしていた頃、姉は徐々に詰め込まれていく知識を使って、私に問題を出すのが大好きだった。

ローズがイライラとした口調でいった。

「ちょっとお？マジ独り言とかキモいんですけどお〜？
つつかマジ、もうローズ様が直々にぶっ殺してやつからあ？」

そういつてローズは背中から鉄の棒を取り出す。

「……さあ、ここで、ヒント！この辺りの岩は酷く脆いなー。」
「……ああ！……成程。分かりました。正解が。」
「じゃ、早速見せてくれる？」

姉はいつもヒントを出す。飛びつきり分かりやすいヒントを。

「だから1人で喋っててキモいつつーの！」
ローズは私に飛び掛り、棒で突いてきた。私はそれを紙一重に避け

る。

そして、大剣をローズに……ってのは無理。重いから、そんなに早く動けない。

「なっ?!」

ガラガラと言う大きな音と共に、壁は崩れ、ローズと私、他の兵の間に瓦礫の壁ができた。

「……これで一対一、ですね。」

私は、壁に突き刺さった剣を引き抜きながら言った。

「は……どっちにしても、そんな大きい武器扱えないじゃん? 自分に不利な状況作って何にやついてんのお?」

「武器……ああ、この『ゴミ』のことですか?」
そう言っつて私は武器を地面に投げる。

「貴女一人ならば……私の体一つで十分です。」

「……バツカじゃないの?」

ローズは狭い中棒を振り回し、私に近寄る。

ドカツ! バキボキバキヤ! ……ゴキ……! ……ドンドンドン
ドン!! ……

「さて、ここで聞きましょうか? 今、この場で死ぬのはどっちでし
よーか?」

私はローズの鉄の棒をグニヤリと曲げながら言う。

「つつーかぁ・・・化け物って・・・どっちよ・・・？」
「さぁ？どっちでしょうね。」

私は最高の笑顔で、ローズの顔に最高の一撃を浴びせた。

「おー、鮮やかだね。さ、シトリア。西へ向かいましょつか」

「・・・はい？」

「私の一部がギリードが世界の主とやらのお陰で面白いことになつてるのを見せてくれたの。早く行かないとまずいんじゃない？
他の、祐樹と・・・愉快的仲間たちも、きっと今向かってるわ。」

「分かるんですか？」

「・・・いや、勘よ。」

少しの間沈黙が流れた。

私はふうとため息をついてから言った。

「まあ、信じるとうましよう。じゃあ・・・早速行きますか。『面白」ところ』に。」

そう言って私は瓦礫の壁に足をかけた。

第27話：シトリアwithシトラス（後書き）

こんばんは、すみません少し振りです、甘味です。

雰囲気的に四方へと散らばった祐樹と愉快的仲間たちの戦い、『シトリアwithシトラス』編となっております。
シトラスへの未練丸出しの感じになっておりますが、そこは、いいとして。

次話では、リータ編をお送りしようかと思えます。
番外編で沢山出ていながらも、本編ではやはり影の薄いリータが今回こそ頑張ってくれます。と思います。

思えば先日、書き始めてから4カ月が経過しました。
皆様からはランキングのほうに沢山のクリックを頂き、大変励みとなっております。
もう、いくら感謝したって足りないだろう！というくらいであります。

本当にありがとうございました。

・・・そして、残り少ない執筆期間とはなるでしょうが、これからもおしるをよろしく願います！・・・あれ、卒業作文みたいですな。

・・・何はともあれ次話もどうかよろしく願います。

第28話：リータwithクロイド

「・・・痛っ!!」

目が覚めると、私は白い天井の下、白いベッドで眠っていた。

「おお、起きたか。」

「・・・んー・・・何で手え握ってんの？」

「いや、それは事故にあった恋人設定だろう。常識だろ？まったく。」

「あつは！そつかそつか！ごめんごめん！何かこつちの世界の空気になれちゃってさー、あつちの・・・っておい！！何?!この状況はっ!!」

私の手を優しく汗ばんだ手で握っていたのは、クロイドだった。

私は手を大きく振り払った。それと同時に腕に酷い痛みが。どうやら私は大分けがをしているようだ。「つれねーなー」という反応は無視だ。

「っていつか、ここ、どこ？」

「ここは、リズレバークの病院だ。何だか知らないけど、お前が俺のところに降ってきてな・・・」

「それで、私が気絶してるのに乗じてセクハラってこと？」

「そっそっ!!」

「・・・ぶっ飛ばしてやりたい。こいつは。」

けど・・・何だろ、うれしいような・・・何だろう。可愛さ余って憎さ百倍ってやつかしら？

「・・・まー・・・とにかく、ありがとう。助けてくれたみたいで。」

「ん？ああ、気にすんな、そんなこと。ところで、さ。何でこんなところに来たんだ？」

「……あ、それは……あの、メルシイとかいう女に矢で射抜かれて……気づいたらここに。自分でもよく分からない。」

「へえ……あいつが……。」

「知ってるの？」

私がそういうと、クロイドは少しハツとした顔をして「いや、初めて聞く名だな。」と答えた。

「そう……って、こんなことしてられない！ 姫がつ！」

私が慌てて起き上がるうとすると、再び強い痛みが走った。

「……おいおい……寝ていなきや駄目だろう……？」

「へ……？ クロイド、何を……？」

クロイドは私の頬にそつと手をかけ、スルスルと手を私の体に向けて滑らせた。

「ちょ……何、やめ……。」

それでも体は痛み……いや、違う。痺れてるんだ。これは

「おい……今更何を言ってる？ 本当は……俺のことが好きでたまらないんだろう……？」

意味分からない。クロイドってこんなやつだった……？

「ば……い……。」

体中に痺れが回り、呂律すら回らなくなってしまった。

「何？ どうしたんだ？ リータ。誘ってんのかあ？……ま、言われなくてもこっちはもう準備万端……。」

そう言つてクロイドは私の服の中に手を……

「……誰だ、お前。」

・・・え？・・・。

私は声が聞こえたドアのほうを見る。
クロイドが・・・二人？

私の目の前でふわふわしたことをしようとしたクロイドは、女の声で言った。

「ちっ・・・これからが面白いところだったのにー。間の悪いですね。」

「え・・・え・・・？」

・・・やばい、全然喋れない。

急に女の声になったクロイドは、顔の皮をベリベリ！と剥がした。

「え・・・え・・・?!」

この人は、騎士団の入団試験の時の・・・

「お久しぶりです。リータさん もう少しでリータさんとあんなこととかこんなこととか・・・色んなことができたんですけど、残念でしたねー。」

「あ・・・お・・・?!」

「残念でした。私がよく効く薬を飲ませてあげたので、当分は動けませんよ。世界の主様の計画が終わるまでは」

「何だか知らないけど、どうやらお前は敵っぽいな？」

クロイドは元偽クロイドの女に向かって言った。

「申し遅れました。私はクラシユの幹部、兼王国騎士団一番隊隊長のシーラです

以後お見知り・・・あ、そんな必要はないか・・・」

「ベラベラと・・・何がしたい？お前は。」

「だって、貴方達二人はここで『死ぬ』んですからね・・・あ、リータさんは後でゆっくりと色んなことをしてからってことになり

ますけど……」
コイツ……変態だったんだ。

「あ？色んな事?!ど、どんなことだっ?!」
……誰か……ここに変態が二人……。

シーラはクロイドを無視して言った。

「さて、おしゃべりはこれくらいにして、男のほうを片付けますか」

そう言っつてシーラはどこからか剣を抜きだし、クロイドに向けた。

「……片付ける……?面白いな……それ……。」

「でしょう?」

シーラは剣を振りかぶり、クロイドに向かって跳んだ。

「では、さようならっと!!」

「うん、微妙だな。ホントにそれで隊長か?おい。」

クロイドはそう言いながらも少し息切れしながら本気で避けていた。

「あ……こんなの知ってるか?針治療っつーんだけど。」

クロイドはバツ!と手を振り、その瞬間、何か光るものがシーラに向かって飛んでいった。

「針治療っていうのは、ある器官とか、筋肉とかを刺激して治療する……ってやつなだけだよ。」

刺激の仕方によっては、面白いことになる。」

「ぐっ……体が?!」

「体にも力が一番働くところ……とか、そういうのがあるわけだ。」

そこを針で刺す。するとどうなる?」

「……動かない……?!」

シーラは苦しそうな顔をしながら言った。

「はい、大正解。力が一番働く……つまり力の起点となるところ。そこに針を刺してブレーキをかけちまえば、全身に行き渡る力つてのは極端に減る。」
クロイドはニヤツと笑って見せた。

「あとな、力の起点を今、例えつてことでも出してみただよ。生命の起点……つてのも当然あるんだよな。針の届く範囲に。」

そう言つてクロイドは手に一本の針を取り出す。

そしてシーラに向かって思い切り投げた。その瞬間、シーラはその場に倒れこんだ。

「……よし、『片付いた』。楽だったな。」

するとクロイドは私をちらっと見て言った。

「大丈夫。別に殺したわけじゃない。ずっと寝てればそのうち助かる。起点から少しだけずらしといたからな。」

……何よ、こいつ……メチャメチャ強いんじゃない……。

「ほ、え……。」

「さて……次はお前の治療か……」

でも、こんなチャンスめつたにないよな?」

そう言つてクロイドは手をわきわきと動かしながら私を見た。

「は……?！」

「さっきのコイツの色んなこと、『っー』のが気になるけど、まあ、色々やってみてもいいか？」

「こいつ……やっぱり駄目だ！」

「お……!！」

「冗談だよ。早いところ、俺達は行かなきゃならない。北の町……ギリードにな。」

ギリード……世界の主の本拠地か……。

「……でも、やっぱりちょっとだけ色々やってみていい？」

「ク……ド……お!！」

よく分からないけど、私の中には怒りとともに、何か嬉しさがあった……ような気がしたけど、気のせいよね。絶対。

第28話：リータwithクロイド（後書き）

こんばんは、甘味です。

リータの戦いと言いつつ、結局リータは何もせずにとかなりましたね。

さて、今回はフランチュールの戦いです。

そして、この『ラスボスの居る塔とかで、各階に中ボスが待っていて、

階をあげることに【ここは私（僕）に任せて！】みたいな感覚で途中でメンバーに入ったような交流の浅い仲間が減っていく、最終的には主要メンバーだけになる』状態が終了いたします。少し違う気もしますが……。

と、言うことで（？）次話もよろしくお願いいたします。

第29話：フランチュールwith

「ちっ……どっから沸いてきやがるんだ、こいつ等は……!」

俺は人の姿はない街の中、何所からともなく現れる邪族たちを相手に戦っていた。

武器紙は親父からもらったものもあるし、そこは大丈夫だが……この数はさすがにきつい……。

「急に侵入してきて、どんなやつかと思ったら、意外にやるんだなあ、おい。」

「誰だっ!」

私は、声の聞こえたほうに銃口を向けた。

銃口の先には黒い服を着た1人の男が立っていた。

「俺か？俺は、アリシア。」

しかし、何なんだ？急に現れて。アイツには待機してろって言われただけなのによお。」

私はとりあえず銃口をしつかりと男の頭に向けながら言った。

「知るか、んなこと。とりあえず、覚悟しろ。」

「ん……俺と戦うのはやめたほうがいいぜ?」

「何故だ?」

「面倒だからだ。」

「それはお前の話だろ。」

私は話しながらももう一方の手に持つ銃で邪族たちを立て続けに撃っていた。

すると、アリシアは手を上げていった。

「もういい、やめやめ。お前らが何匹かかっててもこいつには勝てないっつーの。無駄死にだ。馬鹿共が。」

すると、うじゃうじゃと現れてきていた邪族たちは止んだ。

私は両手の銃をアリシアに向けて言った。

「・・・で、一対一で俺とやるのか？」

「・・・お腹減らないか？」

アリシアはグウーとお腹を鳴らした。それに誘発して俺のお腹も鳴った。

「何か食べものあるのか？」

「この街の食べ物、全てが俺の物。」

「・・・オーケー。行こうか。」

別に誘いに乗るわけではない。敵のほら・・・動向？を探る？みたいな？とか？と言っやつだ。

「・・・ふう、お腹一杯。」

「だな。」

・・・まあ、結果。コイツは・・・麺類が好きって事が動向？として分かったということに・・・。

アリシアは急に立ち上がって、言った。

「よし、じゃあそろそろ・・・。」

「ん・・・やるのか？」

「ああ、寝よう。」

そういつてアリシアはファ〜とあくびをした。それに誘発して俺もあくびをした。

「・・・寝るか。」

まあ、何だ？寝込みを倒すとかそういう作戦だ。ということだ。

「・・・おはよう。」

「お・・・おはよう。お互い今起きたみたいだな。」

・・・ちっ・・・！何てやつだ。まるで隙がなくて倒すことはできなかったな！。うん。

アリシアは起き上がって、言った。

「よし、じゃあそろそろ・・・。」

「ああ、そうだな。」

「何かして遊ぼうか？」

「いい加減に、しろっ！！」

するとアリシアは驚いた顔で言った。

「な！じゃあ他にすることがあるのかっ?!！」

「俺と戦え！お前、さつきから敵っぽくないんだよ！」

「・・・俺がいつお前の敵だと言った？」

「・・・は？」

第29話：フランチュールwith

(後書き)

こんばんは、甘味です。

ようやく全員終了です。

アリシアさんは本当は女の方でしたが、男女比率のバランスだとか意味の分からないアレによって、名前のみ受け継がれました。

さてさて、

次回、いよいよ最終回。

本当に最終回になるかどうかは気分次第ですが、大体お話は次回で終わりを迎えます。

その後にエピソードがあったり、執筆後記が存在するというのは内緒ですが。

では、次話もよろしくお願いいたします。

最終話・あおのクラウドしろのスカイ（前書き）

本当に・・・すみませんでしたー！

やっと最終話です！いよいよです！

一ヶ月も更新空きましたけど、やっとです！

最終話…あおのクラウドしろのスカイ

「あ

「ん……」

「おお

「ふう

四人其々、適当な言葉を口にして出会った。

何故だか増えてる、二人ほど増えてる。

「えーっと……どちらさまで？」

俺は、フランチユールと一緒に来た男に向かって言った。

「俺は、……ま、自己紹介はこのくらいにしよっぜ。」

「いや、名前すら言っていないだろ。」

「こいつは、アリシアって言うんだ。敵じゃないらしいから、安心してけ。」

フランチユールが代わりに言った。

「それと……」

俺が、リータの隣にいる男をちらりと見ると、リータは言った。

「あ、この人は、この前言った……」

「ああ、あの人か。」

あの、リータと一緒に俺のほうの世界に来てたって言う……

「クロイドだ。」

って言うんですか。

「早く行きましょう。時間がありません。」

シトリアが、遠くを見ながら行った。
リズレバークがあつたはずのところか、クレパと同じように真っ黒に消えているのが見えた。

「・・・そうみたいだな。早く行こう。どっちに行けばいい？」

「ここを真っ直ぐですう。少し先に変な建物が見えましたあ」
ヴェイが言った。何故だかシトリアが少し不快そうな目で見ている。
『さっきまでと全然態度が違うじゃない？』とでも言いたげだ。

「よし、じゃあ行くか。」

7人と1冊は歩き出した。

辺りは一面の森。彼方此方に枝分かれしていた小さな道が、俺たちの出会ったところで一つに纏まっていた。
日はまだ、昇り始めたばかりだ。

「アリシア。お前って、何者なんだ？」
俺は、歩きながら言った。

「んー・・・なんだ、世界の主の配下の中ボスってとこだな。」
「マジか?!こいつ、思いつきり敵だろ?!」

「この人は・・・この国の王子ですね。」

・・・はい？

「ん・・・何、どういふことだ？」

シトリアの発言に、俺以上に驚いているのは、アリシアだった。

「いやいやいや、待て、何？俺が何？何だって？ホワッツ？」

「貴方は、正式な私の兄です。まあ、勘違いじゃないならですけど。」

「勘違いじゃないですう〜！我が兄よっ！」

あ〜、何かややこしく・・・

「あー、そうなの、マジ？俺、何か頭痛くて帰りたいたいんだけど。」

「事が済めば、家のふかふか過ぎて体全部が埋まって抜け出せなくなるようなベッドで苦しみさえ覚えるほどに眠らせてあげますよ。」

アリシアが若干夢うつつで、使い物になるのか微妙になっている中、俺はシトリアに聞いた。

「なあ、それってマジなのか？」

「ええ、本当のことです。よく見れば私たち、似ているでしょう？」

俺はシトリアとアリシアを少し見比べた。

・・・確かに・・・似てる。

「まあ、安心してください！ご主人様っ！私と結婚すればご主人様が王子様で将来的には王様ですからあ〜」

「け、結婚？！そ、そんな、いきなり何を言い出して・・・」

俺より先に驚いて声をあげたのはシトリアだった。

さっきから驚くタイミングを奪われているのは気のせいか。

「何、本気で言ってるの？第二王女は私だし、シトラスは第五王女・

・・・何で？私なら分かるけど、シトラスじゃ、せいぜい第五王子・・・いや、でもシトラスは私の姉だし、ちゃんと王家の血を受けてるし・・・
嘘、だよ、ありえないよね？ないないない、絶対ない。そんなに急

に・・・え、でもでも、本当に？・・・いや・・・えー・・・」

シトリアが何だかブツブツ言っているが、そのうちフランチュールが言った。

「アレか、変な建物ってのは。」

「あー、はい！そうですう」

あー、確かに少し離れたところに・・・うわ・・・確かに変だ。何あれ、ゴミ山？

「何、マジ、本気で言ってるの？シトラス。

いきなり結婚とか、何言い出すの？ありえない？信じられない。何これ、ドラマ？こんなノリってありえないでしょ？」

・・・シトリアが変な状態ですが、いよいよ突入です。

「さあ、入るか。」

フランチユールが、意気込んでドアを開いた。

ドアっていえる代物なのか、何か、穴に蓋がしてあるみたいだが。

「やはり、あいつ等は使い物にならなかったようだな。」

「お前は・・・!」

驚きだ。まさかあいつが・・・

周りは驚いていないが俺にとっては衝撃の事実なんだ。

「浩太・・・何で、こんなところに・・・?」

「久しぶりだな、祐樹。俺に黙ってこんな世界に来てたなんてなあ。」

浩太は入ったところの部屋の中心で、黒い服を着て立っていた。

「こんなつまんない『失敗作』の世界で、よく飽きずにいられたもんだ。」

浩太はヘラヘラと笑いながら言った。

「・・・どういう意味だ?」

「そういう意味だが、何か文句でもあるのか?」

「ある。当然あるよ。」

この世界はちゃんと動いている。人もいるし、物もあるし。何でお前にそれを壊す権利がある?」

「俺が作ったからだ。俺が作ったものを俺がどうしようと、俺の勝手だろ?」

「そんなの・・・いい訳ないだろ・・・。この世界に住む人にも俺

たちの世界に住む人にも、感情はあるんだ。

お前の勝手に壊されて、誰がいい気持ちになれる？」

「くだらないな・・・やっぱりお前はもうこの世界の人間だな。微塵の価値もない。」

「微塵の価値もねえのは・・・お前の方じゃねえのか？」
フランチュールが、銃を浩太に向けながら言った。

「フランチュールっ・・・！」

「悪いな、祐樹。知り合いだから何だか知らないが、こいつは生かしちゃおけない。」

フランチュールが引き金を引くと、大きな銃声が鳴り、浩太に命中した。

「・・・くく・・・弱い。弱すぎる。所詮この世界の人間だ。俺を何だと思っている？」

この世界で一番強い邪族だぞ？お前ら如きの描く武器にやられるとでも？」

「浩太・・・何でお前はこっちの世界に居たんだ？」

俺が言うと、浩太は少し驚いた顔をして、すぐにまたニヤッと笑うといった。

「昔話か？いいぞ別に、俺は全然余裕だからな。」

「質問に答える。」

俺が冷たく言っても、浩太は緩んだ顔を締めずに言った。

「それはな、お前が居たからだ。後で面倒になりそうな芽は、早いうちに摘んでおきたかった。」

「じゃあ、何故やらなかった？」

「それは、誤算だったよ。そこに居る女が学校に来たとき、てっきり祐樹を連れて行くのかと思っていた。二人が一緒になったときに纏めて……って考えてたんだけどな。いつの間にか祐樹だけが居なくなってた。」

「……それだけか？」

「何がだ？」

「お前と会って3年以上、それしか考えてなかったのか？」

「……さあな。自分でも分からない。……やっぱりつまらないな、昔話はやめだ。もう、終わらせる。」

そういうと、浩太は黒い光を帯び、腕が、真っ黒で禍々しい刃のようになつた。

「ちっ……化け物が……」

フランチュールが、また浩太に銃を向けた。

俺はそれを腕を広げ静止した。

「祐樹……てめえ、何してる？」

「悪い、フランチュール。少し、下がっていてくれるか？」

「なっ……」

「頼む。」

俺がそういうと、フランチユールは、ゆっくりと後ろへ下がっていった。

「バカか？祐樹。お前一人で、何をするんだ？」

「決まってるだろ？全てを終わらせてやるんだよ。」

後ろのほうで、フランチユールとアリシアがくすつと笑った気がしたが、気のせいだろう。肝心なときだし。

俺はポケットから紙とペンを取り出し、描いた。

シャミューシャと最初に戦ったときに描いた、聖剣エクスカリバー。只その場にあるだけで邪悪を滅するような、神々しい輝きが辺りを包んだ。

「面白い・・・流石、俺が目をつけておいただけのことはある・・・か。」

「さあ、来いよ。」

俺は指をクイツと曲げていった。

「んじゃ、遠慮なく・・・っと。」

浩太は俺に向けて突進を・・・って、え？

「つつ！！・・・げほっ・・・」

見えない、何も見えないうちに俺は壁にたたきつけられていた。

「何、どうした？ふざけてたら、死んじまつよ？」

浩太はいつの間にか俺の目の前に現れ、ふふんと鼻で笑った。

「うる・・・せえ！」

俺は輝く剣で、目の前の浩太を突いた。はずなんだけど・・・。

「何をしてるんだ？滑稽だな、本当に。」

いつの間にか遠くに離れていた浩太は俺を見て、大声で笑った。

「滑稽なのは・・・お前だよ。」

「チャージ完了っ！お疲れ様です、祐樹さん！」

シトリアがニコツと笑って引き金を引いた。

肩にバカみたいにでかいバズーカ砲を乗せて、端でずっと構えていたのだ。

「なっ・・・」

バズーカから、熱線が発射され、それは浩太に見事命中した。

「・・・・・・終わった？」

熱線は浩太を突きぬけ、建物の柱をも見事に破壊していき、うわわわ！！！！

「早く出ないとまずいぞっ！」

俺の声と共に、一斉に七人と一冊は穴のような入り口から外へ飛び出した。

それから数秒後、建物は大きい音を立てながら崩れた。

「・・・終わった・・・か？」

「あー、やばい、マジで死ぬかと思った。でも、足りないわ。お前ら。」

「・・・終わっていないようだ。」

「いいものも落ちてきたしな。本当はこういう手は好かないんだが。」

浩太は瓦礫の山の頂点で、誰か人間を抱えていた。浩太の腹は、熱線で大穴になっているが、痛そうな素振りはない。

「祐樹・・・祐樹なの?!」

その人間は俺の名を呼んだ、聞き覚えのある声だ。

「咲・・・か?!」

「おー、感動の再会か?ま、そんなの知ったこっちゃないけどな。」

浩太は刃になっている腕を咲の首に突きつけ、ふふんと笑い、大声で言った。

「よーし、今からゲームをしようか。本当は暇じゃないんだが、最後くらい楽しませてやろう。」

俺は今からこの真下に、俺のできる限りの一撃を打ち込む!それがこの世界の終わりだ!

それを止められたらお前らの勝ち、止められなかったら・・・言わなくてもわかるよな?」

浩太は体全体を邪族の姿に変えながら言った。声は野太い声へと変わっていく。

「制限時間は1分だ・・・お前らは俺を止められるか・・・?」

そういうと、浩太は力をため始めた。浩太の周辺はどんどん黒に染

まっっていく。

「ちっ……」

俺は、瓦礫をよじ登り始めた。

間に合うかは知らないけど、四の五の言ってられない。

「祐樹さん……どうやら祐樹さん一人にお願いすることになりそうです……」

シトリアが言った。

周りを見ると、信じられない量の邪族に囲まれていた。

ひい……ふう……みい……では到底数えることはできない、100ずつ数えても時間がかかるほどだ。

「早く行ってください!」

リータが何匹もの邪族を同時に切りつけながら言った。

俺は黙々と登る。……ってか無理だろ!この高さは!足場も悪い上に距離も大分ある。

「よっし、これでオーケー。クロイドさんとやら、手伝ってくれんな?」

「おうよ。」

「……二の……三!」

ズガン、ボガンってな音と共に、俺の目の前で大爆発が起こりました。

果たして、あいつ等は誰を殺そうとしているのでしょうか、俺でしようか。

どうやら、大砲のようなものをぶっ放したような二人は、辺りを見

て「成功だ！」と俺にガッツポーズを見せた。
俺が前を見ると、さっきまで相当な高さだった瓦礫の山が、大砲で消滅・・・というか、吹っ飛び、落ちた浩太が物凄く近くまで来ていた。

「もうちょっと別の狙いどころがあったと思うんだが、ありがとう！」
俺はそう言っただけでまた急いで登る。

そして、俺の体は浩太の発する黒い空間へと吸い込まれていった。

「何処？ここ。」
「祐樹・・・祐樹なの？」

暗闇で誰かが俺の手を掴んだ。声からすると・・・咲か。
それにしても手が、氷のように冷たい。

「早く、真っ直ぐ行けばいるから！」
「あ、ああ。」

俺は何故か平面に変わっていた道を走った。

すると、黒よりももっと黒い黒と言つべきか、禍々しい何かがあった。

「早く、早くあいつを殺して！」

俺はエクスカリバーを力強く心臓に突き刺した。

「……何……で……？」

「……。」

「何で私を斬るの……？祐樹い……何……私……何か悪いこと……したの……？」

「……お前の負けだな……浩太。」

黒い空間が一瞬にして消えた。

上を見上げると、青い雲と、白い空が、何処までも続いていた。

最終話・あおのクラウドしるのスカイ（後書き）

改めまして・・・本当に申し訳ございませんでした。

次回予告。次回はエピソードです。

とりあえずエピソードで本編は終了です。

今まで本当にありがとうございました！

エピソード（前書き）

こつこつのってエピソードとは言いません。
お気をつけください。

エピソード

「あのさあ、何であるの時、私が、私じゃないってわかったの？」
咲が、不思議そうな顔で尋ねた。

「だって、あの場所に本当に咲がいるなんて、思わないだろ？」

「……それだけの理由で斬ったの？」
「うん。」

「……ばーか、死んじゃえ。」

咲は、少し怒った顔で、祐樹の肩を押した。

「痛つ……何だよ、別に、助かったんだから良かっただろ？」

夕方、

祐樹と咲は、二人で誰も居ない小さな道路を歩いていた。

「っていつか、さ。」

咲が、少し早足になりながら言った。

「あの子達とは、……どつという関係？」
「何が？」

「ほら、そのお姫様とかいう……いや、やっぱりいいや。」
「だから、何がだ？」

「んーん、何でもない。」
「……そうか。」

「あ、あのさ？祐樹い。」

「……………」

「……………あー……………ありがとね。今度、パン奢ってあげる！」

「……………お前の命を助けた対価はパンかっ?!」

「いいじゃん！別に！」

「何がだっ!……………ってか、おい、待て！」

咲は、手を振りながら、一人走っていった。

「……………何なんだ、あいつは……………」

祐樹は空を見上げた。白い雲と赤く染まった空が広がっている。

「帰ってきたんだな、本当に。」

嬉しいような、悲しいような、少しばかりの感傷に浸りながら、祐樹は家の門の前に立った。

「あ、『お隣さん』」

「ん……………お隣？」

振り向くとそこには、一人の少女が立っていた。背が低く、笑顔が可愛い少女だった。

「お前は……………」

「あ……………初対面だと思うんですけど、いきなり『お前』です?」

「ん……………ああ、そうだね。」

そういって祐樹が門を開けると、

「つて、ホントに帰るんですか?!何か無いんですか?!
やほーう、ただいま、マイハニー?くらいのこと言わないんですか
?!」

「つていうか、・・・何でここに住んでるんですか?」
二人の男女が現れ、女のほうが露骨に嫌そうな顔して言った。

「あ、リータ、それにクロイド。結婚おめでとうね。」
「え、え、えっ!いや、べ、べ、別にまだ決まったわけじゃ・・・」

「そうなのか!リータ!おめでとう!となると、後は姫と俺が結婚
すればそれで・・・」
また何処からか現れた少女が言った。

「だめよ、フランチユール。私は、『祐樹っていう人』と結婚する
んですから。」

「あらあら!シトリアも大分素直な子に・・・お姉さん嬉しいわあ
) ま、祐樹は渡さないけどね?」

「あの・・・さつきから・・・お前たちはいい加減にしろよ?!
何でいるんだっ?!」

「ん・・・アリシア王子に全部任せてきちやった。」

「おいおい・・・」

「何はともあれ、『祐樹さん』・・・お帰りなさい!」
そういつて可愛らしい少女は、ズイッと背伸びをして、祐樹の唇に
そっとキスした。

祐樹と少女は、顔を見合わせて笑った。

・・・祐樹が二人の少女に其々の理由でボコボコにされたのは、それから程なくしての話だ。

エピソード（後書き）

というわけで、

『あおのクラウドしろのスカイ』

5ヶ月間に渡る執筆が終了しましたー！

途中、色々ありましたが、

・・・それは、この後の執筆後記で語られます。

ではでは！

お暇でしたらこの後の執筆後記をご覧ください

執筆後記（前書き）

注意！これは小説ではありません！

執筆後記

皆様、こんにちは。甘味です。

本日、『あおのクラウドしろのスカイ』の執筆が終了しました。ここまで読んで頂き、ありがとうございます。心から感謝申し上げます。

思えば、自身初の長編小説でした。足りない語彙やら何やらを棚の上にあげて、勢いで書いてまいりました。

書きたいなと思ったのが12月中旬。書き始めたのが、その翌日でした。

何となく空を見て、空は・・・クラウド。雲は・・・スカイだけ？で、何となく語呂が良かったので、

『あおのクラウドしろのスカイ』となりました。ストーリーは実は後付けなんですよね。

その前に突っ込むべきところがありますが、作者は・・・アホなんです。どうしようもないです。

で、よし！書きはじめよう！ってので、まず基本設定としてあったのが、武器紙です。

もう、ファンタジーならこれになって、前から頭の中にあっただすよね。

でも、始めてすぐに気付いたのは『これ、文で書いても意味わかんない・・・』だったんですよね。

祐樹の戦闘が少ないのは、そういうオトナのジジョウ？があつたらだつたりします。

はてさて、そして『あおしろ』の個性的に見えて何だかとてもパクリが多い気がする人物たちについて！

まず、祐樹に関しては適当です。もう、ぶっちゃけ。『モテるキャラ』ってしかプロットに書いてないです。

シトリアはですね・・・別の小説の主人公でした。

一国の姫様が、国を抜け出して、色々な事情から自分の国を滅ぼすって言うお話でした。戦争モノでした。

まあ、姫様ってのは変わらないわけですね。

フランチュールは、・・・はつきり言つて、好きで書きました。

こういう子がいたらいいな・・・って言う、妄想？願望？ですね。

男勝りだけど、可愛いもの好きとか。シトリアに一途だけど、何だかんだでちよつと祐樹に心が揺れてるとか。

そういう、捻じ曲がったアレが色々と混じっているのが、フランチュールです。

リータ？誰それ？

・・・はい。最終話でも殆ど出番がありませんでした。

リータはですね・・・本当は序盤で説明役をさせて、殺すつもりでした！

でも、リータかわいそうなもの、それを殺すなんて残酷なこと・・・

・・・ぶっちゃけ死体の処理が面倒だったので。

シトラスは、一番最初に考えていたヒロインの名前です。

でも、「あつ、シトリアも姫だし、そつちのほうがいいかも?」という意味不明な考えから、消えました。そして、説明役・・・もとい、現れるべくして現れたヴェイに、とっさの思いつきで転生しました。

まあ、メインのメンバーはこんなところですよ。

さて、一月中旬と二月上旬に番外編がありましたよね? 実はアレ、ごまかしなんです。

一月中旬にですね、PCが飛びまして。

二月上旬にも、PCが飛びまして。

もう、小説のプロット全てがぶっ飛びまして。

二回に渡りぶっ飛びまして。三回目はいつ来るんですか? って感じになりました。

あおしろでは、続きをまた新たに考えるために、番外編という荒業にできました。

・・・すいません、あたかも計画していたように見せかけて、完全に無計画でした。

番外編に関しては、バレンタインのアレも含め、全部勢いです。

本編も勢いですが、もっと勢いでした。

本当はバレンタインとかそーゆーのアレだから、完全無視で完全スルーのつもりでした。

ふう、とりあえずがんばったんだよ! ってことを言いたかっただけ

なのは秘密です。

よし！これで、あおしろは終了です！他の作品にてまたお会いしましょう！

皆さん、本当に今までありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7614f/>

あおのクラウドしろのスカイ

2010年10月11日03時48分発行